

若栗中村遺跡
舌山遺跡
宮沢釈迦遺跡

発掘調査報告

—北陸新幹線建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告Ⅱ—



2010年



若栗中村遺跡 遠景（西から）



舌山遺跡 S I 1（西から）



舌山遺跡 出土石製品

若栗中村遺跡
舌山遺跡
宮沢釈迦遺跡

発掘調査報告

—北陸新幹線建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告Ⅱ—

2010年

序

北陸新幹線は、日本海沿いに上越市、富山市、金沢市、福井市等の主要都市を經由し、東京と大阪を結ぶ路線として計画され、その一部の金沢市までの建設が進められています。その建設に先立ち、当事務所では、計画路線内の遺跡で平成13年度から発掘調査を実施してまいりました。

本書は、平成15年度、16年度に調査を実施した若栗中村遺跡、舌山遺跡、宮沢釈迦遺跡の成果をまとめたものです。

この三遺跡は、黒部川左岸の扇状地扇央部から丘陵にかけて、黒部市を横断するように点在します。発掘調査の結果、縄文時代中期から近世に至るさまざまな時代の生活の姿が明らかになりました。扇状地の若栗中村遺跡では、縄文時代後期から晩期にかけての河川跡と、室町時代から江戸時代にかけての掘立柱建物や区画溝がみつかりました。また、扇状地と丘陵の境目にある舌山遺跡では、川岸に点在する縄文時代中期の竪穴建物が確認され、黒部川扇状地一帯を生活の場とする集落跡と考えられます。

こうした発掘調査の成果が、文字の記録には現れることのない人々の生活をひもとく一助となり、地域の歴史と文化財の理解に役立てば幸いです。

本書をまとめるにあたり、ご協力とご指導を頂きました関係機関および関係諸氏に厚く感謝申し上げます。

平成22年3月

財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
所長 岸 本 雅 敏

例 言

- 1 本書は富山県黒部市若栗地内に所在する若栗中村遺跡・舌山遺跡，同宮沢地内に所在する宮沢釈迦遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構からの委託を受けて，財団法人富山県文化振興財団が行った。
- 3 本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記の通りである。

調査期間	若栗中村遺跡	平成15(2003)年5月19日～12月15日
		平成16(2004)年5月1日～9月10日
	舌山遺跡	平成15(2003)年7月8日～10月17日
	宮沢釈迦遺跡	平成16(2004)年8月10日～11月5日
整理期間		平成20(2008)年4月1日～平成22(2010)年3月31日
- 4 本書の編集・執筆は，金三津道子が担当した。
- 5 石製品・金属製品の実測は，株式会社アルカ，日本海航測株式会社に委託した。
- 6 遺物の写真撮影は，写房楠華堂（代表 内田真紀子）に委託した。
- 7 自然科学的な分析は下記の諸機関に委託し，その成果について報文を得た。

骨片同定・石材鑑定……	(株) 古環境研究所
放射性炭素年代測定……	(株) 加速器分析研究所
- 8 発掘調査から本書の作成に至るまで，下記の方々から多大な御教示・ご協力を得た。記して謝意を表したい。（敬省略，五十音順）

酒井重洋，新宅輝久，菅田 薫，宮田進一，山本正敏
黒部市教育委員会，富山県教育委員会，富山県埋蔵文化財センター

凡例

- 1 本文・挿図で扱った遺構・遺物は、一覧表に掲載している。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。
- 3 挿図の縮尺は下記を基本とし、各図の下に縮尺率を示す。
遺構 竪穴建物：1/40，建物：1/100，溝：1/40，土坑：1/40・1/80
遺物 土器・陶磁器：1/3～1/4，石製品：1/3，金属製品：1/3
- 4 遺構の略号は以下のとおりである。
SB：建物，SD：自然流路・溝，SI：竪穴建物，SK：土坑，SP：柱穴，
SX：倒木痕・水田遺構・その他
- 5 遺構番号は、調査時に地区ごとに付した番号に一定の数値を加算して遺構番号とした。番号は、遺構の種類にかかわらず連番とするが、建物には新たに番号を付した。各地区の遺構番号に加算した数値は次のとおりである。
若栗中村遺跡 A1地区：加算せず，A2地区：+200，A3地区：+300，B地区：+600，
C1地区：+800，C2地区：+1,400
舌山遺跡 A1地区：加算せず，A2地区：+200
宮沢釈迦遺跡 加算せず
- 6 遺物は遺跡ごとに連番を付す。本文・挿図・一覧表・写真図版の遺物番号は全て一致する。
- 7 遺跡の略号は、市町村番号に遺跡名を続け、若栗中村遺跡では「07WN-地区名」，舌山遺跡では「07SY-地区名」，宮沢釈迦遺跡では「07MS」とし、遺物の注記には略号を用いた。
- 8 遺物の煤付着部分、遺構の地山及び炭化物層等は以下のとおりに示す。これ以外については、図中に凡例で示した。

煤・コゲ・炭化物



地山



- 9 土層及び遺構埋土の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参照した。
- 10 遺構一覧及び本文中で用いる遺構についての用語は以下の文献を参考にした。
掘立柱建物：奈良国立文化財研究所 1976『平城宮発掘調査報告VII』
- 11 遺物のうち、珠洲・輸入陶磁器・瀬戸美濃・中世土師器の分類と編年に関する用語は以下の文献を参考にした。
珠洲：吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
輸入陶磁器：山本信夫 2000『太宰府市の文化財第49集 太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編』
太宰府市教育委員会
森田勉 1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の型式分類について」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
瀬戸美濃：藤沢良祐他 2005「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相-生産技術の展開と編年-』中央大学文学部日本史学研究会

中世土師器：越前慎子 1996「梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

12 遺構一覧・遺物一覧の凡例は以下のとおりである。

- ①遺構の埋土に切り合い関係がある場合は、備考欄に新>古のように記号で示す。
- ②規模・法量の（ ）内は現存長を表す。
- ③重量は g 単位で示す。計測は大きさにより台秤と電子秤を使い分けた。
- ④胎土色調・釉色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』・財団法人日本規格協会『標準色票 光沢版』を使用し、釉調の和名は小学館『色の手帖』より似たものを使用した。なお、陶磁器のうち複数の色がみられる場合は最も多く使用されている色を記し、その他は特記事項に記す。但し透明釉の場合は記入しない。

目次

第Ⅰ章 調査経緯	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査方法と経過	4
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	9
1 地理的環境	9
2 歴史的環境	10
第Ⅲ章 若栗中村遺跡	14
1 概要	14
2 既往の調査	14
3 基本層序	14
4 遺構・遺物	17
5 まとめ	50
第Ⅳ章 舌山遺跡	58
1 概要	58
2 基本層序	58
3 遺構・遺物	58
4 まとめ	84
第Ⅴ章 宮沢釈迦遺跡	94
1 概要	94
2 基本層序	94
3 遺構・遺物	94
4 まとめ	95
第Ⅵ章 自然科学分析	101
1 富山県舌山遺跡・若栗中村遺跡・宮沢釈迦遺跡における石材鑑定	102
2 若栗中村遺跡出土骨（動物遺存体）同定	109
3 若栗中村遺跡，舌山遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	113

報告書抄録

卷首図版目次

卷首図版 1 若栗中村遺跡遠景 舌山遺跡 S I 1

卷首図版 2 舌山遺跡出土石製品

挿図目次

- 第1図 調査位置図
- 第2図 北陸新幹線関連埋蔵文化財包蔵地位置図
- 第3図 若栗中村遺跡調査区区分割図
- 第4図 舌山遺跡・宮沢釈迦遺跡調査区区分割図
- 第5図 地形図
- 第6図 周辺の遺跡
- 第7図 若栗中村遺跡 既往の調査
- 第8図 若栗中村遺跡 縄文時代遺構実測図
SD1299 SD1369
- 第9図 若栗中村遺跡 縄文時代遺構実測図
SD1089 SD1398
- 第10図 若栗中村遺跡 縄文時代遺構全体図 C地区
- 第11図 若栗中村遺跡 縄文時代遺構実測図
SK872 SK876~878 SK907 SK972
SK1033 SK1190 SK1205
- 第12図 若栗中村遺跡 縄文時代遺物実測図 (縄文土器)
SD1089 SD1398 包含層
- 第13図 若栗中村遺跡 縄文時代遺物実測図 (縄文土器・土製品・石製品)
SD1089 SD1398 包含層
- 第14図 若栗中村遺跡 遺構全体図 A1地区
- 第15図 若栗中村遺跡 遺構全体図 A2地区
- 第16図 若栗中村遺跡 遺構全体図 A3地区
- 第17図 若栗中村遺跡 遺構全体図 B地区
- 第18図 若栗中村遺跡 遺構全体図 C1地区下層
- 第19図 若栗中村遺跡 遺構全体図 C1地区上層
- 第20図 若栗中村遺跡 遺構全体図 C2地区
- 第21図 若栗中村遺跡 中世~近世遺構実測図
SB1 SB2
- 第22図 若栗中村遺跡 遺構全体図 A地区
- 第23図 若栗中村遺跡 中世~近世遺構実測図
SD11 SD212 SD301 SD303 SD307
SD309 SD311 SD319 SD321 SD323
SD330 SD343 SD352 SD453 SD713
SD715 SD716
- 第24図 若栗中村遺跡 中世~近世遺構実測図
SD1406 SD1421 SD1422 SX1405
- 第25図 若栗中村遺跡 中世~近世遺構実測図
SK4~6 SK8 SK10 SK18 SK38
SK46 SK50 SK52
- 第26図 若栗中村遺跡 中世~近世遺構実測図
SK222 SK302 SK306 SK523
SK843 SK850
- 第27図 若栗中村遺跡 中世~近世遺構実測図
SK335~337 SK522 SK946 SK947
- 第28図 若栗中村遺跡 中世~近世遺構実測図
SK665 SK1002 SK1029 SK1121
SK1202
- 第29図 若栗中村遺跡 中世~近世遺物実測図 (土器・陶磁器) SD1421 SK306 SK522
SX1405 包含層
- 第30図 若栗中村遺跡 中世~近世遺物実測図 (陶磁器・土製品・石製品) SX1405 包含層
- 第31図 若栗中村遺跡 中世~近世遺物実測図 (陶磁器・金属製品) 包含層
- 第32図 舌山遺跡 遺構全体図 A1地区
- 第33図 舌山遺跡 遺構全体図 A2地区
- 第34図 舌山遺跡 縄文時代遺構実測図 SI1
- 第35図 舌山遺跡 縄文時代遺構実測図 SI2
- 第36図 舌山遺跡 縄文時代遺構実測図 SI3
- 第37図 舌山遺跡 縄文時代遺物実測図 SI2 SI3
- 第38図 舌山遺跡 縄文時代遺構実測図 SD3
- 第39図 舌山遺跡 縄文時代遺物実測図 SD3 SD4
- 第40図 舌山遺跡 縄文時代遺構実測図
SD232 SD239 SD245 SD253
- 第41図 舌山遺跡 縄文時代遺物実測図 (縄文土器)
SD232
- 第42図 舌山遺跡 縄文時代遺物実測図 (縄文土器・土製品) SD232
- 第43図 舌山遺跡 縄文時代遺構実測図

- SK15 SK55 SK63 SK207
SK218~222 SK228 SK229 SK236
SK241 SK266
- 第44図 舌山遺跡 縄文時代遺構実測図
SK209 SK223 SK230 SK233 SK235
- 第45図 舌山遺跡 縄文時代遺物実測図（縄文土器）
SK209 SK218 SK222 SK223 SK230
SK235 SK242
- 第46図 舌山遺跡 縄文時代遺物実測図（縄文土器）
SK233 SK236 SK258
- 第47図 舌山遺跡 縄文時代遺物実測図（縄文土器）
包含層
- 第48図 舌山遺跡 縄文時代遺物実測図（石製品）SD3
- 第49図 舌山遺跡 縄文時代遺物実測図（石製品）
SD3 SK221 SK223 SK230 SK241
包含層
- 第50図 舌山遺跡 縄文時代遺物実測図（石製品）
SI1 SD3 SK222 包含層
- 第51図 舌山遺跡 遺構全体図
- 第52図 宮沢积迦遺跡 遺構全体図
- 第53図 宮沢积迦遺跡 縄文時代遺構実測図 SI1
- 第54図 宮沢积迦遺跡 遺物実測図（縄文土器・陶磁器・
石製品・金属製品）SI1 SK4 SK5
包含層

写真図版目次

- 図版1 航空写真
- 図版2 航空写真
- 図版3 若栗中村遺跡 遺跡遠景
- 図版4 若栗中村遺跡 A1地区全景
- 図版5 若栗中村遺跡（中世～近世）土坑 SK10
SK18 SK38 SK52
- 図版6 若栗中村遺跡（中世～近世）掘立柱建物
A2地区全景 SB1 SB2
- 図版7 若栗中村遺跡（中世～近世）掘立柱建物・柱
穴・溝・土坑 SB1 SB2 SD212
SK222 SP209
- 図版8 若栗中村遺跡 A3地区全景
- 図版9 若栗中村遺跡（中世～近世）溝・土坑
A3地区上層全景 SD301 SD456 SK302
SK522
- 図版10 若栗中村遺跡（中世～近世）溝・土坑
B地区全景 SD709 SD716 SK665
- 図版11 若栗中村遺跡 C1地区全景
- 図版12 若栗中村遺跡（縄文時代・中世～近世）溝・
土坑 SD1089 SD1299 SD1369
SD1398 SK972 SK1121
- 図版13 若栗中村遺跡（縄文時代・中世～近世）溝
C2地区全景 SD1421
- 図版14 若栗中村遺跡（縄文時代）土器・土製品
SD1089 SD1398 包含層
- 図版15 若栗中村遺跡（中世～近世）土器・陶磁器・
土製品 SK522 SX1405 包含層
- 図版16 若栗中村遺跡（中世～近世）土器・陶磁器
SD1421 SK306 SX1405 包含層
- 図版17 若栗中村遺跡（中世～近世）陶磁器 包含層
- 図版18 若栗中村遺跡（中世～近世）陶磁器
SX1405 包含層
- 図版19 若栗中村遺跡（中世～近世）陶磁器 包含層
- 図版20 若栗中村遺跡・宮沢积迦遺跡（中世～近世）
金属製品 包含層
- 図版21 舌山遺跡 遺跡遠景 A1地区全景
- 図版22 舌山遺跡（縄文時代）竪穴建物 SI1
- 図版23 舌山遺跡（縄文時代）竪穴建物・溝
SI1 SD3 SK120
- 図版24 舌山遺跡 A2地区全景
- 図版25 舌山遺跡（縄文時代）竪穴建物・土坑
SI2 SI3 SK222
- 図版26 舌山遺跡（縄文時代）土器
SI3 SD3 SD232 SK222
- 図版27 舌山遺跡（縄文時代）土器
SI2 SD3 SD4
- 図版28 舌山遺跡（縄文時代）土器・土製品 SD232
- 図版29 舌山遺跡（縄文時代）土器 SK209 SK218
SK222 SK223 SK230 SK235 SK242
- 図版30 舌山遺跡（縄文時代）土器
SK233 SK236 SK258
- 図版31 舌山遺跡（縄文時代）土器 包含層
- 図版32 舌山遺跡（縄文時代）石製品 SD3
- 図版33 舌山遺跡（縄文時代）石製品 SD3

図版34	舌山遺跡・若栗中村遺跡（縄文時代） 石製品 舌山：SD3 SK221 SK223 SK230 SK241 包含層 若栗中村：包含層	図版36	舌山遺跡・若栗中村遺跡（縄文時代・中世～近世） 石製品 舌山：SI1 SD3 SK222 包含層 若栗中村：包含層
図版35	舌山遺跡・宮沢积迦遺跡（縄文時代） 石製品 舌山：SD3 宮沢积迦：包含層	図版37	宮沢积迦遺跡（縄文時代） 全景 SI1 SK24
		図版38	宮沢积迦遺跡（縄文時代・近世） 土器・陶磁器 SI1 SK4 SK5 SK24 包含層

表目次

第1表	北陸新幹線関連埋蔵文化財包蔵地調査一覧
第2表	調査一覧
第3表	周辺遺跡一覧
第4表	若栗中村遺跡 基本層序
第5表	若栗中村遺跡 縄文時代溝一覧
第6表	若栗中村遺跡 縄文時代土坑一覧
第7表	若栗中村遺跡 倒木痕一覧
第8表	若栗中村遺跡 中世～近世掘立柱建物一覧
第9表	若栗中村遺跡 中世～近世柱穴一覧
第10表	若栗中村遺跡 中世～近世土坑一覧
第11表	若栗中村遺跡 中世～近世溝一覧
第12表	若栗中村遺跡 縄文土器・土製品・土器・陶磁器一覧（1）・（2）
第13表	若栗中村遺跡 石製品一覧
第14表	若栗中村遺跡 金属製品一覧
第15表	舌山遺跡 竪穴建物一覧
第16表	舌山遺跡 柱穴・炉一覧
第17表	舌山遺跡 溝一覧
第18表	舌山遺跡 倒木痕一覧
第19表	舌山遺跡 土坑一覧
第20表	舌山遺跡 縄文土器・土製品一覧（1）～（5）
第21表	舌山遺跡 石製品一覧
第22表	宮沢积迦遺跡 竪穴建物一覧
第23表	宮沢积迦遺跡 柱穴・炉一覧
第24表	宮沢积迦遺跡 溝一覧
第25表	宮沢积迦遺跡 土坑一覧
第26表	宮沢积迦遺跡 縄文土器・陶磁器一覧
第27表	宮沢积迦遺跡 石製品一覧
第28表	宮沢积迦遺跡 金属製品一覧
第29表	自然科学分析一覧

第 I 章 調査経緯

1 調査に至る経緯

(1) 調査の契機

北陸新幹線は、東京を起点として高崎、長野、富山、金沢、福井を経由し大阪に至る延長約700kmの路線である。昭和48（1973）年に整備計画が決定し、全国新幹線鉄道整備法のもと建設工事が進められている。平成13（2001）年には上越・富山間が、平成17（2005）年には富山・金沢間の建設工事が、それぞれフル規格で着工しており、平成26（2014）年度までの完成が予定されている。

北陸新幹線の富山県内における駅及びルート概要は、昭和60（1985）年に日本鉄道建設公団（現独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、以下、鉄道・運輸機構）から富山県教育委員会（以下、県教委）に示され、路線予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて、日本鉄道建設公団北陸新幹線第二建設局（現鉄道・運輸機構）・県教委・富山県埋蔵文化財センター（以下、県センター）により協議が行われた。その結果、埋蔵文化財の分布状況を把握するため、路線敷の用地買収完了地域で早急に分布調査を実施することとなった。

(2) 分布調査

昭和60（1985）年、県教委と県センターにより路線敷全長63.9kmのうち約38kmについて分布調査が行われ、周知の包蔵地を含め県東部で16箇所、県西部で11箇所の埋蔵文化財包蔵地が確認された。平成7（1995）年には、未調査となっていた黒部市浦川端～舌山間約3kmについて県センターが分布調査を実施し、周知の包蔵地3箇所が再確認された。平成14（2002）年、県センターと当該市教育委員会によって新黒部～富山間の未調査部分について分布調査が実施された。その結果、新たに埋蔵文化財包蔵地4箇所が発見され、周知の包蔵地3箇所が再確認された。

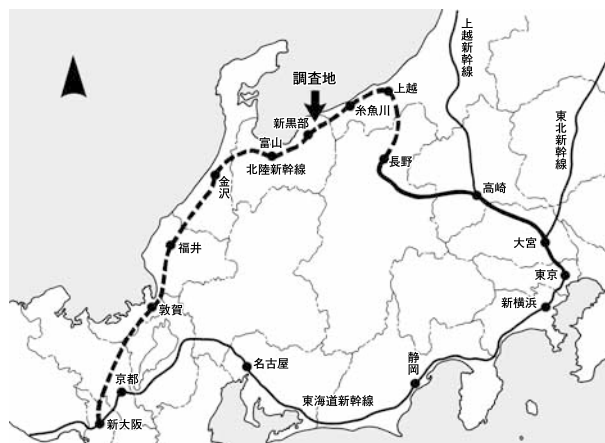
北陸新幹線の建設に先立ち、用地内の埋蔵文化財包蔵地の確認調査の要望が鉄道・運輸機構から県教委に出された。両者の協議の結果、確認調査を財団法人富山県文化振興財団（以下、財団）に依頼することとなった。

(3) 確認調査

平成8（1996）年、鉄道・運輸機構の委託を受けて、財団は小矢部市下川原遺跡において確認調査を実施した。その結果、古墳時代と古代の遺構・遺物を確認し、本調査の必要な面積は、約3,200m²と確定した。

平成11（1999）年には、入善町HS-11・HS-12、朝日町HS-13において確認調査を実施した。その結果、HS-13で古代から中世の遺構・遺物を確認し、竹ノ内Ⅱ遺跡と命名し、本調査の必要な面積は約5,000m²と確定した。

平成12（2000）年には、朝日町竹ノ内Ⅱ遺跡・柳田遺跡・井ノ口城跡・下山新東遺跡・下山新遺跡において確認調査を実施し、井ノ口城跡を除く



第1図 調査位置図

1 調査に至る経緯

各遺跡で遺構・遺物を確認し、本調査の必要な面積は合計約24,200㎡と確定した。

平成13（2001）年には、黒部市若栗中村遺跡の一部について、確認調査を実施し、中世の遺構・遺物を確認した。

平成14（2002）年には、朝日町井ノ口城跡及び黒部市若栗中村遺跡の未調査部分と黒部市舌山遺跡の確認調査を実施した。その結果、井ノ口城跡を除く各遺跡で遺構・遺物を確認し、本調査の必要な面積は合計約11,500㎡と確定した。

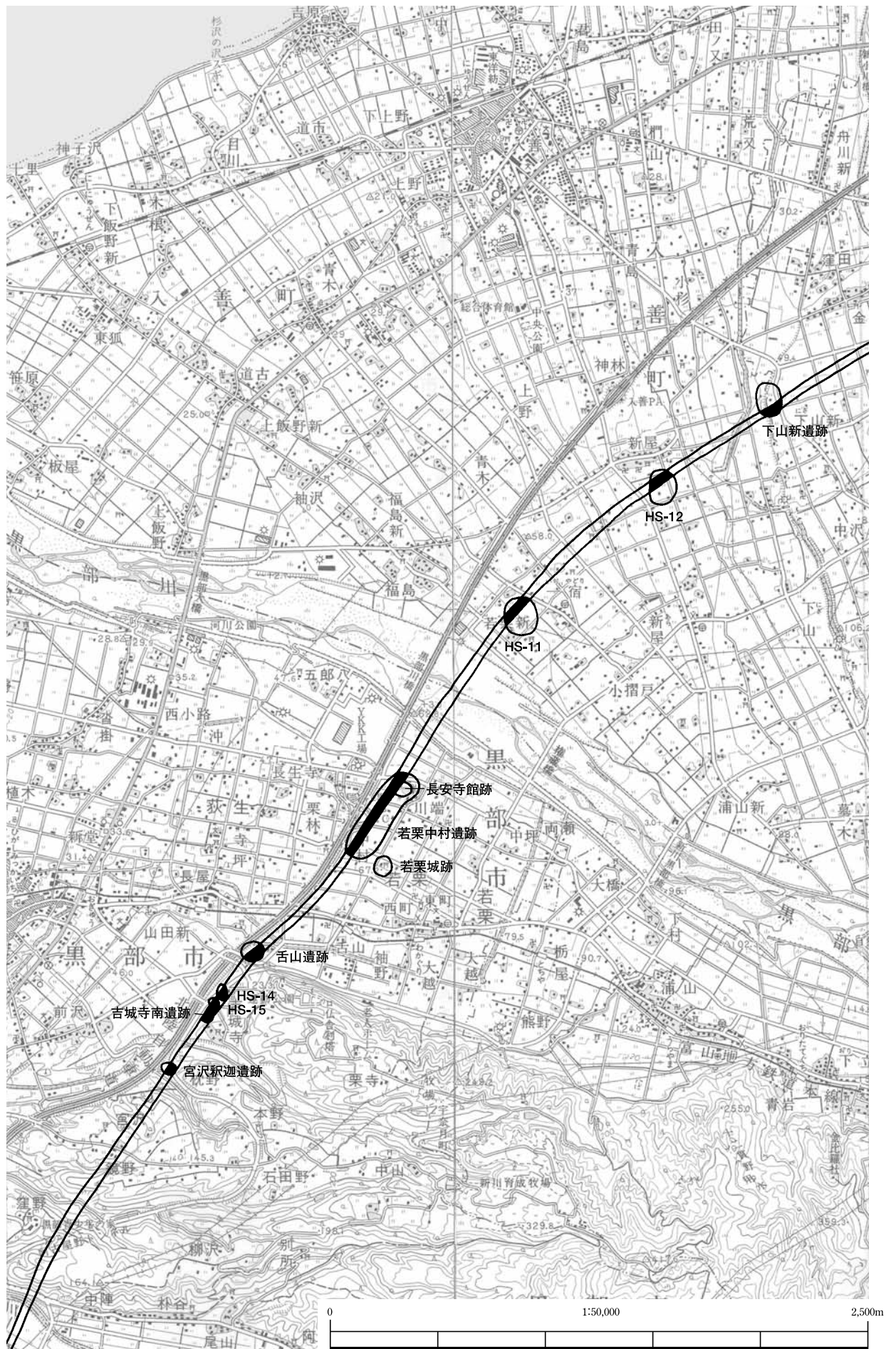
平成15（2003）年には、黒部市HS-10・HS-15・HS-16・舌山遺跡で確認調査を実施し、HS-10・HS-16で遺構・遺物を確認した。その結果、HS-10を宮沢釈迦遺跡、HS-16を吉祥寺南遺跡と命名し、本調査の必要な面積は合計約3,200㎡と確定した。

年度	調査対象地	所在地	調査種類	調査主体	調査面積(m ²)	調査期間	調査結果	文献
昭和60	小杉町～小矢部市		分布	県教委・県センター	1,440,000	3/25～3/29	県東部16箇所、県西部11箇所の埋蔵文化財包蔵地を確認(周知の遺跡を含む)	
	朝日町～富山市				2,360,000	4/5～4/20		
平成7	黒部市浦川端～舌山		分布	県センター	56,000	3/27	周知の遺跡3箇所を確認	
平成8	下川原遺跡	小矢部市後谷	包蔵地確認	財団	773(対象12,000)	10/21～10/24	古墳時代・古代の集落を確認	1
平成11	HS-11	入善町小摺戸	包蔵地確認	財団	423(対象4,680)	11/17～11/22	遺跡なし	2
	HS-12	入善町新屋			753(対象3,420)	11/24～11/29	遺跡なし	
	HS-13	朝日町南保			544(対象5,000)	11/10～11/12	古代～中世の集落を確認、竹ノ内Ⅱ遺跡を設定	
平成12	竹ノ内Ⅱ遺跡	朝日町長野	包蔵地確認	財団	1,047(対象11,520)	4/17～4/20	古代～中世の集落を確認	3
	柳田遺跡	朝日町字殿町			754(対象11,340)	10/16～10/25	縄文・中世の集落を確認	
	井ノ口城跡	朝日町大家庄			865(対象12,960)	10/19～10/25	遺跡なし	
	下山新東	朝日町下山新			2,664(対象22,680)	10/16～10/27	縄文の集落を確認	
	下山新	朝日町下山新			496(対象3,420)	10/25～10/27	縄文の集落を確認	
平成13	若栗中村遺跡	黒部市若栗, 中村	包蔵地確認	財団	279(対象2,400)	11/19～11/21	中世の集落を確認	4
	新黒部～富山		分布	県センター・魚津市教委・滑川市教委	99,230	3/28～3/29	周知の遺跡3箇所を確認し、新たに4箇所の埋蔵文化財包蔵地を確認	
平成14	井ノ口城跡	朝日町井ノ口	包蔵地確認	財団	435(対象1,977)	4/17, 9/25	遺跡なし	5
	若栗中村遺跡	黒部市若栗, 中村			2,215(対象28,961)	5/9～5/23, 11/25～11/27	中世の集落を確認	
	舌山遺跡	黒部市若栗字舌山			401(対象4,590)	11/28～11/29	縄文・中世の集落を確認	
平成15	HS-10	黒部市宮沢	包蔵地確認	財団	288(対象7,200)	10/20～10/23	縄文の集落を確認, 宮沢釈迦遺跡を設定	6
	HS-15	黒部市宮野			498(対象5,600)	5/12～5/14	遺跡なし	
	HS-16	黒部市吉城寺			98(対象800)	5/14～5/20	古代～中世の製鉄遺跡を確認, 吉祥寺南遺跡を設定	
	舌山遺跡	黒部市若栗字舌山			45.9(対象354)	11/12～11/14	遺跡なし	

第1表 北陸新幹線関連埋蔵文化財包蔵地調査一覧

文献

- 財団法人富山県文化振興財団 1997 『埋蔵文化財調査概要』-平成8年度-
- 財団法人富山県文化振興財団 2000 『北陸新幹線関係埋蔵文化財包蔵地調査報告 HS-11・HS-12・HS-13』
- 財団法人富山県文化振興財団 2001 『北陸新幹線関係埋蔵文化財包蔵地調査報告(2) 竹ノ内Ⅱ遺跡(長野地区)・柳田遺跡・井ノ口城跡・下山新東遺跡・下山新遺跡』
- 財団法人富山県文化振興財団 2002 『埋蔵文化財調査概要』-平成13年度-
- 財団法人富山県文化振興財団 2003 『北陸新幹線関係埋蔵文化財包蔵地調査報告(3) 井ノ口城跡・若栗中村遺跡・舌山遺跡』
- 財団法人富山県文化振興財団 2004 『北陸新幹線関係埋蔵文化財包蔵地調査報告(4) HS-10(宮沢釈迦遺跡)・HS-15・HS-16(吉祥寺南遺跡)・舌山遺跡』



第 2 図 北陸新幹線関連埋蔵文化財包蔵地位置図 (1 : 50,000)

(4) 本調査

確認調査の結果を受けて、鉄道・運輸機構から範囲の確定している埋蔵文化財包蔵地について本調査の要望が出された。鉄道・運輸機構と県教委、財団の協議の結果、平成13（2001）年度から財団が北陸新幹線関連の本調査を受託することとなった。平成13年度に、新黒部駅・富山駅間の工事認可が下りるとともに、工事の急がれる新黒部駅以東の竹ノ内Ⅱ遺跡・柳田遺跡・下山新遺跡の本調査を実施した。以後、平成14（2002）年度は柳田遺跡・下山新東遺跡・下山新遺跡、平成17（2004）年度は竹ノ内Ⅱ遺跡の本調査を実施した。

平成15（2003）年度は、黒部川左岸扇状地にある若栗中村遺跡（A1～C1地区）を中心に舌山遺跡もあわせて5月19日から12月15日まで本調査を実施した。

平成16（2004）年度は、若栗中村遺跡（C2地区）と黒部川扇状地西端の段丘上に位置する宮沢釈迦遺跡の本調査を5月1日から11月5日まで実施した。

2 調査方法と経過

(1) 調査方法

発掘調査の基準となるグリッドの座標は、国土座標（平面直角座標系第7系）を基に設定した。遺跡ごとの座標は、若栗中村遺跡ではX97240Y27870、舌山遺跡ではX96190Y27870、宮沢釈迦遺跡ではX95150Y27050をそれぞれX0Y0とし、南北方向をX軸、東西方向をY軸とした。なお、日本測地系を基に基点を定めたので、国土地理院のWe b版TKY2JGDの変換プログラムにより世界測地系に変換した。グリッドは2m方眼とし、各グリッド名は北東角のX軸、Y軸の座標とした。発掘範囲は、若栗中村遺跡でX2～290・Y4～285、舌山遺跡でX1～67・Y4～67、宮沢釈迦遺跡でX1～25・Y0～20である。若栗中村遺跡では調査期間が複数年にわたることから、道路や水路、現況水田の畦畔等により東からA1・A2・A3・B・C1・C2の6地区に分けた。舌山遺跡では調査区が離れているため、東側をA1地区、西側をA2地区とした。

遺跡名	日本測地系	世界測地系
若栗中村遺跡	X97240, Y27870	X97586.559, Y27600.183
舌山遺跡	X96190, Y27870	X96536.587, Y27600.200
宮沢釈迦遺跡	X95150, Y27050	X95496.605, Y26780.240

調査は、表土・耕作土・無遺物層の除去、遺物包含層の発掘、遺構確認面の精査・遺構の検出、遺構の発掘、遺構の記録、写真撮影、空中写真測量、測量補足作業の順で行った。表土・耕作土・無遺物層の除去は、人力掘削による調査の事前準備として、調査員立ち会いのもと、包含地確認調査の結果を踏まえ、基本層序を確認しながら、工事請負業者が重機により行った。また、場所によっては、近代以降の攪乱や無遺物層の除去も行った。遺物包含層の発掘はスコップ等を用い、人力で掘削した。排土搬出にはベルトコンベヤーを使用し、路線敷内の調査区隣接地に集積し、ダンプによる調査区外への搬出は工事請負業者が行った。遺構確認面の精査・遺構の検出は、遺構確認面に達するとジョレンやねじり鎌で精査し、検出した遺構は石灰によるマーキングを行い、平板を用いて遺構概略図を作成した。検出した遺構には遺構番号を付すが、各地区ごとに遺構の種類に関わらず通し番号とした。遺構の発掘は、小さい土坑は半截、大きい土坑は十字またはそれ以上に、溝は適宜に間隔をあけてセ

クッションベルトを残し、移植ごて等で発掘した。

遺構の記録は、断面図を20分の1の縮尺で実測し、遺構によっては10分の1の遺物出土状況図や平面図を作成した。各遺構の断面は35mmカメラで、遺物出土状況や個別遺構の完掘写真・ブロック写真はブローニー判（6×7）カメラもあわせて撮影した。調査区の全景写真は35mmカメラ・ブローニー判カメラ・4×5インチ判カメラで2方向以上から撮影した。使用したフィルムは、35mmはカラーと白黒、ブローニー判・4×5インチ判はカラースライドと白黒を使用した。遺構の平面図作成には空中写真測量を利用し、撮影はヘリコプター（実機）またはラジコンヘリコプターを使用した。

（2）調査経過

平成15年度の調査は、若栗中村遺跡、舌山遺跡を対象に行った。若栗中村遺跡の調査期間は5月28日～12月15日である。遺跡はA～Cの3地区に大別でき、東側のA地区では中世の掘立柱建物や区画溝等を確認したが、B・C地区では中世及び縄文時代の谷や土坑を確認したのみである。舌山遺跡では、縄文時代中期後葉の集落跡を確認した。調査期間は7月8日～10月17日である。

平成16年度の調査は、若栗中村遺跡C2地区、宮沢釈迦遺跡を対象に行った。若栗中村遺跡C2地区は平成15年度調査のC1地区の西隣で、中世後半～近世の水田遺構及び縄文時代の谷を確認した。調査期間は5月1日～9月10日である。宮沢釈迦遺跡では後世の地形改変が激しく、縄文時代の竪穴建物の痕跡を確認したのみである。調査期間は8月10日～11月5日である。

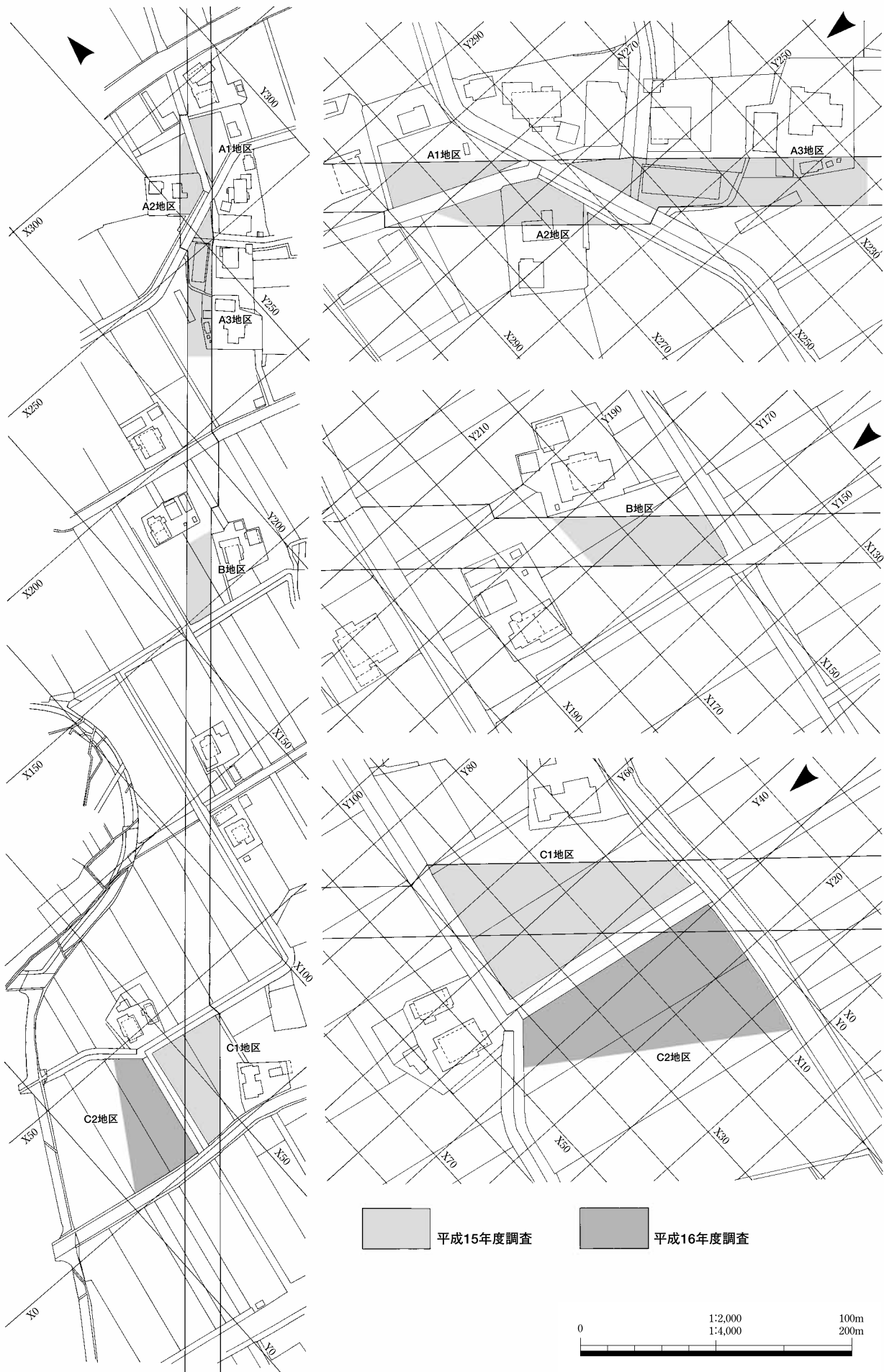
（3）調査体制

平成15（2003）年度

総括	桃野真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	関清	埋蔵文化財調査事務所副所長
	盛田世津子	埋蔵文化財調査事務所副所長・総務課長
総務	竹中慎一	埋蔵文化財調査事務所総務課課長補佐
	廣田英貴	埋蔵文化財調査事務所主任
	上島賢治	埋蔵文化財調査事務所嘱託
調査総括	宮田進一	埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
調査員	菅田薫	埋蔵文化財調査事務所主任
	武田健次郎	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	床平慎介	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成16（2004）年度

総括	桃野真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	関清	埋蔵文化財調査事務所副所長
	盛田世津子	埋蔵文化財調査事務所副所長・総務課長
総務	竹中慎一	埋蔵文化財調査事務所総務課課長補佐
	廣田英貴	埋蔵文化財調査事務所主任
	岩田扶紀	埋蔵文化財調査事務所主任
	田島孫昭	埋蔵文化財調査事務所嘱託
調査総括	宮田進一	埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
調査員	森隆	埋蔵文化財調査事務所主任
	荒川和哉	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事



第3図 若栗中村遺跡調査区区割図

(4) 普及活動

発掘調査の結果を広く一般に公開するために、調査行程を検討しながら対象地区を選定して現地説明会を実施した。平成15年度は、10月25日に舌山遺跡を対象に実施した。竪穴建物の説明を中心にA1・A2の両地区で行い、約150名の見学者が訪れた。まず全体説明を行い、A2地区、A1地区を誘導、調査員が現地で個別遺構についての説明及び見学者の質問等に対応した。また、遺物展示会場では、出土遺物及び遺構の写真パネルのほか平成14年度調査の柳田遺跡・下山新東遺跡・下山新遺跡の出土品を併せて展示し、説明を行った。なお、平成16年度は実施していない。

(5) 整理経過

出土遺物は調査年度内に可能な限り洗浄・注記・分類を行った。石製品・金属製品はメモ写真を撮影し、それぞれ整理台帳を作成した。調査概要については、『埋蔵文化財年報』(15)・(16),『埋蔵文化財調査概要』-平成15年度・平成16年度-として発刊している。

報告書刊行に向けての本格的な室内整理作業は、平成20年4月に開始した。20年度は遺物実測・写真撮影・挿図作成・図版作成・原稿執筆、21年度は遺物写真撮影・編集・印刷・校正を行った。遺物の洗浄・バインダー処理は現場において現場整理作業員が行い、土器・陶磁器の注記・接合・復元・色塗り、石製品の注記は、室内整理作業員が行った。遺物の実測は、土器・陶磁器を調査員及び室内整理作業員が行った。石製品・金属製品の実測は業者に委託した。遺物実測図は、種類別の遺物カードに直接書き込むか貼り込んで整理した。遺構実測図及び写真は、各台帳を作成して整理し、遺構カードとともにパーソナルコンピューターを使用してデータ入力を行った。データ入力は人材派遣会社に委託し、整理作業員が補足した。遺構・遺物のデータは観察表として掲載している。遺物の写真撮影は、業者委託し、4×5インチ判の白黒とカラースライドフィルムを使用した。写真図版には、密着焼付または引き延ばしたものを使用した。自然科学分析は、業者に委託し、結果報告を掲載した。

(6) 整理体制

平成20(2008)年度

総括	岸本雅敏	埋蔵文化財調査事務所所長
	山本正敏	埋蔵文化財調査事務所副所長
	加藤豊次郎	埋蔵文化財調査事務所副所長・総務課長
総務	浅地正代	埋蔵文化財調査事務所総務課チーフ
	岩田扶紀	埋蔵文化財調査事務所主任
整理総括	河西健二	埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
担当	金三津道子	埋蔵文化財調査事務所主任

平成21(2009)年度

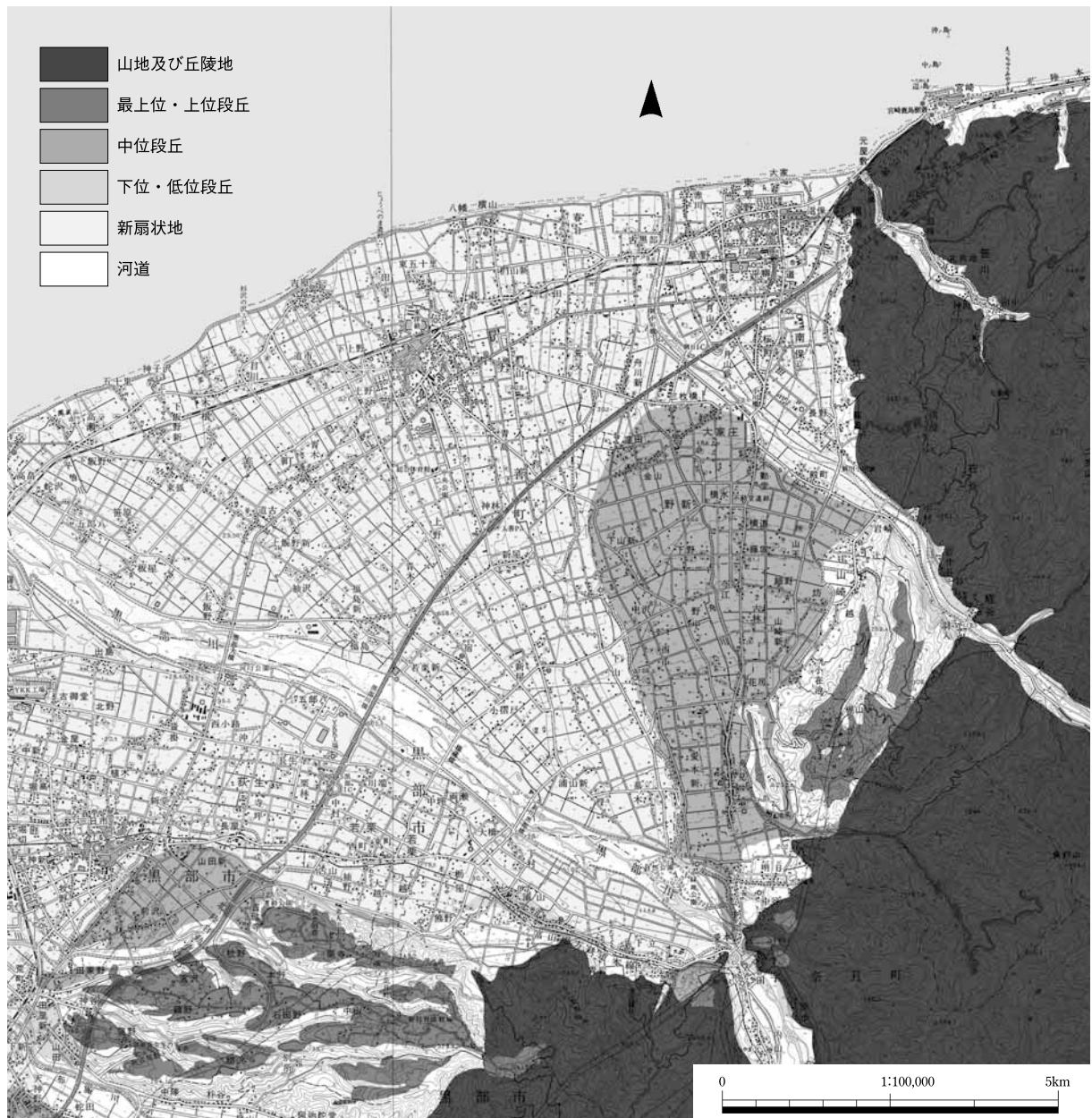
総括	岸本雅敏	埋蔵文化財調査事務所所長
	池野正男	埋蔵文化財調査事務所副所長
総務	竹中慎一	埋蔵文化財調査事務所総務課課長
	浅地正代	埋蔵文化財調査事務所総務課チーフ
整理総括	河西健二	埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
担当	金三津道子	埋蔵文化財調査事務所主任

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

黒部市は富山県の北東部に位置する。北側は富山湾に面し、南側に3,000m級の北アルプスの山岳地帯を配す。背後の北アルプスに源を発し、急峻な黒部峡谷を流れ出た黒部川は、海拔125m付近の愛本橋を扇頂に約60°の角度で北西に広がる扇状地を形成する。

黒部川扇状地は、黒部川のほか小川・船川・入川等が複雑に流れ現在の複合扇状地となっているが、古くから『黒部四十八ヶ瀬』と呼ばれ、放射状・網目状の流路が発達した地域である。黒部川扇状地の東西の山麓部には、高位・中位・低位の段丘群が分布する。これらの段丘は全て開析扇状地（隆起扇状地）である。形成段階からも大きく3つに分けられ、最古の段丘面は、黒部川右岸で棚山丘陵、左岸で十二貫野台地と呼ばれる高位段丘で、それに次ぐ中位段丘は右岸の舟見野旧扇状地、左岸



第5図 地形図 (1:100,000)

の前沢旧扇状地で、右岸の発達が顕著である。最も新しい時期に形成されたのは、小川扇状地、黒部川新扇状地で、黒部市内で現在確認されている埋蔵文化財包蔵地の多くは、この黒部川新扇状地及びその周辺に立地している。

若栗中村遺跡は、黒部川左岸扇状地の扇中部に位置する。北陸自動車道黒部ICの南側にあり、県道若栗生地線から市道西小路若栗線までの約1kmにわたる東西に長い遺跡で、標高は南西側で58m、北東側で62mを測る。舌山遺跡は、黒部川左岸の扇状地西端に位置し、隆起扇状地（宮野山）の北東側丘陵裾部に立地する。遺跡の範囲は、ほぼ黒瀬川と県道下垣内・前沢線の間で、標高は50m前後である。宮沢釈迦遺跡は、黒部川左岸扇状地西端の十二貫野台地上に位置する。大谷川と県道本野・三日市線に挟まれた舌状に張り出す台地先端に立地し、北西を北陸自動車道、東をスーパー農道により画されており、標高は西側で約72m、東側で約77mを測る。

2 歴史的環境

黒部市では、旧石器から近世までの遺跡が確認されている。調査例は少なく、詳細が不明な時期もあるが、それぞれ時代ごとに概観していく。

旧石器時代の遺跡は、十二貫野台地西端に所在する山田遺跡(54)、黒部川右岸の台地上に法福寺前遺跡(91)があり、遺物が採取されているが詳細は不明である。

縄文時代になると遺跡数が増え、前期に遺跡が段丘上に出現し、中期になると遺跡数が増加する傾向にある。その後、後・晩期には海岸に近い低地にも遺跡が立地するようになる。舌山遺跡(2)、前沢遺跡(23)、枕野遺跡(45)、浦山寺蔵遺跡(79)、愛本新遺跡(96)、風野遺跡(94)などがある。舌山遺跡では2003年の調査で、中期の竪穴建物3棟を確認している。前沢遺跡では1974年に調査が行われ、中期中葉～後葉の竪穴建物3棟が確認されている。浦山寺蔵遺跡では1976年の調査で、中期の竪穴建物19棟が検出され、多数の遺物が出土している。

弥生時代の遺跡はあまり確認されておらず、堀切遺跡(14)、町堀切遺跡(59)、中新遺跡(6)があり、いずれも海岸部に近い扇状地扇端部に立地する。堀切遺跡（G地区）では2006年の調査で、富山県東部では初例となる弥生時代中期の周溝をもつ建物1棟が検出された。建物覆土中からは石針、緑色凝灰岩、翡翠片などが出土しており、玉作りを行っていた可能性が示されている。

古墳時代の遺跡は少なく、堀切遺跡、町堀切遺跡、阿古屋野古墳群(55)などがある。阿古屋野古墳群は、黒部市唯一の古墳群で、1935年頃には6基が確認されていたが、開墾等により5基が破壊され、現存するのは1基のみとなり、1965年に黒部市指定文化財として保護された。1987年には調査が行われ、深さ2mの周溝を持つ一辺15m、高さ3m規模の方墳であることが確認された。

古代になると、扇状地扇端部及び扇状地境界部分に立地する遺跡が増加する。堀切遺跡、北堀切遺跡(58)、新坂遺跡(41)、吉祥寺南遺跡(39)などがある。吉祥寺南遺跡は2004年に調査が行われ、9世紀～10世紀に操業された製鉄遺跡で、製鉄炉2基、炭窯6基が検出されている。堀切遺跡は弥生から近世の複合遺跡で、2005年に調査されたF地区では、一部に朱を施した人面墨書土器が出土している。北堀切遺跡では、2006年の調査で、7世紀前半の竪穴建物1棟、8世紀後半～9世紀前半の溝が確認され、周辺に古墳時代後期から古代にかけての集落の存在が想定されている。

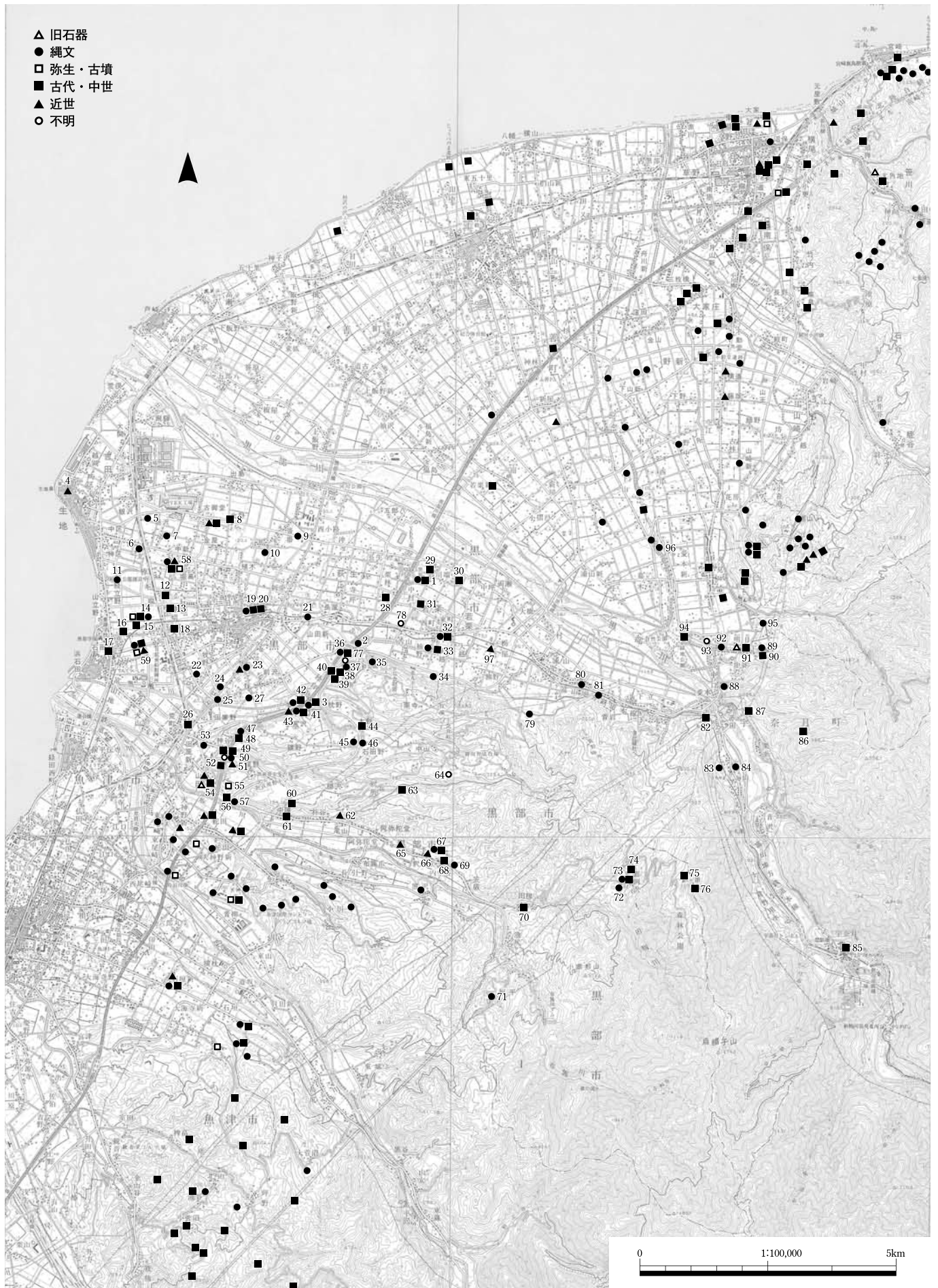
中世には遺跡数がさらに増加し、最も新しい時期に形成された新扇状地にも遺跡が立地するようになる。特に、城館・山城が扇状地とその周辺の丘陵上に散在する。城館では、扇中部に若栗城跡(31)、

長安寺館跡(29)、善念寺館跡(30)、海岸に近い扇端部に堀切東館跡(18)、堀切西館跡(16)などがある。若栗城跡は現在でも高さ5m程の土塁が残っており、1974年の調査では土塁の基礎固めの石列などが検出されている。長安寺館跡は長安寺境内に位置し、北を除く三方に土塁が残る。その他に若栗中村遺跡(1)、堀切遺跡、石田の石塔群遺跡(15)、堅田遺跡(48)などがある。若栗中村遺跡では、2003～2005年に調査が行われ、中世後半から近世にかけての集落が確認されている。堀切遺跡(F地区)では、2万点を超える柿経や、木製卒塔婆などが出土している。石田の石塔群遺跡は、ほ場整備により付近の水田から出土した五輪塔や宝篋印塔を集めたもので、堀切遺跡内に位置している。室町時代から江戸時代にかけての石塔群で、1960年に黒部市指定文化財となっている。

近世になると遺跡数は減少するが、若栗中村遺跡、堀切遺跡など中世以降近世に至るまでの集落遺跡もある。寛文2(1662)年に黒部川に愛本橋が架けられ、北陸街道が整備されると、扇央部の若栗の地は、三日市から段丘裾沿いに浦山、愛本橋を經由して入善町舟見、朝日町泊へ向かうルート上に位置することとなる。このルートは、三日市から黒部川を徒渉・船渡して入善町沓掛・入善、朝日町泊へ向かう下街道に対し、上街道と呼ばれて重要視された。このため、若栗には道番人が置かれて街道の監視にあたり、街道沿いには集落が成立し、現在に至るという。

引用・参考文献

- 1 宇奈月町役場 1969『宇奈月町史』
- 2 宇奈月町教育委員会 1971『愛本新遺跡調査概要』
- 3 宇奈月町教育委員会 1977『宇奈月町浦山寺蔵遺跡緊急発掘調査概要』
- 4 宇奈月町教育委員会 2001『風野遺跡 縄文時代石器製作跡の調査』
- 5 黒部市教育委員会編 1954『黒部市誌』
- 6 黒部市教育委員会 1975『富山県黒部市前沢遺跡緊急発掘調査報告書』
- 7 黒部市教育委員会 1979『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書第1集 山田新遺跡・東山遺跡・新坂遺跡』
- 8 黒部市教育委員会 2004『吉祥寺南遺跡 北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 9 黒部市教育委員会 2006『堀切遺跡E地区発掘調査報告書 国道8号バイパス建設工事にかかる埋蔵文化財調査』
- 10 黒部市教育委員会 2006『堀切遺跡F地区発掘調査報告書 国道8号バイパス建設工事にかかる埋蔵文化財調査』
- 11 黒部市教育委員会 2006『若栗中村遺跡発掘調査報告書 ふるさと農道 農免農道新川中部地区の施工に伴う埋蔵文化財発掘調査』
- 12 黒部市教育委員会 2007『堀切遺跡G地区発掘調査報告書 国道8号バイパス建設工事にかかる埋蔵文化財調査』
- 13 黒部市教育委員会 2007『町堀切遺跡I-2区発掘調査報告書 国道8号バイパス建設工事にかかる埋蔵文化財調査』
- 14 黒部市教育委員会 2007『北堀切遺跡VI-1区発掘調査報告書 国道8号バイパス建設工事にかかる埋蔵文化財調査』
- 15 黒部市教育委員会 2008『北堀切遺跡VI-2区発掘調査報告書 国道8号バイパス建設工事にかかる埋蔵文化財調査』
- 16 財団法人富山県文化振興財団 2003『北陸新幹線関係埋蔵文化財包蔵地調査報告(3) 井ノ口城跡・若栗中村遺跡・舌山遺跡』
- 17 財団法人富山県文化振興財団 2004『北陸新幹線関係埋蔵文化財包蔵地調査報告(4) HS-10埋蔵文化財包蔵地・HS-15埋蔵文化財包蔵地・HS-16埋蔵文化財包蔵地・舌山遺跡』
- 18 財団法人富山県文化振興財団 2004『埋蔵文化財調査概要 平成15年度』
- 19 財団法人富山県文化振興財団 2005『埋蔵文化財調査概要 平成16年度』
- 20 富山県教育委員会 1977『富山県宇奈月町浦山寺蔵遺跡緊急発掘調査概要』
- 21 富山県教育委員会 1980『富山県歴史の道調査報告 北陸街道』
- 22 富山県埋蔵文化財センター 2006『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』



第6図 周辺の遺跡

	遺跡名	所在地	種別	時代	文献
1	若栗中村遺跡	若栗中村	集落	縄文、中世、近世	11, 16, 18, 19
2	舌山遺跡	若栗字舌山	集落	縄文(中期)	16, 17, 18
3	宮沢釈迦遺跡	宮沢	集落	縄文	17, 19
4	生地台場遺跡	芦崎字下浦	その他	江戸	
5	栃沢遺跡	大布施字栃沢	散布地	縄文(中期・後期)	
6	中新遺跡	中新	散布地	縄文	
7	栃沢A遺跡	栃沢	散布地	縄文	
8	北野の石籠	大布施字北野	その他	室町	
9	香掛遺跡	香掛	散布地	縄文	
10	本伝寺裏遺跡	香掛	散布地	縄文	
11	立野遺跡	立野	散布地	縄文	
12	堀切北遺跡	堀切	散布地	平安	
13	堀切南遺跡	堀切	散布地	平安	
14	堀切遺跡	堀切	集落	縄文、弥生、古墳、古代、中世、近世	9, 10, 12
15	石田の石塔群遺跡	石田字堀切	墓	室町	
16	堀切西館跡	石田	城館	中世	22
17	石田城跡	石田	城館	中世	
18	堀切東館跡	天神野新	城館	安土・桃山	22
19	大黒町遺跡	三日市	散布地	縄文	
20	小梅山遺跡	三日市	城館	中世	
21	荻生上野遺跡	荻生上野	散布地	縄文	
22	中野道遺跡	中野道	散布地	縄文、中世	
23	前沢遺跡	前沢字大黒	集落	縄文(中期)	6
24	前沢北遺跡	前沢	散布地	縄文、中世	
25	前沢南遺跡	前沢	散布地	縄文	
26	田家新遺跡	田家新	散布地	平安	
27	前沢南遺跡	前沢	散布地	縄文	
28	H G-33遺跡	栗林	散布地	中世	
29	長安寺館跡	若栗字川端	城館	中世	22
30	善念寺館跡	若栗字川端割	城館	中世	22
31	若栗城跡	若栗字中村	城館	室町	22
32	若栗遺跡	若栗字西町・東町	散布地	縄文、中世	
33	袖野遺跡	若栗字袖野	散布地	縄文	
34	竹谷遺跡	若栗字大越	散布地	縄文	
35	宮野遺跡	宮野	散布地	縄文	
36	山田新遺跡	山田新	散布地	縄文、平安	7
37	H S-14遺跡	宮野	散布地・製鉄?	縄文	
38	H S-15遺跡	宮野	散布地・製鉄?	古代、中世	17
39	吉祥寺南遺跡	吉祥寺	製鉄	古代	8, 17
40	吉祥寺遺跡	吉祥寺	散布地	不明	
41	新坂遺跡	宮沢字新坂	散布地	縄文、平安	7
42	新坂北遺跡	宮沢字新坂	散布地	縄文、奈良	
43	東山遺跡	宮沢字東山	散布地	縄文、近世	7
44	本野遺跡	本野	散布地	縄文、中世	
45	枕野遺跡	枕野	散布地	縄文(中期)	
46	枕野A遺跡	枕野	散布地	縄文	
47	神谷A遺跡	神谷	散布地	縄文	
48	堅田遺跡	神谷字堅田	集落・墓	中世	
49	大源寺遺跡	窪野字大源寺	散布地	縄文(早期)、室町	
50	杉大平北遺跡	窪野字杉大平	散布地	縄文、近世	
51	杉大平南遺跡	窪野字杉大平	散布地	不明	
52	阿古屋野中世墓	阿古屋野	墓	中世	
53	田家遺跡	田家新	散布地	縄文(中期～晩期)	
54	山田遺跡	山田	集落・墓	旧石器、中世	
55	阿古屋野古墳群	阿古屋野	古墳	古墳	
56	山田B遺跡	山田	散布地	平安～中世	
57	山田A遺跡	山田	散布地	縄文、中世	
58	北堀切遺跡	堀切・立野	散布地・集落	縄文、古墳～平安、中世、近世	14, 15
59	町堀切遺跡	堀切	散布地・集落	縄文、古墳、古代、中世～近世	13
60	中陣磐跡	中陣	山城	中世	22
61	中陣遺跡	中陣	山城	中世	
62	朴谷遺跡	朴谷	散布地	江戸	
63	尾山二又遺跡	尾山字二又	散布地	平安	
64	中山遺跡	中山	散布地	不明	
65	阿弥陀堂遺跡	阿弥陀堂	散布地	近世	
66	釈迦堂遺跡	釈迦堂	散布地	江戸	
67	大杉谷遺跡	内生谷字大杉谷	散布地	縄文、中世	
68	内生谷遺跡	内生谷	散布地	中世	
69	大平遺跡	笠破	散布地	縄文	
70	田初遺跡	田初	散布地	中世	
71	朴原遺跡	福平字朴原	散布地	縄文(中期)	
72	向間遺跡	嘉例沢字向間	散布地	縄文	
73	堂の前遺跡	嘉例沢字堂の前	城館	中世、近世	
74	嘉例沢の石仏	東布施字嘉例沢加村	その他	中世	
75	嘉例沢城跡(胸ヶ平城跡)	嘉例沢峰平、内山	山城	中世	
76	紙ヶ岳城跡	嘉例沢、内山	山城	中世	22
77	H G-30遺跡	山田新	散布地	不明	
78	H G-32遺跡	舌山	散布地	不明	
79	浦山寺蔵遺跡	浦山字山越割	散布地・集落	縄文(中期・後期)	20
80	黒部中学校庭遺跡	浦山	散布地	縄文	
81	下立遺跡	下立字沖	散布地	縄文(中期・後期)	
82	内山磐跡	下立・赤田	山城	中世	22
83	内山B遺跡	大坊(通称内山)	散布地	縄文	
84	内山A遺跡	大坊(通称内山)	散布地	縄文(中期)	
85	桃原遺跡	桃原	散布地	縄文(中期)	
86	八重堀城跡		山城	中世	
87	明日山城跡(鼓打城跡)	明日字松ヶ平	山城	中世	22
88	中ノ口遺跡	中ノ口上大平	散布地	縄文	
89	明日B遺跡	明日	散布地	縄文	
90	法福寺磐跡	明日	山城	中世	22
91	法福寺前遺跡	明日	散布地・中世	旧石器、縄文、古代、中世	
92	明日C遺跡	明日	散布地	縄文	
93	愛本小学校遺跡	愛本新	散布地	不明	
94	風野遺跡	愛本新字風野	散布地	縄文(後期～晩期)	4
95	明日A遺跡	明日	散布地	縄文	
96	愛本新遺跡	愛本新	集落	縄文(中期～晩期)	2
97	栃屋遺跡	栃屋	散布地	中世、近世	

第3表 周辺遺跡一覧

第Ⅲ章 若栗中村遺跡

1 概要

若栗中村遺跡は、黒部川左岸の扇状地扇中部に位置する。東西約1kmにわたる細長い遺跡で、標高は南西側で58m、北東側で62mを測る。調査区は北陸新幹線の本線及び車両補修基地建設予定地で、北東側からA～Cの3地区に大別し、道路や用水等を境にA1・A2・A3・B・C1・C2の6地区としている。検出した遺構は、掘立柱建物2棟、溝、流路、土坑、倒木痕である。量的には少ないが、縄文時代後期～晩期、中世後半～近世にかけての遺物が出土しており、遺構の時期は縄文時代・中世から近世の時期にあたると思われる。なお、北東端のA地区は、境内が長安寺館跡の比定地と考えられる黒部市指定有形文化財長安寺鐘樓門及び付属土塁の南西30mの近距離に位置する地区であり、長安寺館跡と関連する遺構・遺物の確認が期待されたが、直接、長安寺館跡との関連を明示するような遺構・遺物は認められなかった。

2 既往の調査

若栗中村遺跡は、平成8（1996）年度に富山県埋蔵文化財センター及び黒部市教育委員会による分布調査において確認された遺跡である。北陸新幹線建設に伴い、平成13・14（2001・2002）年度には富山県文化振興財団が包蔵地確認調査を実施し、県道若栗生地線から高橋川までの建設予定地に計29本のトレンチを設定した。3箇所縄文・中世の遺構・遺物を確認し、調査が必要な範囲は県道若栗生地線から市道西小路若栗線までとした^{注1}。この結果を受け、平成15・16（2003・2004）年度に発掘調査を実施した。

平成18（2006）年度には黒部市教育委員会により、ふるさと農道・農免農道新川中部地区の建設に先立ち発掘調査が実施された。調査地は北陸新幹線建設予定地の東側、平成15（2003）年度調査のC1地区東側に隣接している。検出された遺構は溝、土坑、落ち込み状遺構、穴で、出土遺物から縄文時代・中世から近世の時期と考えられている。また、報告書において、若栗城跡及び若栗地内で採集された遺物が紹介されており、中世後半から近世初めにかけての遺物と報告されている^{注2}。

3 基本層序

基本層状はⅠ層：黄灰色粘土質シルト・黒褐色砂質シルト・暗黄灰色砂質シルト（表土・耕作土・盛土）、Ⅱa層：褐灰色砂質シルト（近世水田耕作土）、Ⅱb層：黒褐色砂質シルト（中世後半～近世水田耕作土）、Ⅲ層：黒色粘土質シルト（遺物包含層・遺構検出面）、Ⅳ層：黄褐色砂質土・にぶい黄色砂（遺構検出面・地山）となる。

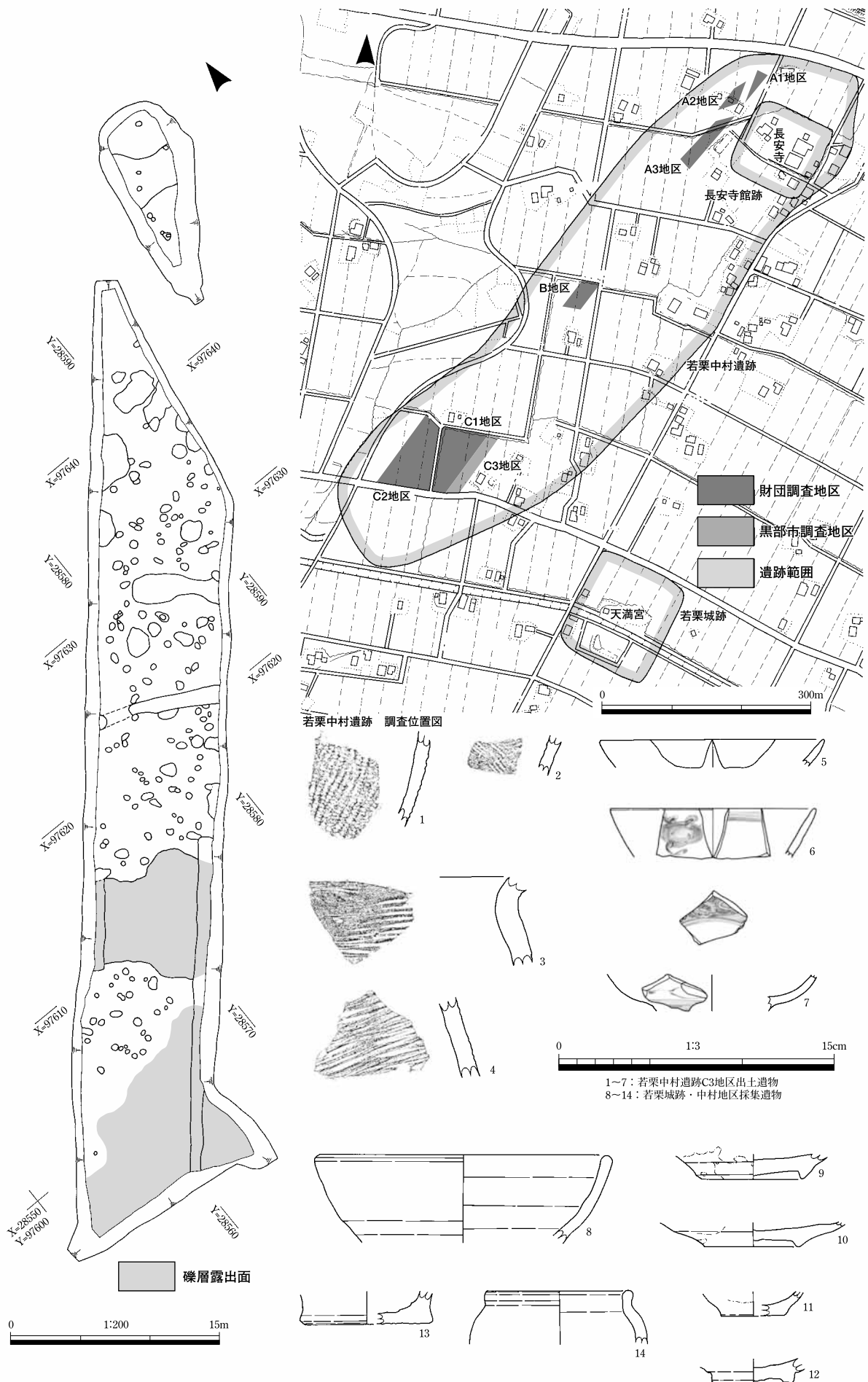
遺跡は東西に長く、各地区により基本層序に対応する土層は土色・土質が若干異なるが、大凡では一致する。遺構面は2面あるが、全地区をとおして検出されたのは、Ⅳ層上面である。ほ場整備等による削平を受けており、状態の良い地区ではⅢ層上面及びⅣ層上面の2面で検出している。遺構検出面までの深度は、A地区で0.4～0.9m、B地区で0.3m、C地区で0.7～1.3mと様相を異にする。

II層は、ほ場整備等による削平のため、C2地区の北部及び東部でのみ認められる。III層は、C1・C2地区ではさらにIII a層：黒色粘土質シルト、III b層：黒褐色粘土質シルト、III c層：暗褐色砂質シルト（遺物包含層）に細分されるが、A1～B地区においては、残存状態が悪く部分的な確認である。C1地区の南西端部分では、谷状地形の自然堆積層上に整地面と思われる痕跡が認められたため、III c層上面で遺構検出を行っている。C2地区ではIII a・III b層は南半に残存するが、北半ではみられず、南半ではIII a層上面で遺構検出を行っている。また、III a層からは中世の遺物が少量出土するが、III b層は無遺物層で、III c層は縄文・中世～近世の両方の遺物を包含している。A1地区南西部分・A3地区・C1地区・C2地区ではIII層が比較的良好な状態で残存しているが、A1地区北東部分・A2地区・B地区では、I層直下にIV層が露出する。IV層は、A・B・Cの各地区間では褐色砂礫層となり、B・C地区間は包蔵地確認調査で深く落ち込む谷状地形が確認されている。

地区		A1	A2	A3	B	C1	C2
I a層	表土・耕作土・盛土	2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト	5Y4/1 灰色粘土質シルト		10YR4/1 黒褐色砂質シルト	2.5Y5/2 暗黄灰色砂質シルト	5Y3/2 オリーブ黒色砂質シルト
I b層							5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト
II a層	旧耕作土	無	無	無	無	無	10YR4/1 褐灰色砂質シルト
II b層		無	無	無	無	無	10YR3/1 黒褐色砂質シルト
III a層	縄文・中世遺物包含層	2.5Y2/1 黒色粘土質シルト	10YR1.7/1 黒色粘土質シルト	10YR1.7/1 黒色粘土質シルト	10YR1.7/1 黒色粘土質シルト	10YR2/1 黒色粘土質シルト	10YR1.7/1 黒色シルト～粘土質シルト
III b層		無	無	無	無	10YR3/1 黒褐色粘土質シルト	10YR3/3 暗褐色シルト質砂～細砂
III c層		無	無	無	無	7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト	10YR2/1 黒色砂質シルト
IV層	地山	10YR5/4 にぶい黄褐色砂・砂礫	2.5Y6/4 にぶい黄色砂・砂礫		2.5Y5/6 黄褐色砂質土	10YR5/4 褐色砂質土	10YR4/6 褐色粘土質シルト

第4表 若栗中村遺跡 基本層序

遺構検出面



第7図 若栗中村遺跡 既往の調査 (遺構図 1/200, 遺物1/3)
 黒部市教委2006『若栗中村遺跡発掘調査報告書』より転載, 再トレース, 一部改変

4 遺構・遺物

(1) 縄文時代

C 1 地区でのみ確認した。検出した遺構は、溝 1 条、自然流路 3 条、土坑 7 基である。

A 溝・流路

1089号流路（S D1089, 第9・12・13図, 図版12・14）

C 1 地区の北東角に位置する自然流路。Ⅲ c 層上面で検出され、北側にむかって低くなる谷状地形である。調査区外にかかり、検出した最大幅は7.8m、深さ0.70mである。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。調査区東側に位置する平成18(2006)年度黒部市教育委員会調査のC 3 地区で検出されたS D189とつながると考えられる。出土遺物は縄文土器片（1・21）がある。1は口縁が緩く外反する鉢で、串田新Ⅱ式頃のものか。21は底部にスタレ状圧痕がみられる。

1299号流路（S D1299, 第8図, 図版12）

C 1 地区北半に位置する東西方向の自然流路。Ⅳ層上面で検出している。幅15.0m、深さ0.44mを測る。埋土は黒色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルトを基調とし、1層と2層の境目から縄文土器がまとまって出土する。西側はC 2 地区S D1421とつながると考えられ、東側は調査区外でS D1089と合流してC 3 地区S D189につながると考えられる。出土遺物は縄文土器があり、流路の形成は縄文時代と考えられる。

1369号溝（S D1369, 第8図, 図版12）

C 1 地区中央付近に位置する溝でⅣ層上面で検出している。北端は倒木痕に切られ、南端は浅くなり調査区外に続く。幅3.5m、深さ0.31mを測り、埋土は褐色砂質シルトを基調とする。重複する土坑群より古く、出土遺物は縄文土器のみであることから、遺構の時期は縄文時代と考えられる。

1398号流路（S D1198, 第9・12・13図, 図版12・14）

C 1 地区南端に位置する自然流路。X15以南、Y45以西の範囲では、地形的に低くなる箇所を中心に黒褐色粘土質シルトを基調とする層がブロック状の堆積を成す箇所があり、整地層と考えている。この整地層の下、Ⅳ層上面でS D1398を検出している。調査区外にかかり、検出した最大幅は9.0m、深さ0.64mを測る。調査区西側C 2 地区のS D1422と一連の流路と考える。調査区東側のC 3 地区では、南西側はⅢ層以下に礫層が露出しているが、地形的に南側が低くなっており、この礫層露出ラインへつながるものと想定される。出土遺物は縄文土器（8・9・13・20）があり、流路の形成は縄文時代に遡ると考える。8・9は縦位の縄文を施文した鉢で、口縁内面に沈線が1条巡る。後期後葉（井口式）のものか。20は鉢底部で、表面の風化が著しく調整は不明瞭である。23は土器片の周囲を打ち欠いて円形にした円盤状土製品。

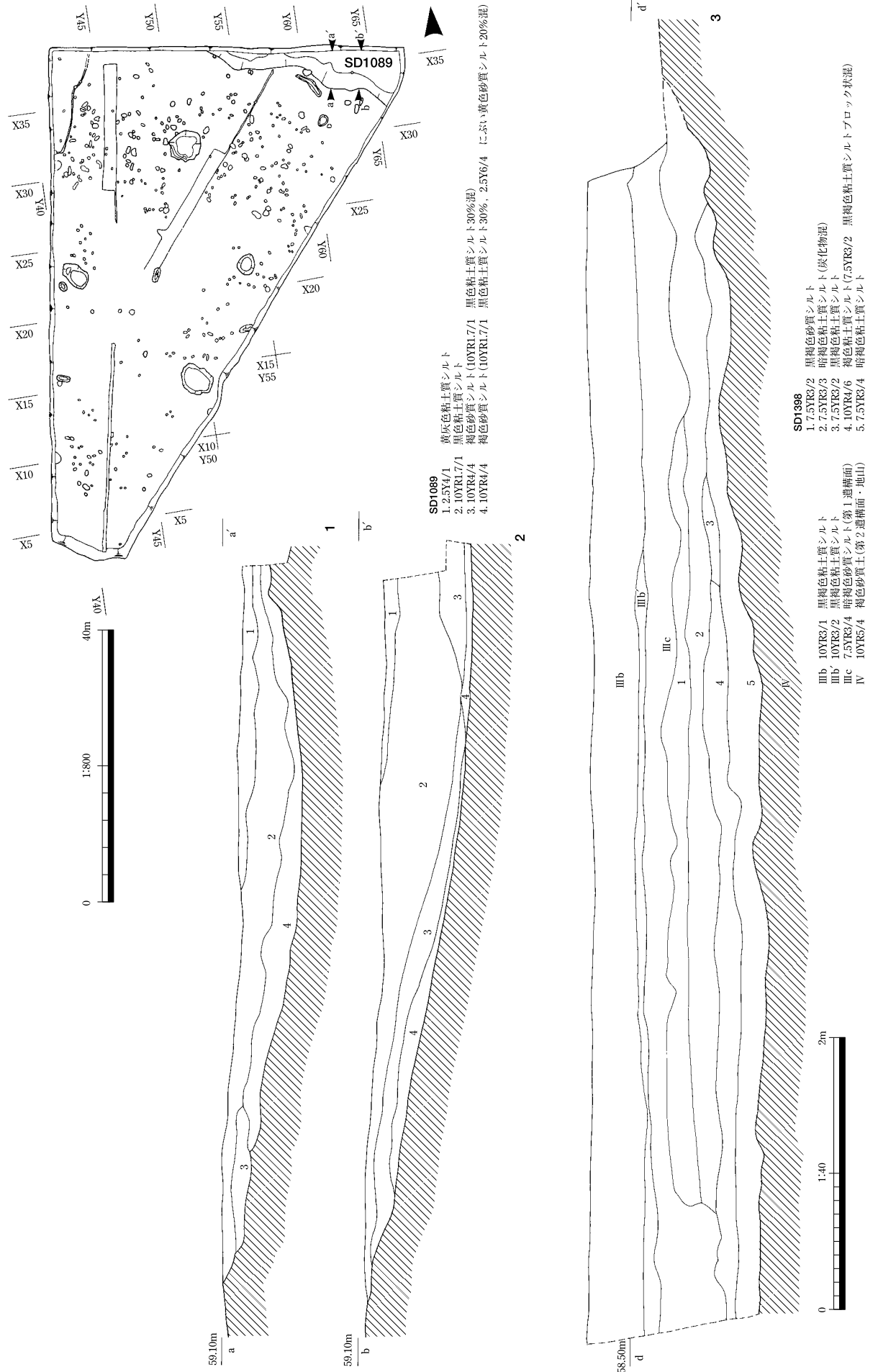
B 土坑

872号土坑（S K872, 第11図）

C 1 地区北半東よりに位置する円形土坑。Ⅲ c 層上面で検出され、長さ0.35m、幅0.31m、深さ0.15mを測る。埋土は黒色粘土質シルト、褐色砂混じりの黒褐色砂質土で、埋土中位から縄文土器が出土する。

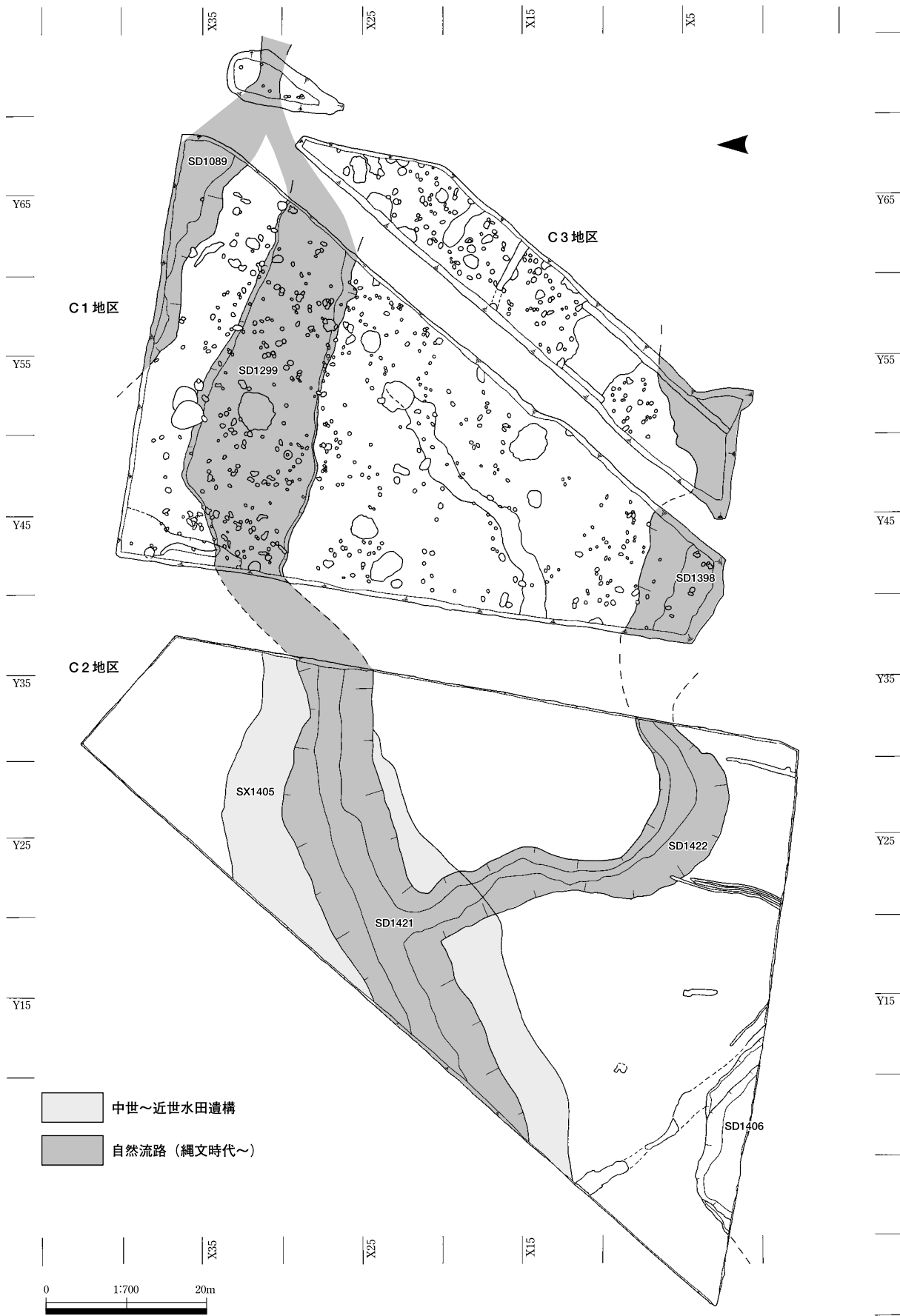
876号土坑（S K876, 第11図）

C 1 地区北半東よりに位置する楕円形土坑。S D1299の底面で検出しており、長径0.63m、短径0.42m、深さ0.32mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルト単層である。出土遺物は縄文土器がある。



第9図 若栗中村遺跡 縄文時代遺構実測図

1・2. SD1089 3. SD1398



第10図 若栗中村遺跡 遺構全体図 (1:700)
C地区

878号土坑 (SK878, 第11図)

C1地区北半東よりに位置する楕円形土坑でⅢc層上面で検出している。SK877に切られており、長径0.90m以上、短径0.78m、深さ0.25mを測る。埋土は黒色粘土質シルト、黒褐色粘土質シルトで、埋土中位から縄文土器が出土している。土器は縄文後期～晩期の浅鉢である。

907号土坑 (SK907, 第11図)

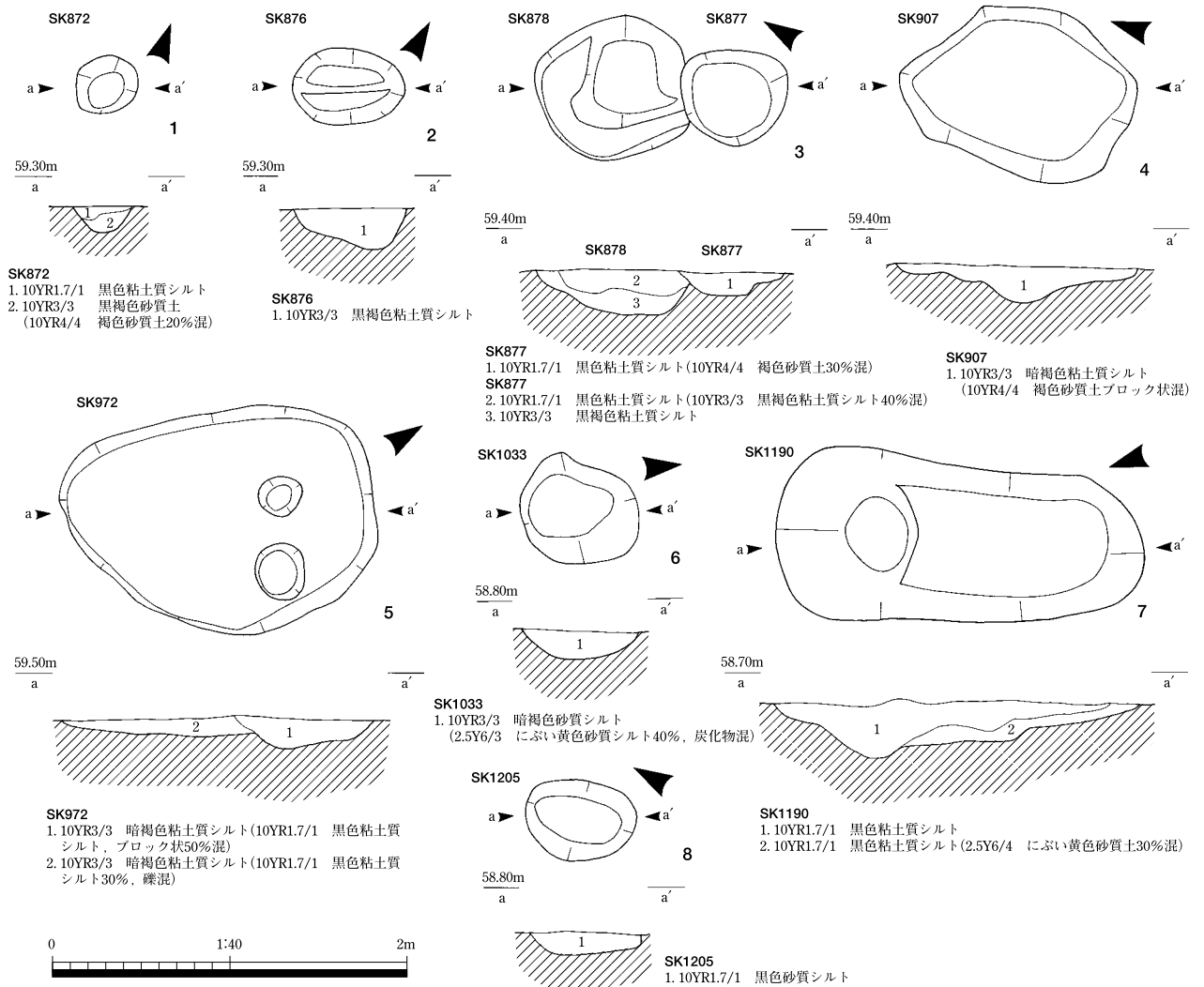
C1地区北半東よりに位置する楕円形土坑で、SD1299の底面で検出している。長径1.34m、短径0.96m、深さ0.25mを測り、埋土は褐色砂質シルト混じりの暗褐色粘土質シルトの単層である。SK907の東側約5m付近では、縄文土器がまとめて出土している。出土遺物は縄文土器がある。

972号土坑 (SK972, 第11図, 図版12)

C1地区北半東寄りに位置する楕円形土坑でⅢc層上面で検出している。長径1.76m、短径1.24m、深さ0.18mを測る。底面はほぼ平坦な浅い皿状の土坑で、北側が一段深くなる。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は縄文土器がある。

1033号土坑 (SK1033, 第11図)

C1地区北西角付近に位置する円形土坑でⅣ層上面で検出している。SD1299の北側肩に位置する。長さ0.67m、幅0.55m、深さ0.25mを測る。埋土は炭化物混じりの暗褐色砂質シルトの単層である。出土遺物は縄文土器がある。



第11図 若栗中村遺跡 縄文時代遺構実測図

1. SK872 2. SK876 3. SK877・SK878 4. SK907 5. SK972 6. SK1033 7. SK1190 8. SK1205

1190号土坑（S K1190, 第11図）

C 1 地区中央付近に位置する楕円形土坑。III c 層上面で検出している。長径2.09m, 短径0.88m, 深さ0.37mを測り, 埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。埋土中から縄文土器が出土している。

1205号土坑（S K1205, 第11図）

C 1 地区 X20Y45付近に位置する。長径0.63m, 短径0.46m, 深さ0.23mを測る楕円形土坑で, III c 層上面で検出している。埋土は黒色砂質シルトの単層である。出土遺物は縄文土器がある。

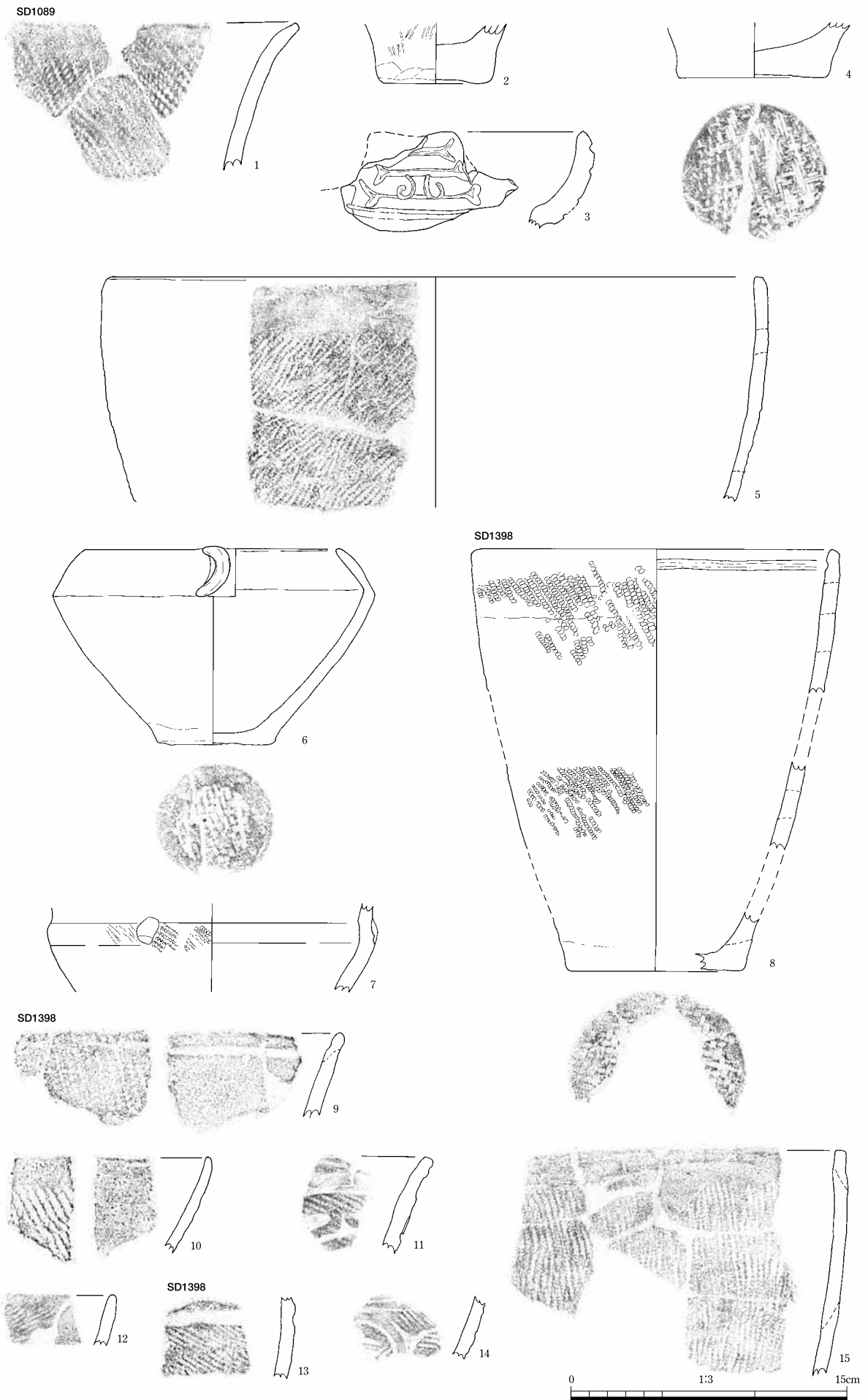
C 包含層出土遺物

土器（第12・13図, 図版14）

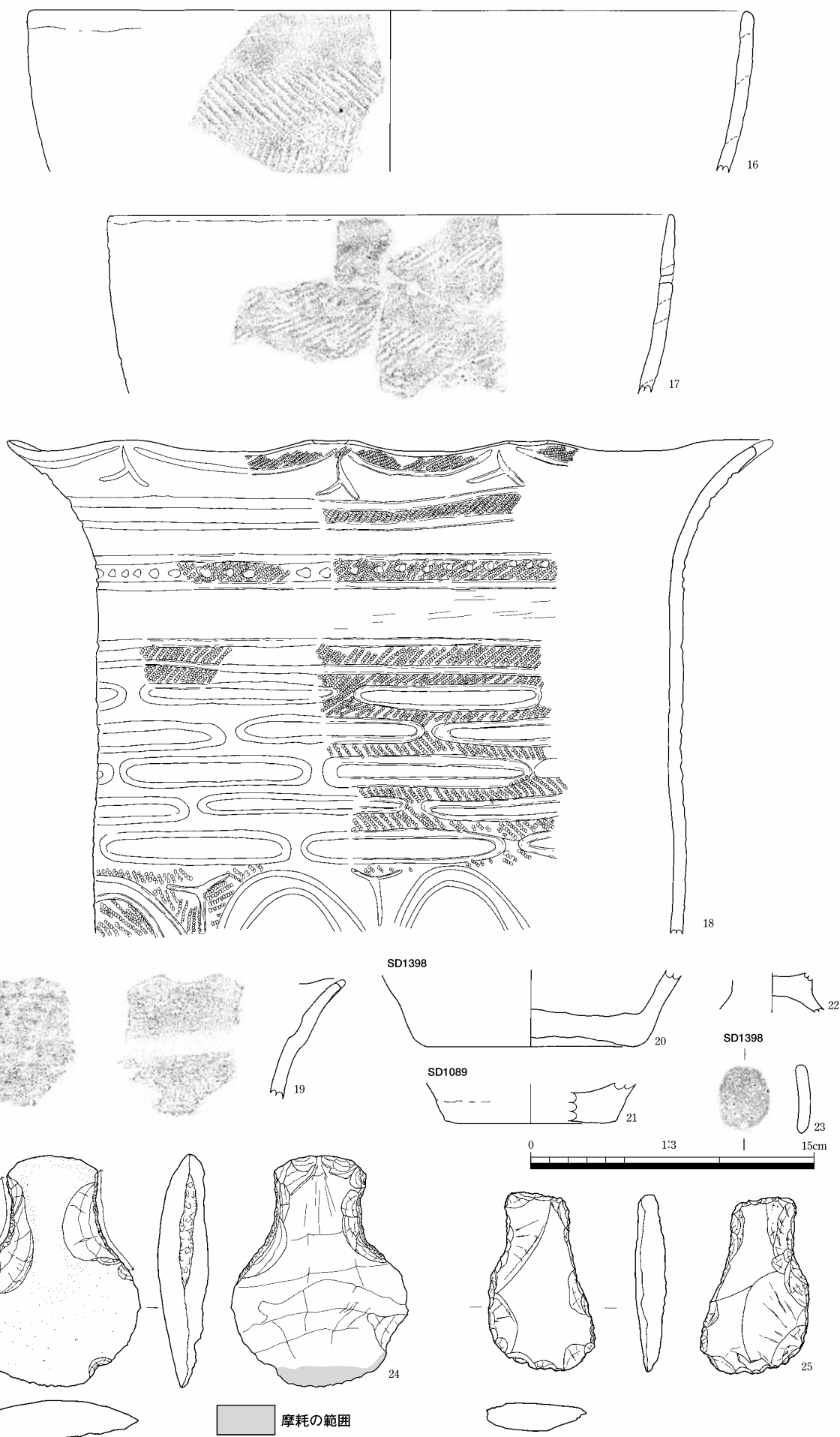
出土量は少なく, 中期後葉～晩期にかけてのものがあり, 後期後葉（井口式）のものが主体となるとみられる。2は櫛描文の鉢底部。底部外面はナデ。4は深鉢底部で, 編みの異なる2種類の網代圧痕がみられる。6は口縁部がくの字状に内傾する無文の浅鉢で, 口縁部に三日月状の貼り付けがある。底部外面は外周は撫で消されているが, 中央部には網代圧痕が残る。加曾利B式並行の井口I式のものか。7は外面の屈曲部に1cm幅ほどの斜縄文が施され, 体部下半はナデ, 内面はミガキの浅鉢で, 井口I式のもの。8は斜縄文の深鉢で, 口縁内面に1条の沈線を巡らす。約1.5cm幅の粘土紐を輪積みにする。底部には網代圧痕が残る。後期後葉頃のものか。9は8と同様に斜縄文の深鉢で, 口縁内面に1条の沈線を巡らす。11・14は縄文施文後に磨消し, 三叉文を刻む。15は縦位に縄文を施文する。16は羽状縄文。17は斜縄文の深鉢で, 口縁端部を面取りする。補修孔とみられる1対の孔があく。八日市新保式か。18は波状口縁深鉢。口縁部が緩やかに開き, 胴部中位が膨らむ器形とみられる。口縁部の弧状沈線は弧の幅に大小があり, 頂部は13に復元できる。波頂部は頂部の上端を押さえて台形状にし, 弧状の沈線と三叉文を施文する。頸部には沈線と無文帯で区画した縄文帯に楕円形の刺突を配す。胴部中位には2条の沈線を巡らせた下に5段の楕円を工字状風に互い違いに配し, その下に口縁部の文様構成と同じく三叉文と弧状の沈線を引く。晩期前葉の御経塚式のものか。19は波状口縁の深鉢で, 波頂部を押さえてくぼませている。晩期のもの。22は台付鉢。

石製品（第13図, 図版34）

24・25は打製石斧である。24は明瞭なくびれをもち, 刃部が大きく広がる撥形を呈し, 側辺に着柄によると考えられるつぶしが顕著にみられる。刃部裏面には使用痕とみられる摩耗した範囲が認められる。25は側辺が直線的に広がる撥形を呈するが, 左側辺は途中で曲がり, 刃部が若干すぼまる。石材は24がデイサイト, 25は粘板岩。



第12図 若栗中村遺跡 縄文時代遺物実測図 (1/3)
SD1089(1) SD1398(8・9・13) 包含層



第13図 若栗中村遺跡 縄文時代遺物実測図 (1/3)
SD1089(21) SD1398(20・23) 包含層

(2) 中世～近世

検出された遺構は掘立柱建物2棟、溝16条、土坑1068基、水田遺構である。溝の中には区画溝と考えられるL字状に曲がるもの等があるが、建物との関係は明確ではない。また、柱痕跡が認められ柱穴になると考えられる土坑は多数あるが、柱列に並ばないため建物として捉えられない遺構であり、ここでは土坑として記述している。

A 掘立柱建物

1号掘立柱建物（SB1, 第21図, 図版6・7）

A2地区中央付近にあり、北東側に向かい約1mの落差を持つ落ち込みの南肩に位置する。桁行3間×梁行2間の東西棟側柱建物で、南側に廂がつくと考える。主軸はN-44°-Eである。桁行7.0m、梁行4.08m、面積28.56㎡を測る。桁行の柱間は不揃いで、倒木痕と考えられるSX215等に削平された柱穴があると考えられ、廂を含めて3間とした。SB2と一部重複しており、SB2の柱穴SP232をSB1の柱穴SP228が切ることから、SB2より新しい建物と考えられる。建物内には焼骨が充填された土坑SK222が位置するが、建物との関係は不明である。柱穴の平面形はほとんどが円形で、直径または長径0.5～1.04m、深さ0.2～0.62mを測る。埋土は黒色粘土質シルトを基調としており、SP213では中央部分が一段深くなり柱痕と考えられる。出土遺物はない。

2号掘立柱建物（SB2, 第21図, 図版6・7）

A2地区北東角付近に位置する。調査区外にかかり部分的な検出であるが、桁行3間×梁行2間以上の東西棟側柱建物と想定している。主軸はN-56°-Eである。SB1の柱穴SP282にSB2の柱穴SP232が切られており、SB1より古い建物である。柱穴はほとんどが直径0.40～0.65mの円形で、SP223は柱穴としたが、本来の柱穴と重複している土坑の可能性はある。埋土は黒褐色粘土質シルト、黒色粘土質シルトを基調としており、SP223は5～30cm大の礫が混じるもので、埋土としても他の柱穴とは異なっている。出土遺物はない。

B 溝・流路

11号溝（SD11, 第23図）

A1地区南半に位置するやや湾曲する東西溝。調査区外にかかり部分的な検出である。Ⅲ層上面で検出した。幅0.67m、深さ0.08mを測り、埋土はオリーブ褐色粘土質シルトとⅢ層（黒色粘土質シルト）の混土層である。埋土中から珠洲の壺片が出土している。

212号溝（SD212, 第23図, 図版7）

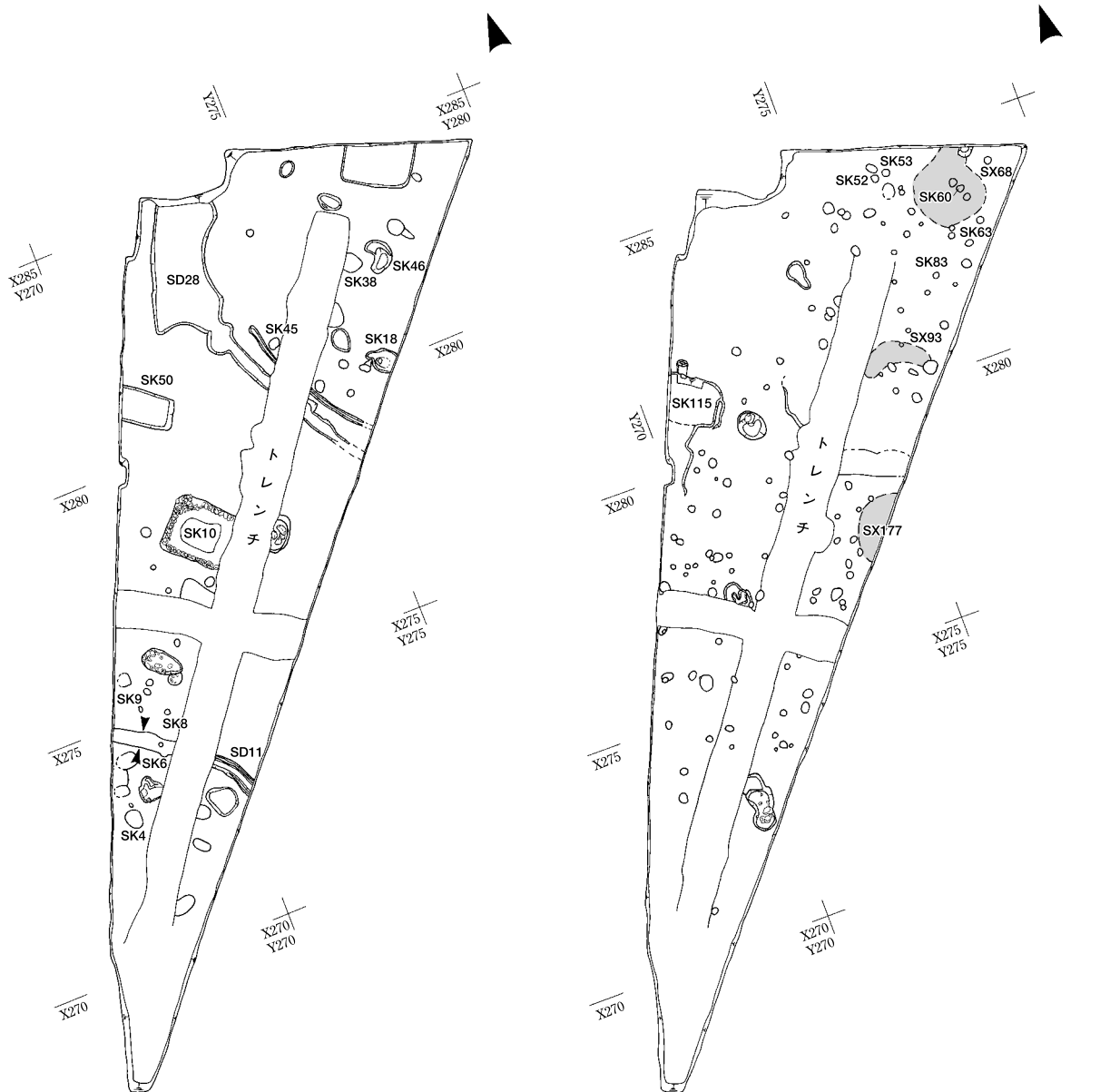
A2地区南半に位置し、X265ラインに沿う東西方向の溝である。調査区外にかかり部分的な検出である。SK217に切られる。幅0.44m、深さ0.06mを測り、埋土は灰黄色砂質シルトを基調とし、暗灰黄色粘土質シルトをブロック状に含む。出土遺物はないが、A1・A3地区検出の中世遺構と同様な埋土であることから、中世の遺構と考えられる。

301号流路（SD301, 第23図, 図版9）

A3地区北半に位置する。Ⅲ層上面で検出した、南東から北西にのび、ゆるく西に折れる自然流路でSD303、SD323を切る。幅3.28m、深さ1.24mを測り、埋土は上位が植物遺体混じりの黒褐色粘土質シルト、中位が黄褐色粘土質シルト、下位が黄褐色砂質土に大きくわかれる。出土遺物は珠洲があり、中世段階には形成されていたと考えられる。

303号溝（SD303, 第23図）

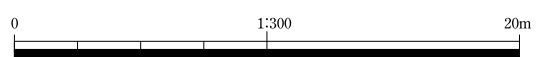
A3地区北半に位置する。Ⅲ層上面検出で、南端をSD301に切られるが、L字状に曲がる溝で



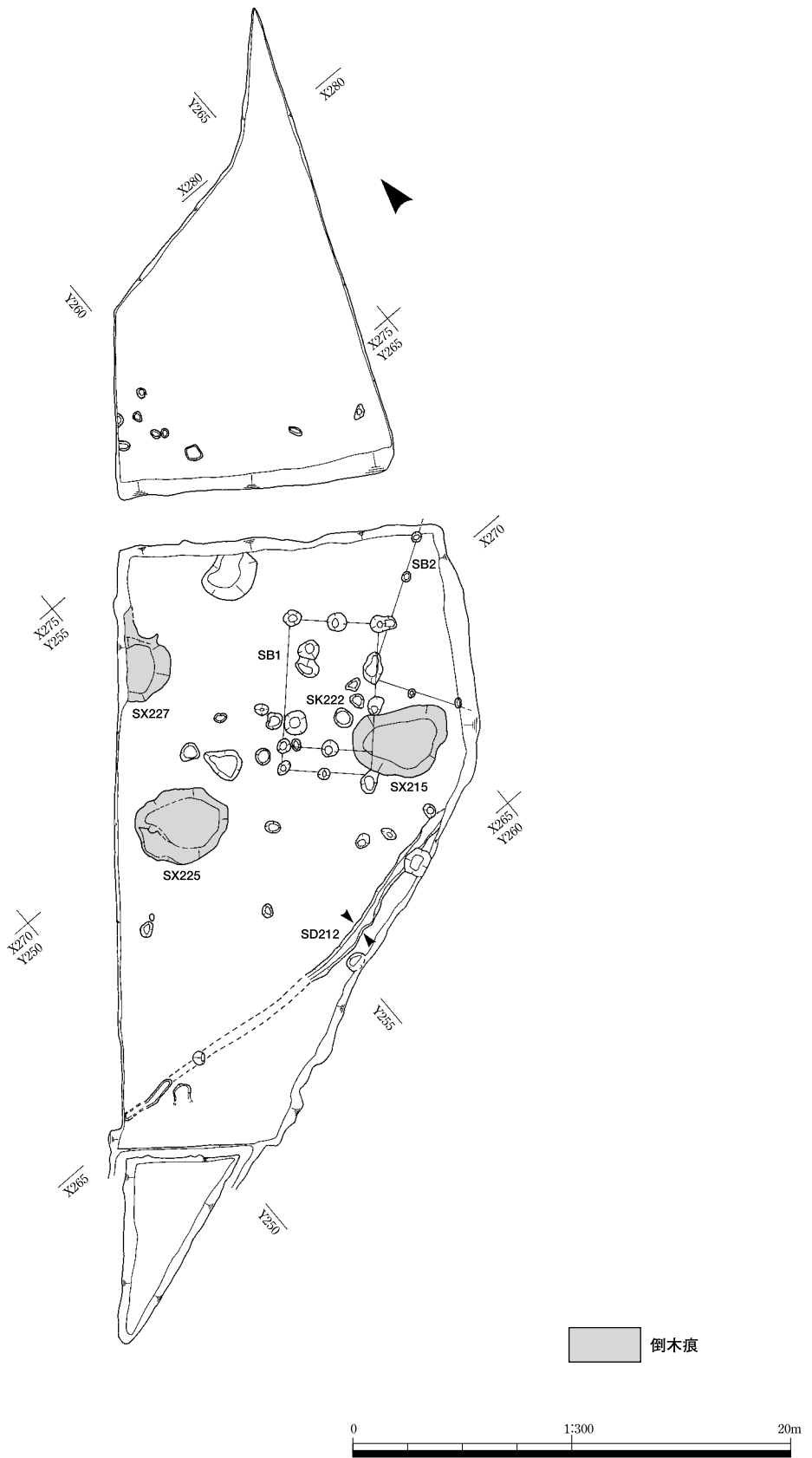
A1 地区上層

A1 地区下層

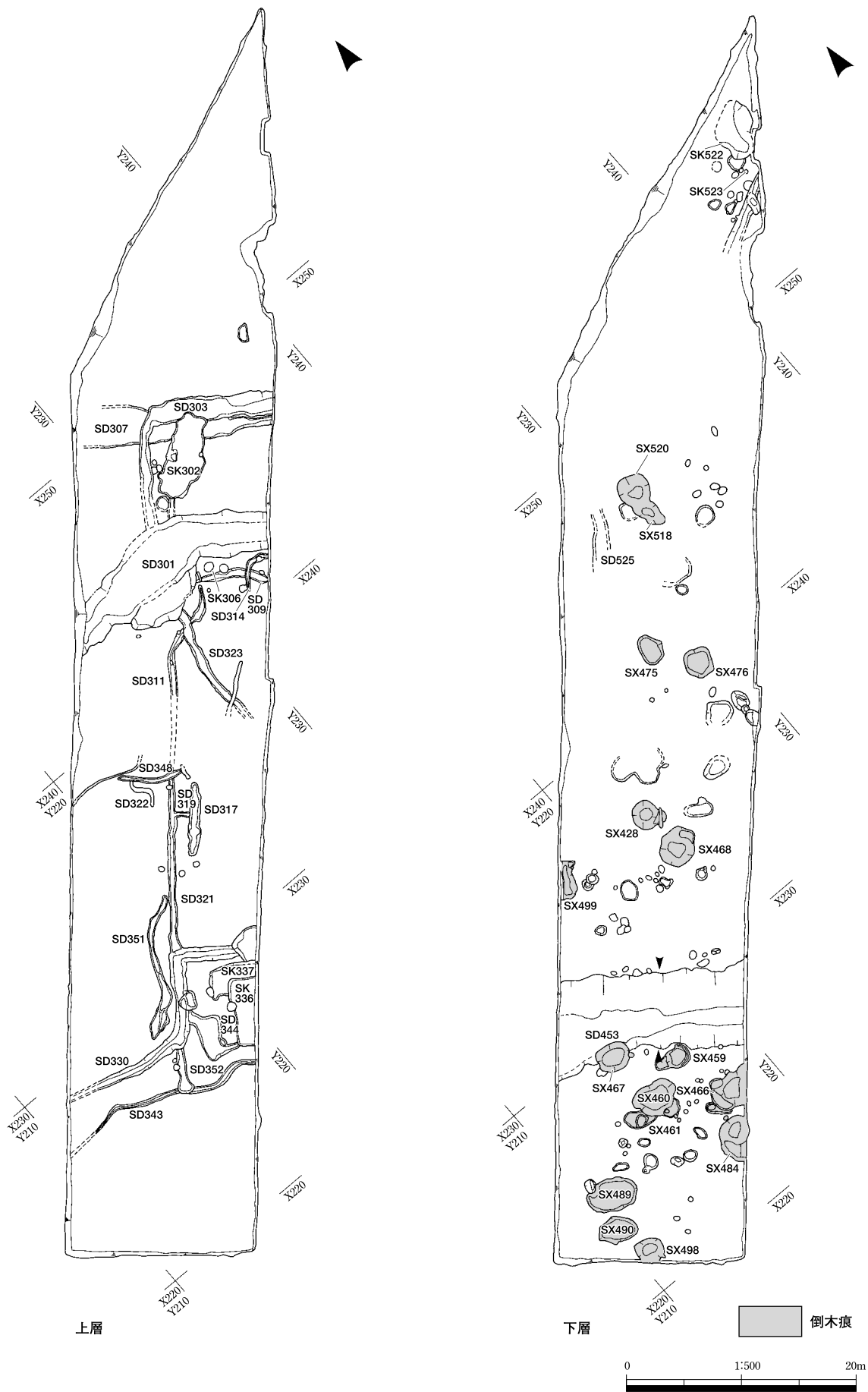
倒木痕



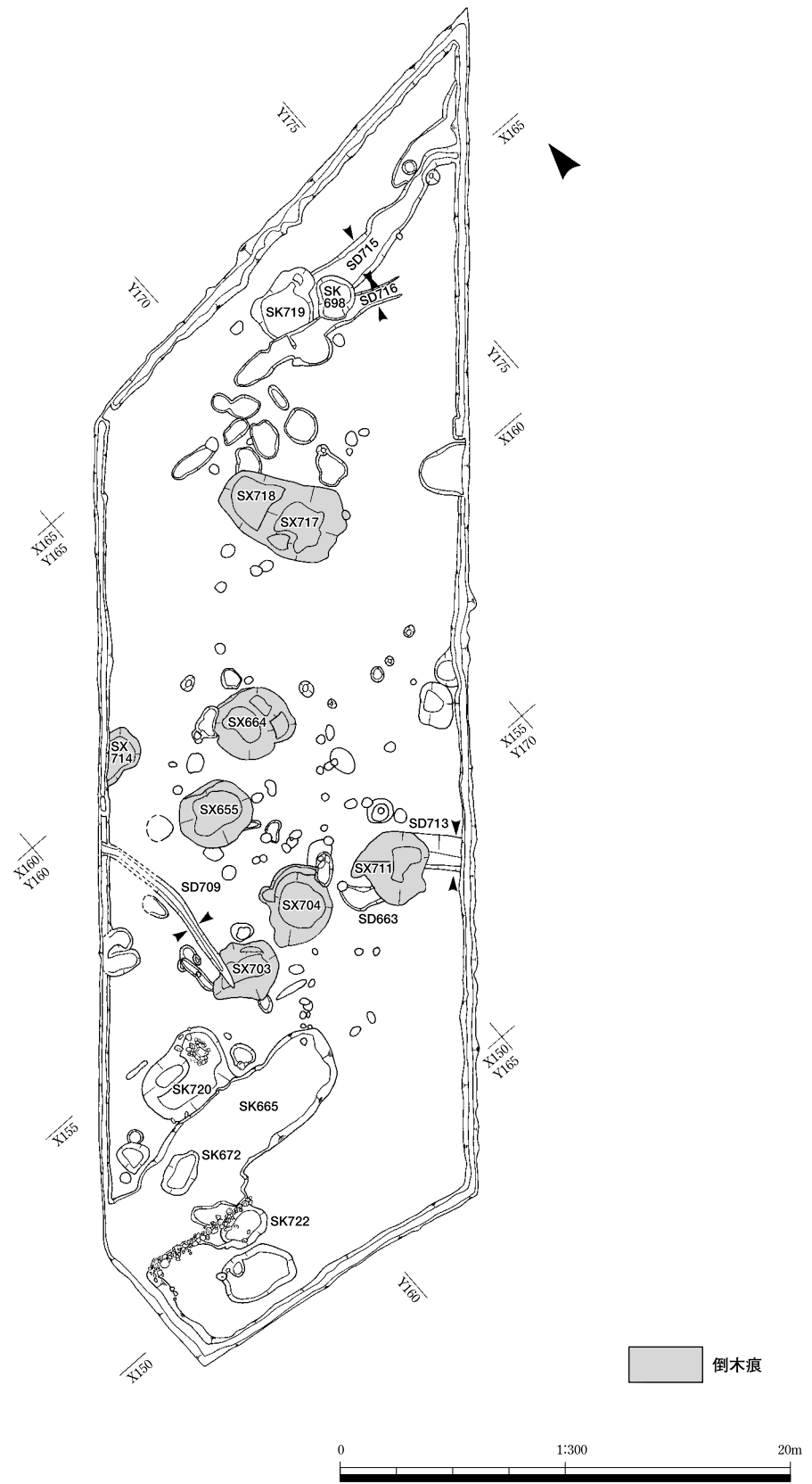
第14図 若栗中村遺跡 遺構全体図 (1:300)
A1 地区



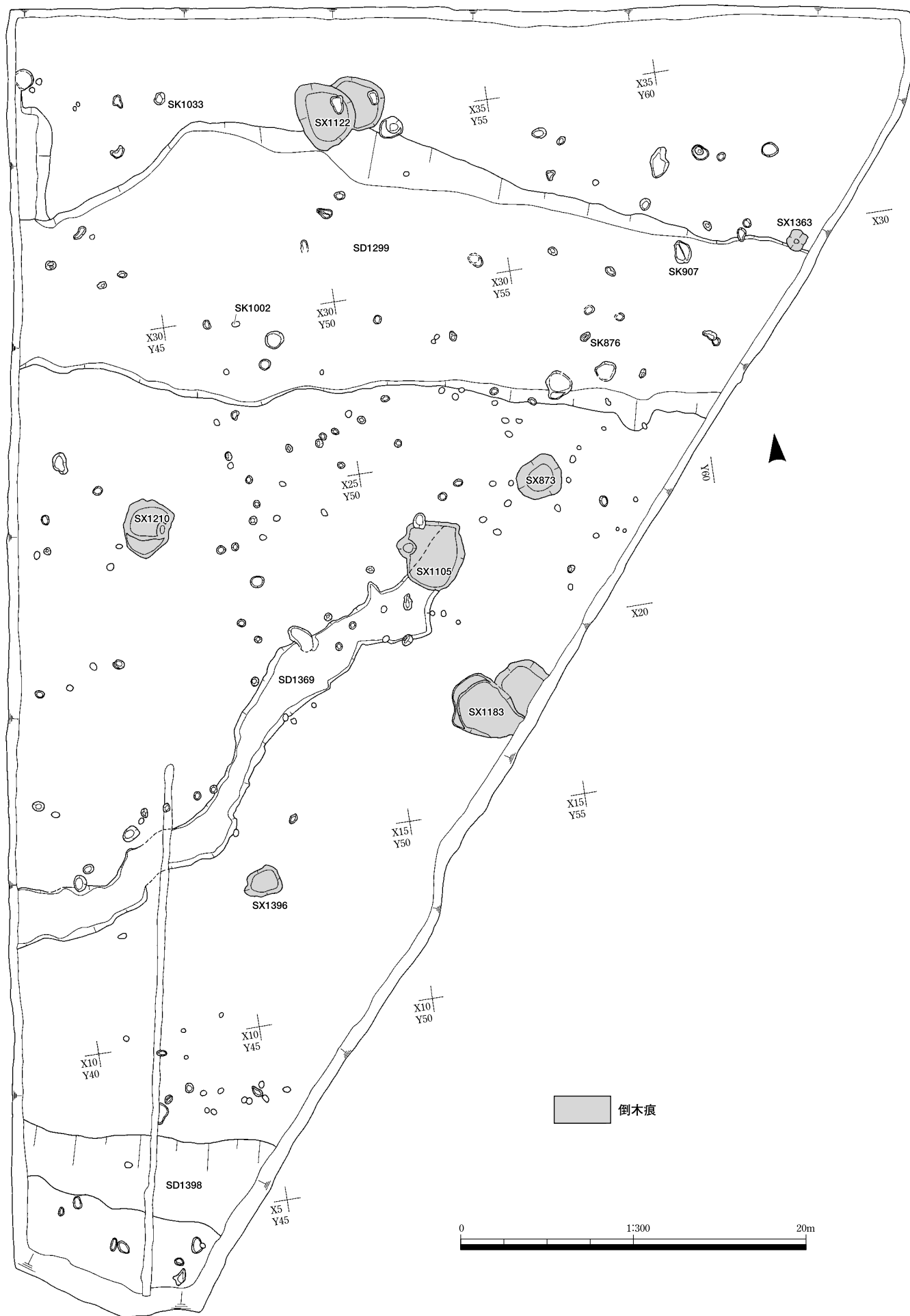
第15図 若栗中村遺跡 遺構全体図 (1:300)
A2地区



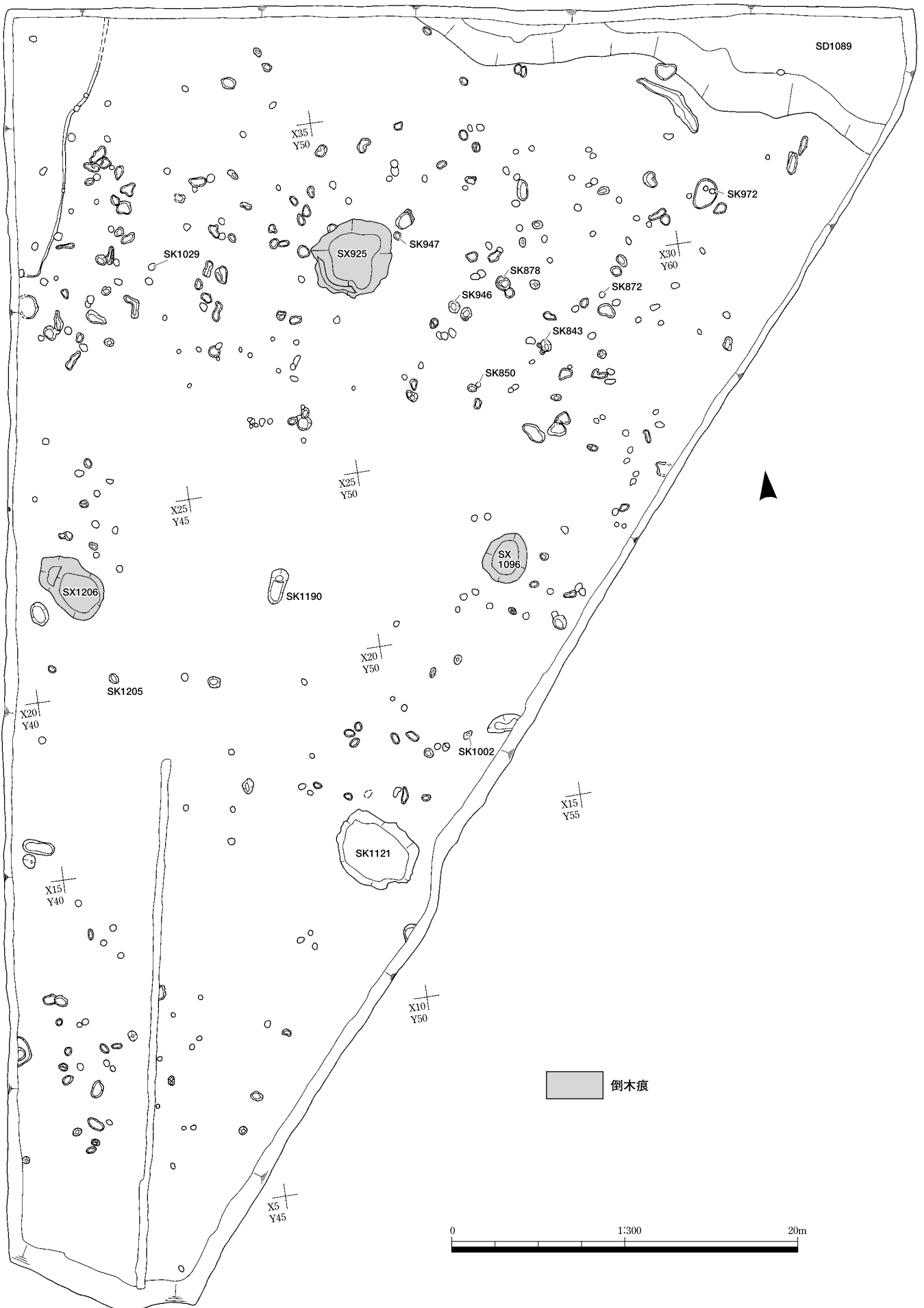
第16図 若栗中村遺跡 遺構全体図 (1:500)
A3地区上層面・下層面



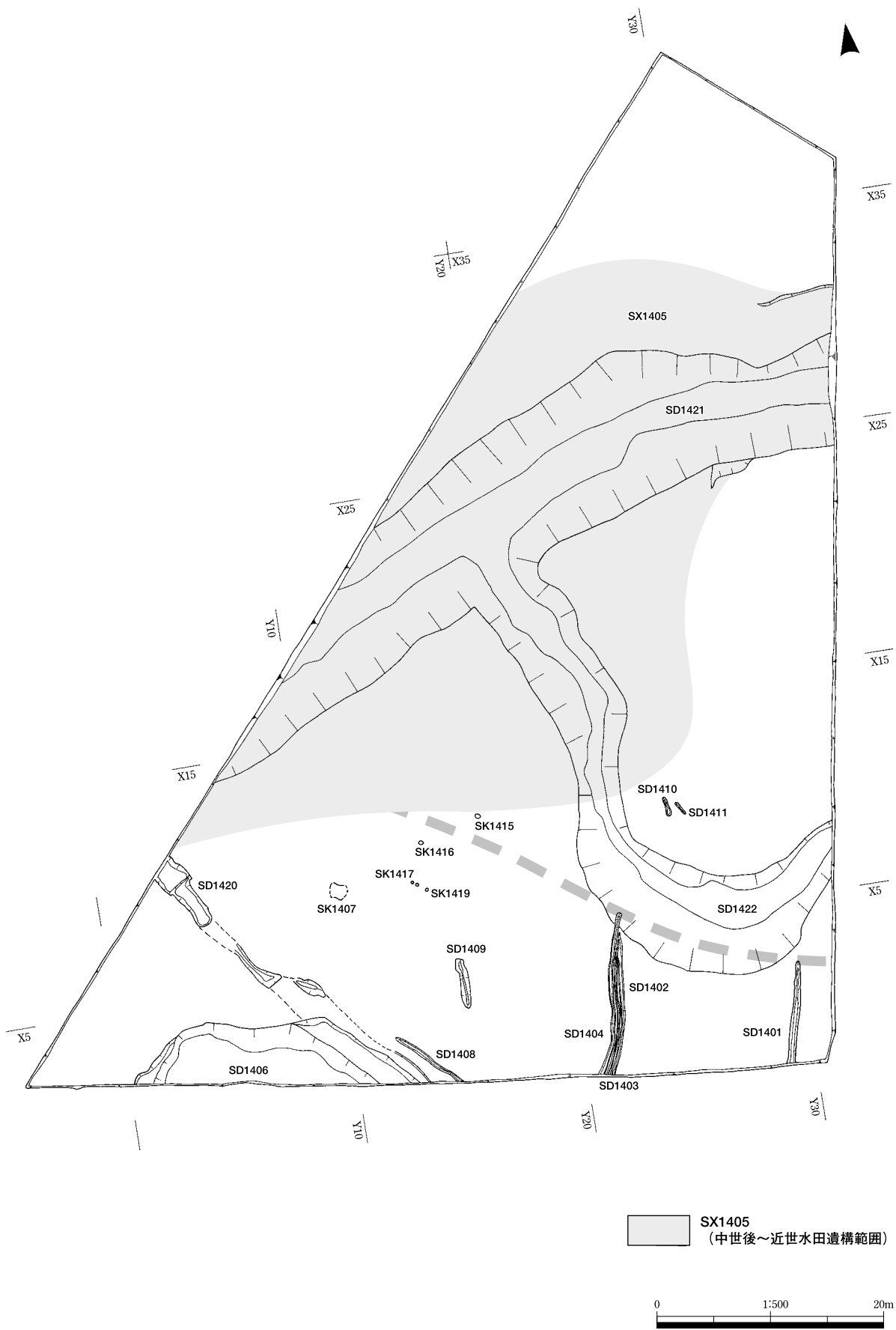
第17図 若栗中村遺跡 遺構全体図 (1:300)
B地区



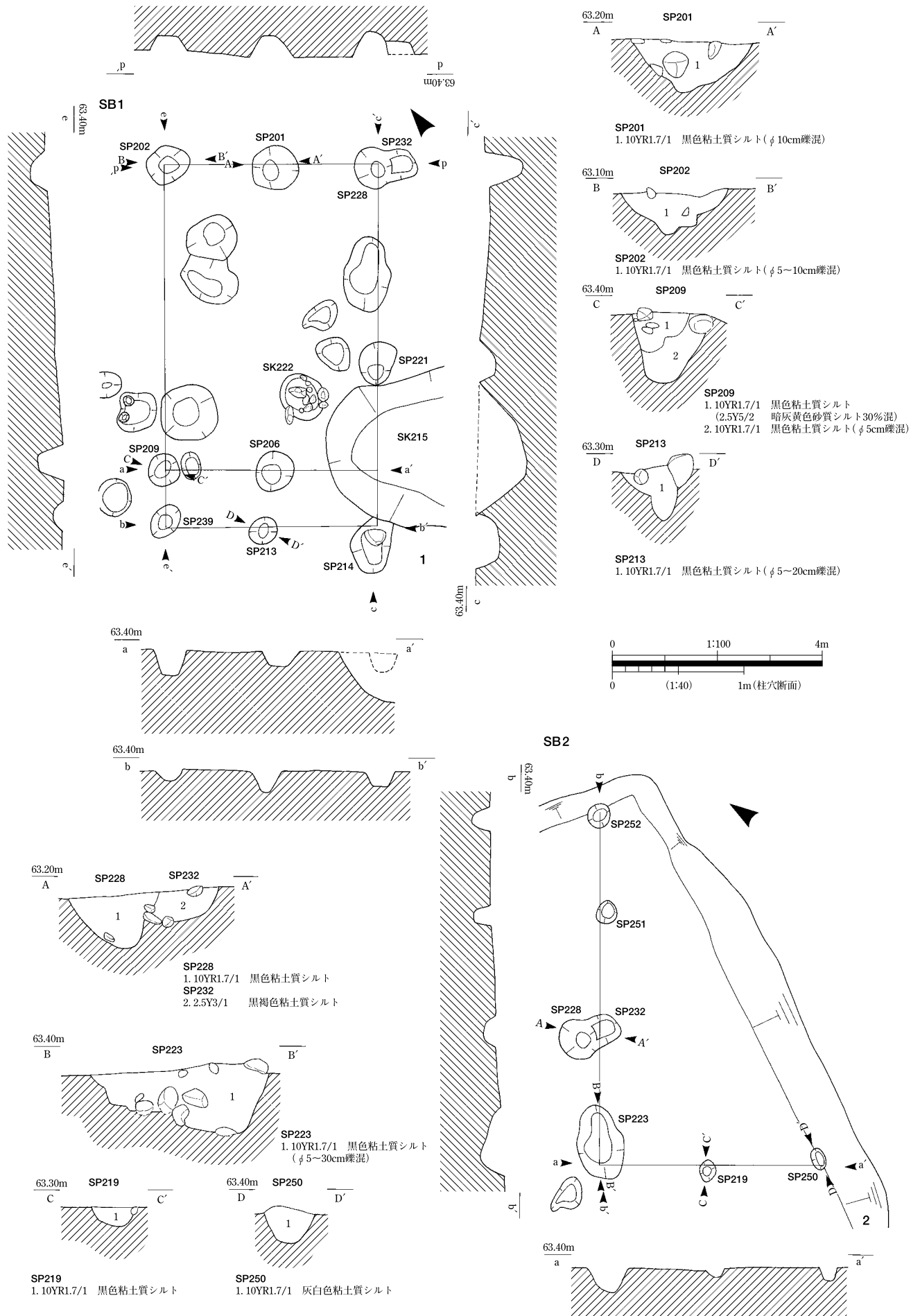
第18図 若栗中村遺跡 遺構全体図 (1:300)
C1地区下層面



第19図 若栗中村遺跡 遺構全体図 (1:300)
C1地区上層面



第20図 若栗中村遺跡 遺構全体図 (1:500)
C2地区



第21図 若栗中村遺跡 中世~近世遺構実測図
1. SB1 2. SB2

323号溝 (SD323, 第23図)

A3地区北半に位置する南北方向の溝で、Ⅲ層上面で検出している。SD311を切り、SD301に切られる。幅0.78m、深さ0.17mを測り、埋土はオリーブ褐色粗砂を基調とする。SD303と一続きの溝になる可能性がある。出土遺物はない。

330号溝 (SD330, 第23図)

A3地区南半に位置する溝で、Ⅲ層上面で検出している。南東から北西に延び、中央付近でSD321と重複するように直角に屈曲し、さらに西へむかって90°近く屈曲する。SD303と同一方向へ屈曲することから、区画溝と考えられる。SK329、SK335に切られ、SD321、SD352を切る。幅1.42m、深さ0.39mを測り、埋土は灰黄色砂と黒色粘土質シルトの互層である。出土遺物はない。

343号溝 (SD343, 第23図)

A3地区南半に位置する東西方向の溝で、Ⅲ層上面で検出している。SD352を切る。A3地区内で最も南にあり、SD343を境に南側では遺構は確認されていない。SD330の一部と並走しており、区画溝の可能性が高い。幅0.34m、深さ0.27mを測り、埋土は灰黄色粗砂混じりの暗灰黄色粘土質シルトの単層である。出土遺物はない。

453号流路 (SD453, 第23図)

A3地区南半に位置する東西方向の自然流路である。Ⅳ層上面で検出しており、SK416、SK417、SK432、SK467に切られる。幅6.14m、深さ0.61mを測る。埋土は黒色粘土質シルト、灰黄褐色砂質シルト、暗灰黄色砂質シルトにわかれる。出土遺物はない。

709号溝 (SD709, 第23図, 図版10)

B地区中央付近西側に位置する。ゆるくカーブする溝で、SX703を切る。幅0.42m、深さ0.17mを測り、埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

713号溝 (SD713, 第23図)

B地区中央付近東側に位置する。西端をSK711に切られ、東側は調査区外にかかり部分的な検出である。幅1.51m、深さ0.49mを測り、埋土は黒色粘土質シルト、黄褐色砂混じりの暗灰黄色砂質シルトである。出土遺物はない。

715号溝 (SD715, 第23図)

B地区北端付近に位置する東西方向の溝である。SK698、SK705、SK719に切られ、調査区外東側にかかる。幅1.54m、深さ0.15mを測る浅い溝で、埋土は黄褐色砂混じりの暗灰黄色砂質シルトの単層である。出土遺物はない。

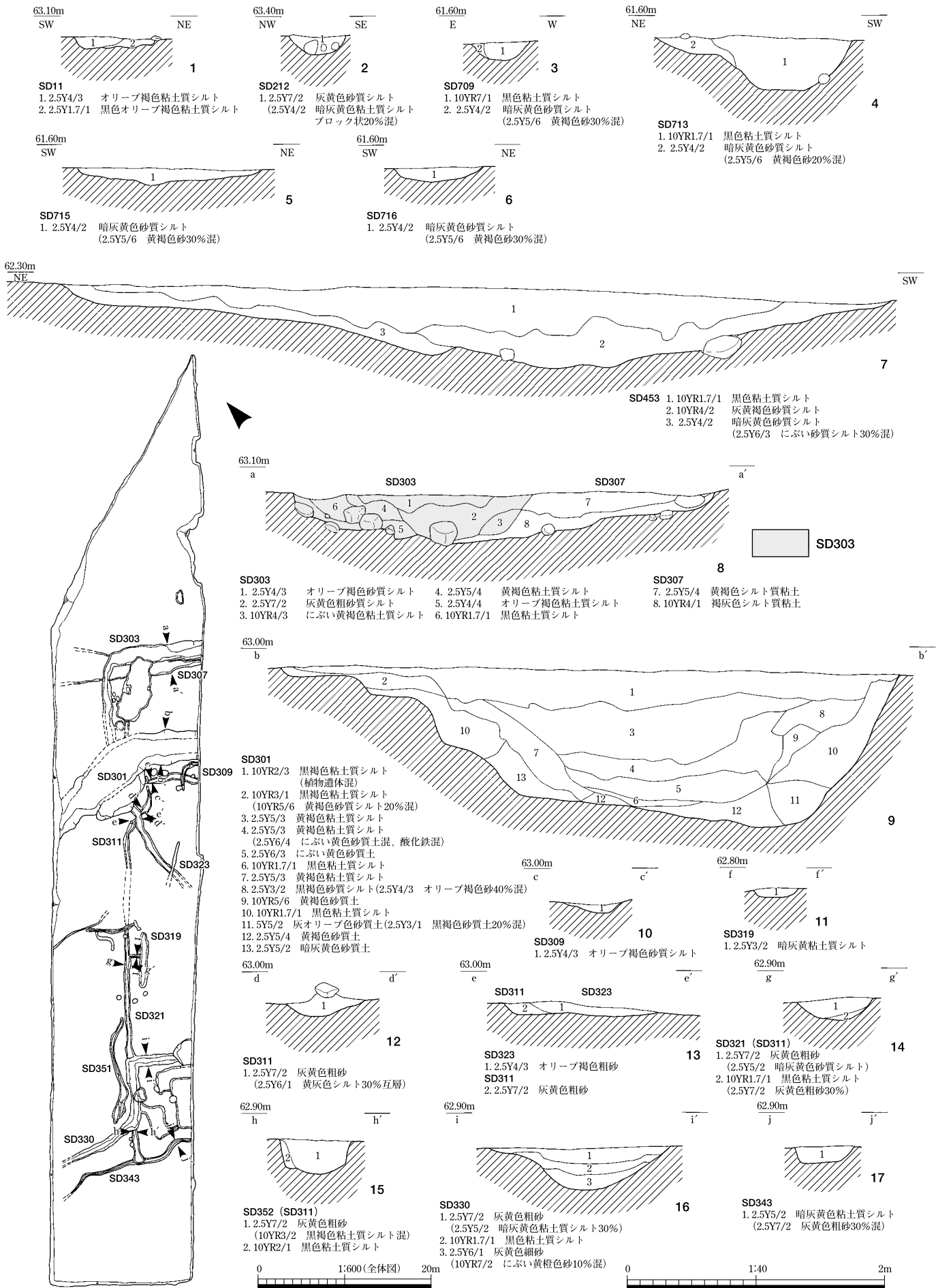
716号溝 (SD716, 第23図, 図版10)

B地区北端付近に位置し、SD715とほぼ並走する溝である。SK698に切られ、SK719を切る。幅1.0m、深さ0.21mを測り、埋土はSD715と同様の黄褐色砂混じりの暗灰黄色砂質シルトである。出土遺物はない。

1406号流路 (SD1406, 第24図)

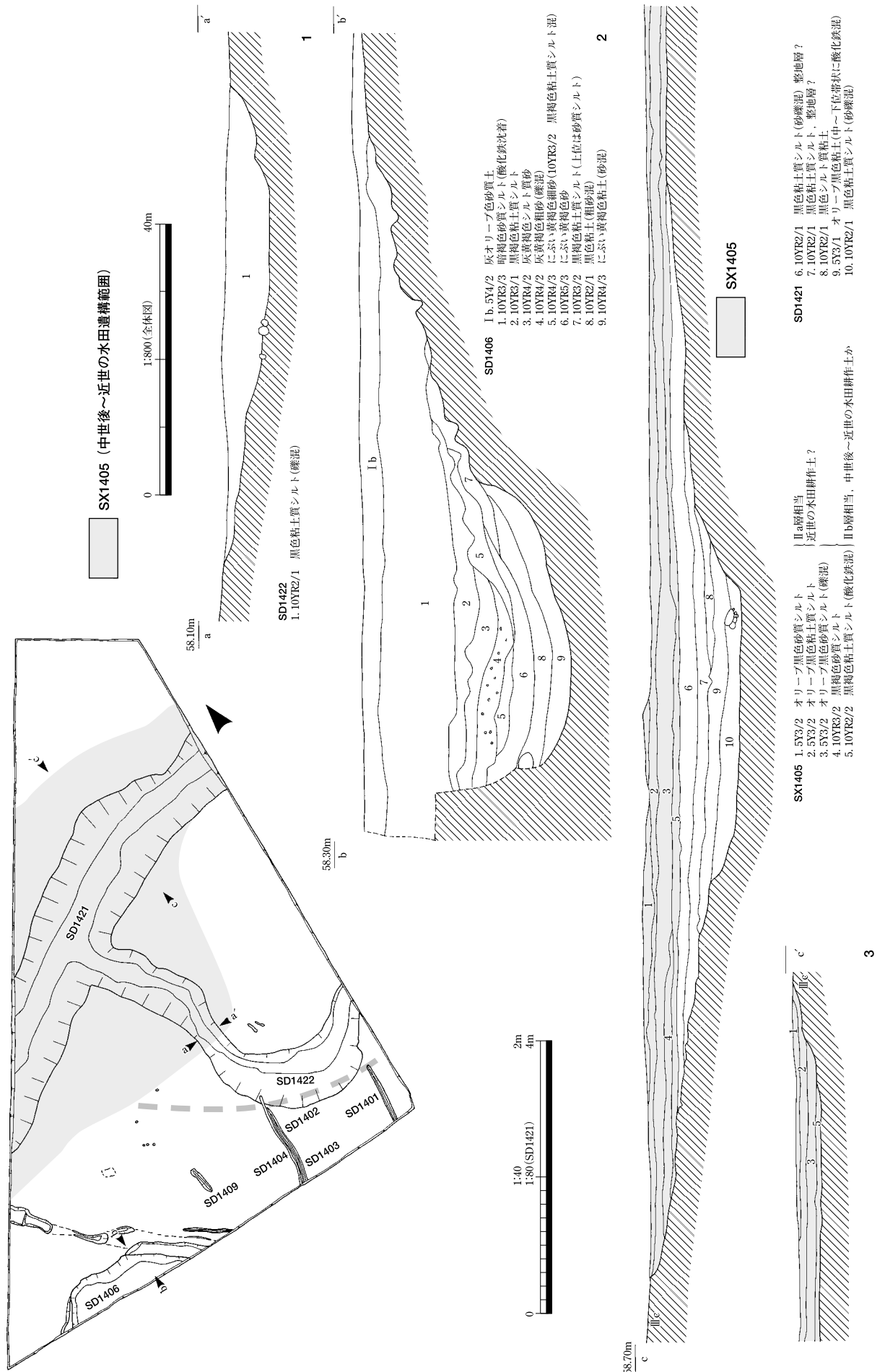
C2地区南西角付近に位置する自然流路。Ⅲb層上面で検出しており、大部分が調査区外南側にかかり、ごく一部を確認した。検出した最大幅は5.0m、深さは1.1mを測る。埋土は酸化鉄を帯状に含む暗褐色砂質シルト、黒褐色粘土質シルト、灰黄褐色砂等からなり、黒色系の粘土質シルトまたは粘土と黄褐色系の砂とが互層をなしている。出土遺物は土師器片のみである。

4 遺構・遺物



第23図 若栗中村遺跡 中世～近世遺構実測図

1. SD11 2. SD212 3. SD706 4. SD713 5. SD715 6. SD716 7. SD453 8. SD303・SD307 9. SD301
10. SD309 11. SD319 12. SD311 13. SD311・SD323 14. SD321 15. SD352 16. SD330 17. SD343



第24図 若栗中村遺跡 中世～近世遺構実測図
1. SD1422 2. SD1406 3. SX1405・SD1421

1421号流路（SD1421, 第24図, 図版13・16）

C2地区北半に位置する東西方向の自然流路。調査区中央付近でSD1422と分岐する。幅13.6m, 深さ0.88mを測る。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする水平堆積で、一部に酸化鉄の厚い沈着がみられる。最下層から縄文土器が出土しており、調査区東側に位置するC1地区のSD1299と一連の流路と考えられ、SD1421の形成は縄文時代まで遡ると考える。遺物は埋土上位（6・7層）から土師器(34), 珠洲(53~55)が出土する。34は口縁部に一段の横ナデを施すやや深身の皿で、14世紀後半~15世紀のものか。54は直線的に開く器形で、口縁端部はシャープで平直に仕上げられる。Ⅲ期か。54が13世紀後半~14世紀と若干古くなるが、大半は14世紀~15世紀にかけての時期のものと考えられる。SD1421上面に中世後半~近世に比定されるSX1405が重複していることから、中世の段階には窪地状になっていたと思われ、14世紀代に水田等として開発されたと考えられる。

1422号流路（SD1422, 第24図）

C2地区南半に位置する自然流路でⅣ層上面で検出している。東へ大きく蛇行し、調査区中央付近でSD1421から分岐する。調査区東側C1地区のSD1398につながると考えられる。幅9.0m, 深さ0.9mを測り、埋土は礫混じりの黒色粘土質シルト単層である。SD1422の上面には中世後半~近世と考えられる水田耕作土層が堆積しており、SD1422は中世後半までには埋没していたと考えられる。埋土中からの出土遺物はないが、SD1422の流路周辺包含層からは縄文土器がまとまって出土しており、流路の形成時期は縄文時代まで遡る可能性がある。

C 土坑

4号土坑（SK4, 第25図）

A1地区南半西寄りに位置する円形土坑で、Ⅲ層上面で検出している。調査区外西側にかかり、検出した範囲は長さ0.54m, 幅0.35m, 深さ0.20mを測る。SK5を切る。埋土は黄褐色砂質シルト混じりのオリーブ褐色粘土質シルトで、埋土中から中世土師器、瓦質土器が出土している。

5号土坑（SK5, 第25図）

A1地区南半西寄りに位置するⅢ層上面検出の不整形土坑。調査区外西側にかかり、SK4, SK6に切られており、部分的な検出である。検出した範囲は長さ0.72m, 幅0.29m, 深さ0.12mを測る。埋土は炭化物混じりの黒褐色粘土質シルトを基調とし、最下層に黄灰色粘土質シルトが堆積する。出土遺物は中世土師器がある。

6号土坑（SK6, 第25図）

A1地区南半西寄りに位置するⅢ層上面検出の楕円形土坑。調査区外西側にかかり、検出した範囲は長さ0.72m, 幅0.70m, 深さ0.22mを測る。SK5を切る。埋土は炭化物混じりの黒褐色粘土質シルトである。出土遺物はない。

8号土坑（SK8, 第25図）

A1地区南半に位置する円形土坑。Ⅲ層上面で検出し、直径0.25m, 深さ0.32mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物には土師器片があるが、混入の可能性が高い。

10号土坑（SK10, 第25図, 図版5）

A1地区中央に位置する方形土坑で、Ⅲ層上面で検出している。南東辺を現代の攪乱により破壊されているが、長さ2.78m, 幅2.57m, 深さ0.45mを測る。土坑の周囲に10~30cm大の川原石を2段積みにした石積みが巡る。底面はすり鉢状を呈し、炭化物混じりの灰白色シルト質粘土を貼り付け叩き締めて貼り床状にしている。埋土中には20~50cm大の川原石を乱積みしたように充足している。

出土遺物はなく、時期は不明だが、近世以降、近現代の所産の可能性はある。

18号土坑（S K 18, 第25図, 図版5）

A 1 地区北半東寄りに位置する不整形土坑で、Ⅲ層上面で検出している。調査区外東側にかかり、検出した範囲は長さ0.95m、幅0.94m、深さ0.16mを測る。埋土はオリーブ褐色砂質シルトで、炭化物と骨片を多量に含む。埋土に炭化物・骨片を含む土坑がS K 18の他にS K 38, S K 46の2基があり、いずれもS K 8の北側5mほどに集中している。骨片は被熱した哺乳類のもので、小片のため、種までは同定^{注3}できなかつた。出土遺物はなく、性格・時期ともに不明。

38号土坑（S K 18, 第25図, 図版5）

A 1 地区北半に位置する平面円形を呈する土坑で、Ⅲ層上面で検出している。西側を包蔵地確認トレンチにより破壊されているが、検出した範囲は長さ0.76m、幅0.75m、深さ0.21mを測る。埋土はオリーブ褐色粘土質シルト、同砂質シルト、黒褐色粘土質シルト、褐灰色砂質シルトからなり、炭化物及び骨片を多量に含む。骨片は被熱した小片である。出土遺物はなく、性格・時期ともに不明。

46号土坑（S K 46号土坑, 第25図）

A 1 地区北半に位置する三日月状の不整形土坑で、Ⅲ層上面で検出している。長さ1.30m、幅1.22m、深さ0.34mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルトで、炭化物及び骨片を多量に含む。炭化物を放射性炭素年代測定に出した結果1665～1952年という結果を得ている^{注4}。この年代は包含層出土遺物も含めた遺跡の年代観と一致する。また、骨片は被熱した小片で、種は不明。

50号土坑（S K 50, 第25図）

A 1 地区北半西寄りに位置するⅢ層上面検出の方形土坑。調査区外西側にかかり、検出した範囲は長さ2.00m、幅1.46m、深さ0.27mを測る。底面がほぼ平坦な浅い土坑で、埋土は黒褐色粘土質シルト、オリーブ褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は瓦質土器がある。

52号土坑（S K 52, 第25図, 図版5）

A 1 地区北半に位置する円形土坑で、Ⅳ層上面で検出している。長さ0.34m、幅0.32m、深さ0.36mを測る。埋土は黒褐色砂質シルト、灰褐色砂質シルトを基調とし、1層・2層は柱痕と考えられ、柱穴の可能性はある。S K 52の他にもA 1 地区北東部にはS K 53, S K 60, S K 61, S K 63, S K 83等の柱痕のみられる土坑があるが、柱列としては並ばず、建物として捉えられない。

222号土坑（S K 222, 第26図, 図版7）

A 2 地区中央付近, S B 1 内に位置する楕円形土坑で、長径0.90m、短径0.76m、深さ0.16mを測る。埋土は黒色粘土質シルトを基調とし、底面に10～30cm大の川原石が乱雑に入る。埋土中には焼骨が多量に混じるが、小片のため種までは同定できなかつた^{注3}。出土遺物はない。

302号土坑（S K 302, 第26図, 図版9）

A 3 地区北半に位置する不整形土坑で、Ⅲ層上面で検出している。S D 303, S D 307, S D 345を切り、S K 305に切られる。長さ7.50m、幅3.37m、深さ0.43mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトの単層である。埋土中から珠洲が出土している。

306号土坑（S K 306, 第26・29図, 図版16）

A 3 地区北半, S D 301の屈曲部付近に位置する楕円形土坑で、Ⅲ層上面で検出している。長径0.96m、短径0.78m、深さ0.32mを測る。埋土は黒色粘土質シルトブロックが混じるオリーブ褐色砂質シルトを基調としている。埋土中から中世土師器皿(26)が出土している。26は体部が直線的に開く器形で、口縁部に一段ナデを施す。14世紀後半～15世紀半ば頃のものか。

337号土坑（S K337, 第27図）

A 3 地区南半東寄りに位置する方形を呈する土坑で、Ⅲ層上面で検出している。調査区外東側にかかり、検出した範囲は長さ3.60m、幅2.40m、深さ0.13mを測る。S K335を切り、S K336に切られる。埋土は灰白色粗砂の単層である。珠洲が出土している。

522号土坑（S K522, 第27・29図, 図版9・15）

A 3 地区北端に位置する不整形土坑で、Ⅳ層上面で検出している。北側を現代の攪乱により破壊されており、検出した範囲は長さ3.46m、幅1.88m、深さ0.66mを測る。S K521を切る。埋土は礫混じりの黒色粘土質シルトを基調とし、下位に灰黄色粗砂が堆積する。S K522東端の底面から中世土師器皿が1枚据えられたような状態で出土した。出土遺物はこの中世土師器皿(27)のみで、27は平底の底部からやや内湾気味の体部がつく。口縁部に強い横ナデを施し、端部をつまみ出すように外反させる。14世紀後半～15世紀前半代のものと考えられる。

523号土坑（S K523, 第26図）

A 3 地区北端、S K522の南側1mに位置する円形土坑。Ⅳ層上面で検出している。長さ0.35m、幅0.31m、深さ0.20mを測り、埋土はにぶい黄色砂混じりの暗灰黄色砂質シルトの単層である。出土遺物は、珠洲、中国製青磁、越中瀬戸、越前、唐津、近世陶器があるが、いずれも小片。

665号土坑（S K665, 第28図, 図版10）

B 地区南西角に位置する不整形土坑で、調査区外西側にのびる。S K670, S K671に切られ、S K720, S K672, S K273を切る。検出範囲は長さ13.50m、幅4.70m、深さ0.28mを測る。南側の一部に10～30cm大の川原石が乱積みされた石列が約5.6mの長さで並ぶ。埋土は灰色粘土質シルト、暗灰黄色砂質シルト、青灰色粘土質シルトである。埋土中から越中瀬戸、唐津、伊万里、瀬戸が出土しており、近世以降、近現代の可能性はある。

843号土坑（S K843, 第26図）

C 1 地区北半に位置するⅢc層上面検出の円形土坑。S K844, S K845を切る。長さ0.68m、幅0.56m、深さ0.34mを測る。埋土は黒色粘土質シルト、褐色砂質シルト混じりの黒色粘土質シルトで、中央が一段深く1層の黒色粘土質シルトは柱痕とみられる。C 1 地区北半には柱痕のみられる土坑が複数あるが、いずれも柱列に並ばず建物としては捉えられない。出土遺物はない。

850号土坑（S K850, 第26図）

C 1 地区北半に位置する円形土坑で、Ⅲc層上面で検出している。長さ0.28m、幅0.26m、深さ0.42mを測り、埋土は黒色粘土質シルト、褐色砂質シルト混じりの黒色粘土質シルトである。1層は柱痕とみられ、建物としては捉えられないが、柱穴の可能性はある。出土遺物はない。

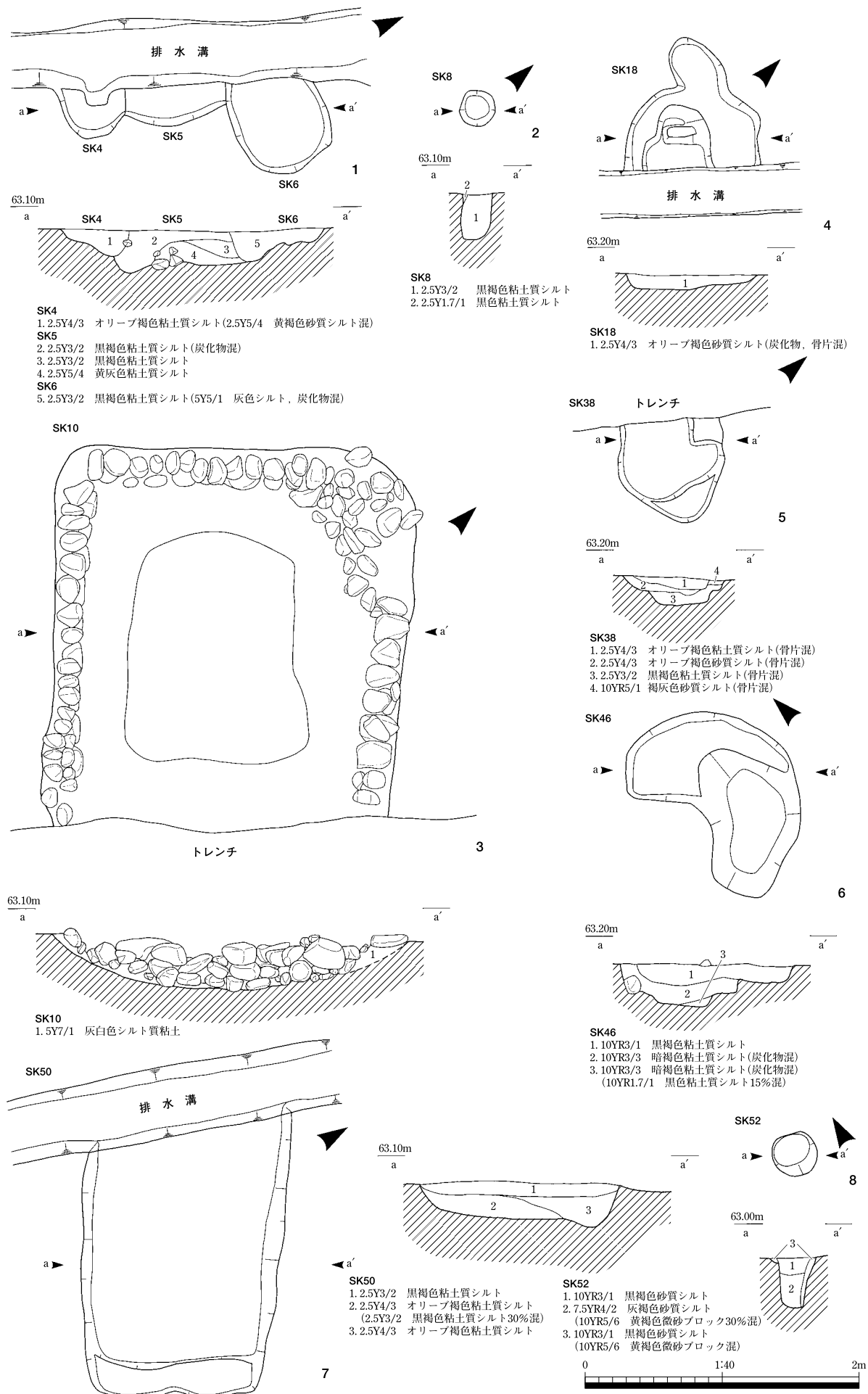
946号土坑（S K946, 第27図）

C 1 地区北半に位置する円形土坑で、Ⅲc層上面で検出している。長さ0.66m、幅0.62m、深さ0.47mを測る。埋土は黒色砂質シルト、褐色砂質シルト混じりの黒色粘土質シルトである。底面中央が一段深く、柱痕とみられ、柱穴の可能性はある。出土遺物はない。

947号土坑（S K947, 第27図）

C 1 地区北半に位置する円形土坑。Ⅲc層上面で検出しており、長さ0.41m、幅0.41m、深さ0.30mを測る。埋土は黒色粘土質シルトを基調とし、柱痕とみられる。周辺には柱痕のみられる土坑が複数あるが、柱列には並ばない。出土遺物はない。

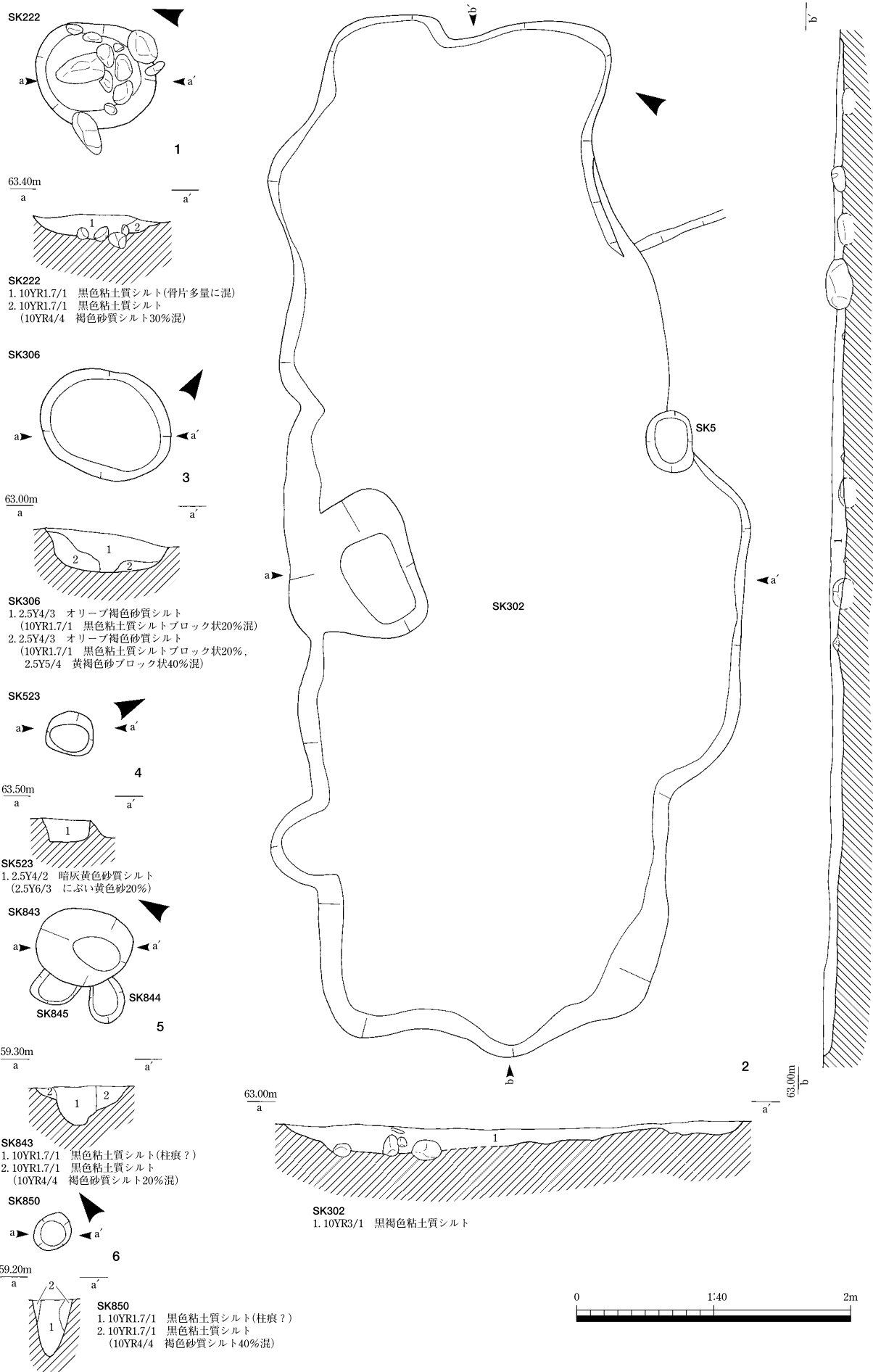
1002号土坑（S K1002, 第28図）



第25図 若栗中村遺跡 中世～近世遺構実測図

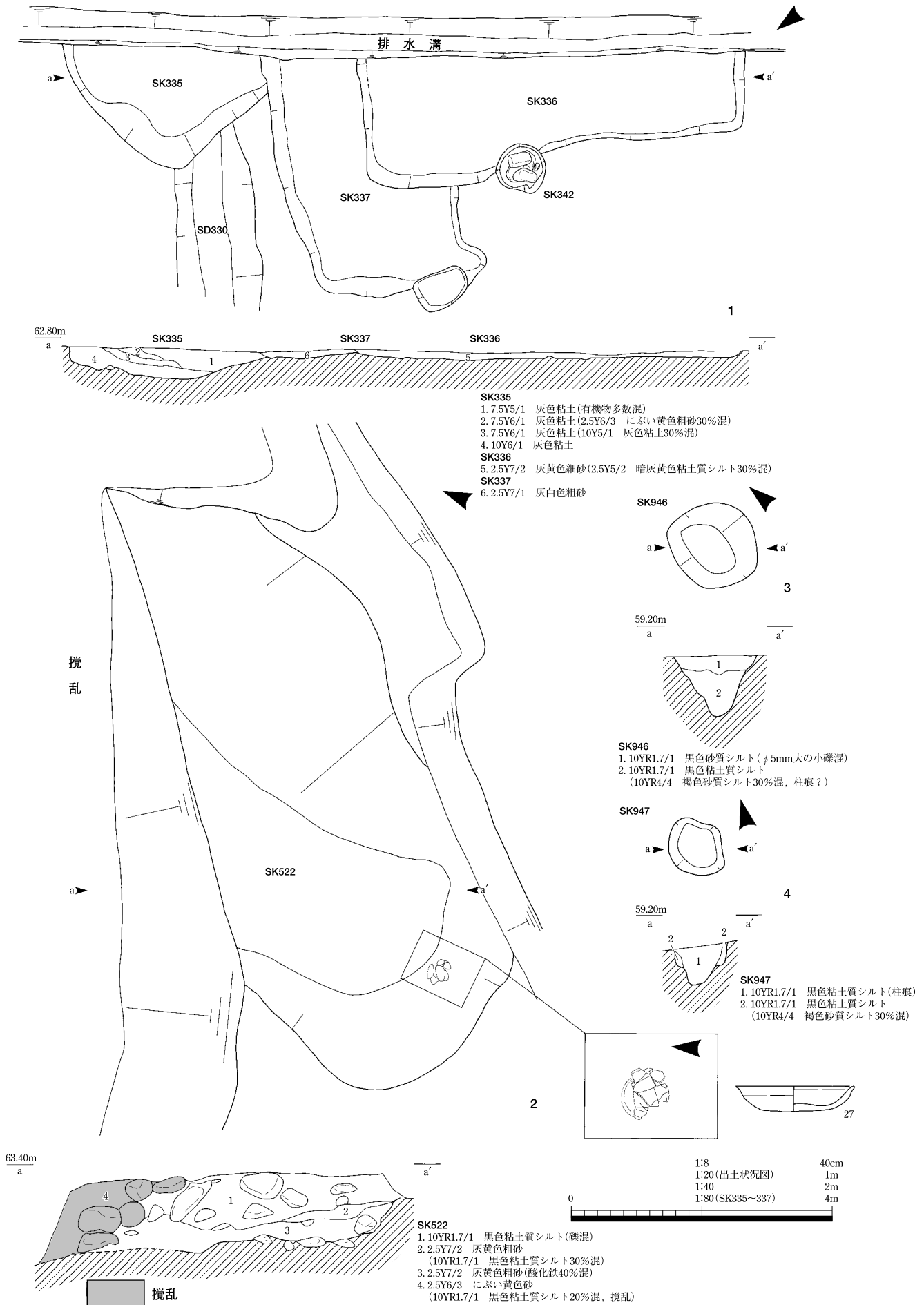
1. SK4～SK6 2. SK8 3. SK10 4. SK18 5. SK38 6. SK46 7. SK50 8. SK52

4 遺構・遺物



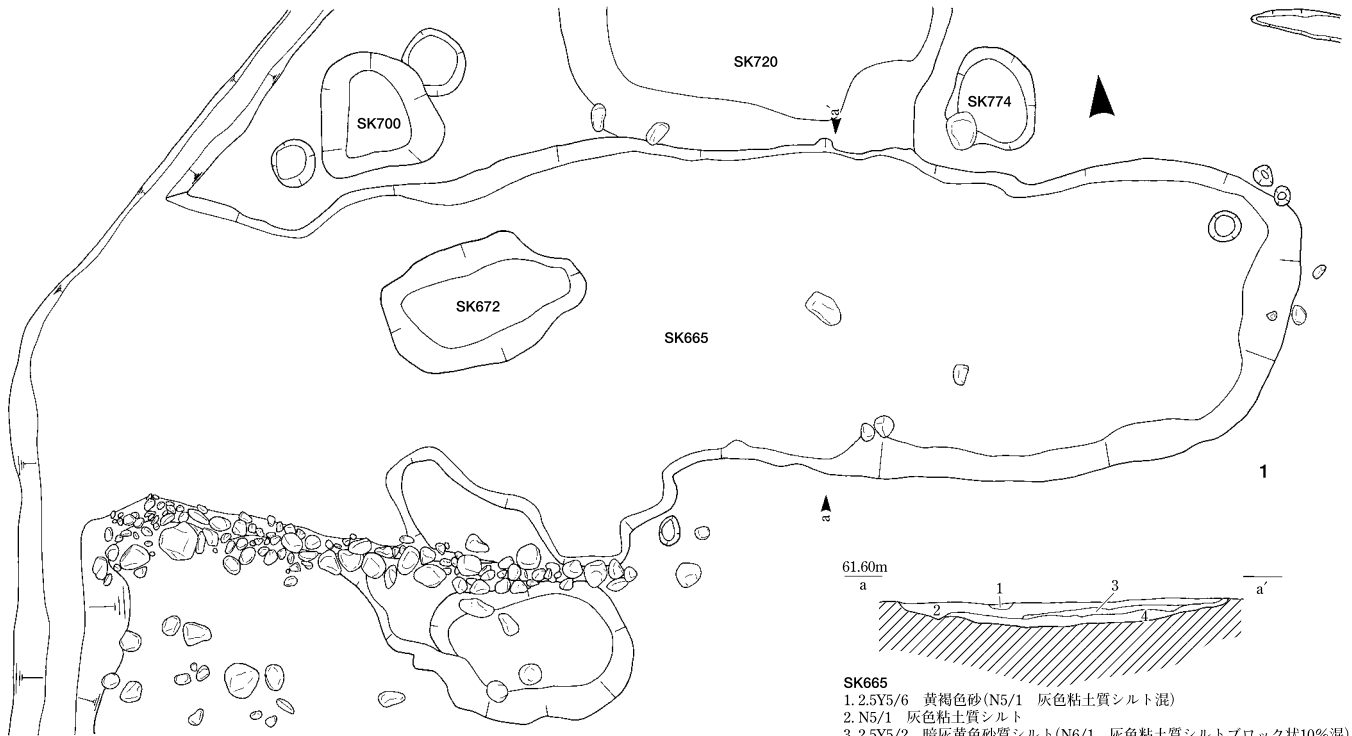
第26図 若栗中村遺跡 中世～近世遺構実測図

1. SK222 2. SK302 3. SK306 4. SK523 5. SK843 6. SK850



第27図 若栗中村遺跡 中世～近世遺構実測図

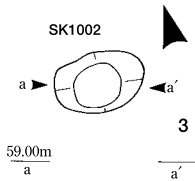
1. SK335～SK337 2. SK522 3. SK946 4. SK947



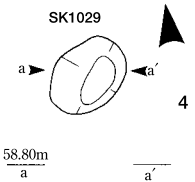
- SK665**
- 2.5Y5/6 黄褐色砂(N5/1 灰色粘土質シルト混)
 - N5/1 灰色粘土質シルト
 - 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト(N6/1 灰色粘土質シルトブロック状10%混)
 - 5B6/1 青灰色粘土質シルト(N5/1 灰色粘土質シルト30%混)



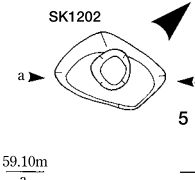
- SK1121**
- 10YR2/1 黒色粘土質シルト(2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂, ϕ ~40cm礫混)
- SX1368**
- 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト(ϕ ~30cm礫混)
 - 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト(10YR3/3 暗褐色粘土質シルト20%混)



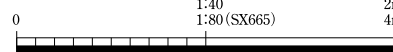
- SK1002**
- 10YR3/1 黒褐色砂質シルト(柱痕)
 - 10YR1.7/1 黒色粘土質シルト



- SK1029**
- 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト(柱痕)
 - 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト(2.5Y6/4 にふい黄色砂質シルト30%混)



- SK1202**
- 10YR1.7/1 黒色粘土質シルト(柱痕)
 - 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト



第28図 若栗中村遺跡 中世~近世遺構実測図

1. SK665 2. SK1121 3. SK1002 4. SK1029 5. SK1202

C 1 地区北半に位置する楕円形土坑。Ⅳ層上面，SD1299の埋土の上面で検出している。長径0.42m，短径0.32m，深さ0.35mを測り，埋土は黒褐色砂質シルトを基調としている。底面中央のやや東寄りか円形に一段深くなっており，柱痕とみられ，柱穴の可能性はある。出土遺物はない。

1029号土坑（SK1029，第28図）

C 1 地区北半西寄りに位置するⅢc層上面検出の円形土坑。長さ0.44m，幅0.34m，深さ0.28mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルト，にぶい黄色砂質シルト混じりの黒褐色粘土質シルトで，柱痕がみられる。出土遺物はない。

1121号土坑（SK1121，第28図，図版12）

C 1 地区南半東よりに位置する不整形土坑。Ⅲc層上面で検出している。長さ3.50m，幅2.25m，深さ0.68mを測り，埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。倒木痕とみられるSX1368に重複しており，SX1368が埋没した後に掘り込まれている。埋土上面には5～20cm大の川原石が集積されており，埋土中にも40cm大までの礫が多量に含まれる。出土遺物はなく，性格・時期ともに不明。

1202号土坑（SK1202，第28図）

C 1 地区中央東よりに位置する楕円形土坑。Ⅲc層上面で検出している。長径0.55m，短径0.37m，深さ0.24mを測る。埋土は黒色粘土質シルト，黒褐色粘土質シルトで中央が円形に一段深くなり，柱痕とみられる。出土遺物はない。

D 水田遺構

1405号水田遺構（SX1405，第24・29・30図，図版15・16・18）

C 2 地区中央部に位置する。幅30～40mの帯状の落ち込みで，X10ライン以北に広がる。埋土はオリーブ黒色砂質シルト，黒褐色粘土質シルト等で，帯状または管状の酸化鉄や酸化マンガン斑がみられ，泥の状態で攪拌されたことを窺わせるような様相を呈する。SD1421の北側肩付近では鋤溝状の耕起痕が確認される箇所があり，これらのことから，水田であった可能性が高いと判断した。また，調査区南側から南北方向にのびるSD1401～1404等の溝が途切れる辺りから北側はSD1421にかけて低くなっており，牛とみられる偶蹄類の蹄印の残る窪みが確認された。SD1401～1404等の溝群は水田に水を引くためのものと考えられ，SD1422北側のSD1410・1411はSD1421北側の起耕痕と類似する溝であることから，SX1405の南側はSD1422の流路に沿ったものとなる可能性がある。出土遺物は，埋土下位から中世土師器(35～38)，珠洲(47～52)，上位から越中瀬戸(63・68・77・91)，伊万里が出土している。35・36は口縁部に一段ナデを施す小皿で，13世紀～14世紀代のものであろう。37・38は口縁部に一段ナデを施し，体部はやや内湾気味に開く。38は口縁部が強く外反し，端部は丸く収める。15世紀後半頃のものか。50は口縁部と口縁端部に櫛描波状文の施された壺で，Ⅲ期のもの。63は灰釉の皿で，内面に16弁菊とみられる印花文が施される。高台裏には墨書が残る。77は口縁部が屈曲して直立するいわゆる「向付」で，登窯期のもの。埋土下位出土のものは，14世紀後半～15世紀後半を主体とし，13世紀代のものが上限となる。埋土上位出土のものは，17世紀後半～18世紀代にかけてのもので，水田の下限の時期を示すと考える。これら出土遺物の時期や，埋土がⅡ層と同様の層相を呈していること等から水田の時期は中世後半以降近世にかけてのものと考えられる。

E 倒木痕

A 1 地区 3 箇所，A 2 地区 3 箇所，A 3 地区 16 箇所，B 地区 8 箇所，C 1 地区 11 箇所の計 41 箇所倒木痕とみられる大型土坑を確認している。出土遺物は中世～近世のもの，縄文土器が少量あるが，混入品とし包含層出土遺物として扱っている。

F 包含層出土遺物

土器（第29～31図，図版15～19）

中世土師器（28～33），瀬戸美濃（39～41・78～80），中国製青磁（42～45），珠洲（56～62），越前（46），越中瀬戸（64～67・69～76・81～90・92～96），伊万里（99～104），九谷（105），唐津（106～114），須恵器（115）があるが，量的には少ない。

遺物の主体となる時期は14世紀後半～15世紀後半にかけてのもので，13世紀～14世紀にかけてのもの，16世紀後半頃のものも若干含まれる。中世土師器は概ね器壁が薄く，口縁部に一段ナデを施すもので，14世紀後半～15世紀中頃までに収まるものであろう。33は中ではやや器壁が厚く，内面にハケ状工具によるナデが施されており，14世紀前半代のものか。瀬戸美濃は平椀（39），花瓶（40），香炉（41），天目茶椀（78～80）がある。40は尊式花瓶の口縁部で，内外面に灰釉が掛かる。41は灰釉袴腰形香炉。14世紀後半～15世紀中頃のもの。78は天目茶椀で，16世紀後半頃のものか。中国製青磁は皿（42），椀（43・44），盤または大杯（44）で，概ね15世紀代に収まる。42は口縁端部に浅い削りを波状に付けた，いわゆる稜花皿で，内面に櫛状具・ヘラ状具による文様が施される。龍泉窯系。43・44は口縁部が外反する椀で，口縁端部は丸みをもつ。44は断面に漆継ぎの跡が残る。越前（46）は，焼成が甘く，にぶい黄橙色を呈す。10目1単位の卸目を口縁部下の沈線から施文する。16世紀後半代に比定される。珠洲は播鉢（56～59），壺（60），甕（61・62）である。56は内湾気味の器形で，卸目はみられない。I期か。57は口縁端部に波状文を施すもので，VI期。59は播鉢底部で，底部外面に板目がみられる。61は綾杉状の叩きの甕。62は短頸で，方頭気味の口縁部の甕。IV～V期か。

17世紀～18世紀代のものは，比較的まとまって出土している。越中瀬戸は，皿（64～67・69～76），壺（81～90・92），陶錘（93～96）がある。64～66は灰釉内ハゲの皿で，内面に印花文を施す。66は高台裏に墨痕が残る。75は口縁端部をつまむひだ皿。69・76は見込みに重ね焼きの痕跡がある。84～91は体部に丸みをもち，口縁が若干くびれる鉄釉の小壺。81・82・92は鉄釉の壺底部で，81・82は底部糸切り。93～96は陶錘で，鉄釉が施される。93の表面は摩耗により釉葉が剥がれている。86・87・89は被熱している。越中瀬戸は概ね17世紀後半～18世紀にかけての時期に収まる。伊万里は皿（99～101），椀（102・103），火入れ（104）がある。99は見込みを蛇の目釉剥ぎした量産品で，見込みの五弁花文はコンニャク印判。18世紀後半以降のものか。103はコンニャク印判による松が施された椀。102は斜格子文の椀で，19世紀前葉～幕末にかけてのものか。104は青磁の火入れ^{注5}で，高台を釉剥ぎしている。九谷（105）は，赤絵の酒杯。高台裏に「九谷木米」の銘がはいる。19世紀以降のもの。唐津は，鉢（106～109），播鉢（110），椀（111・112），皿（113・114）。106～108は白土を刷毛で塗り縞状の文様を施す，いわゆる刷毛目唐津。106・107は口縁部が外に屈曲し，端部が内傾して短く立ち上がる。108は見込みに砂目跡が残る。110は内底面の卸目は摩滅している。111は刷毛目の椀。112～114は灰釉の椀・皿。113は見込みに円形の胎土目が3箇所残る。体部の立ち上がりが浅いため，皿とした。114は削りだし高台がつく。概ね17世紀後半～18世紀代のものであろう。

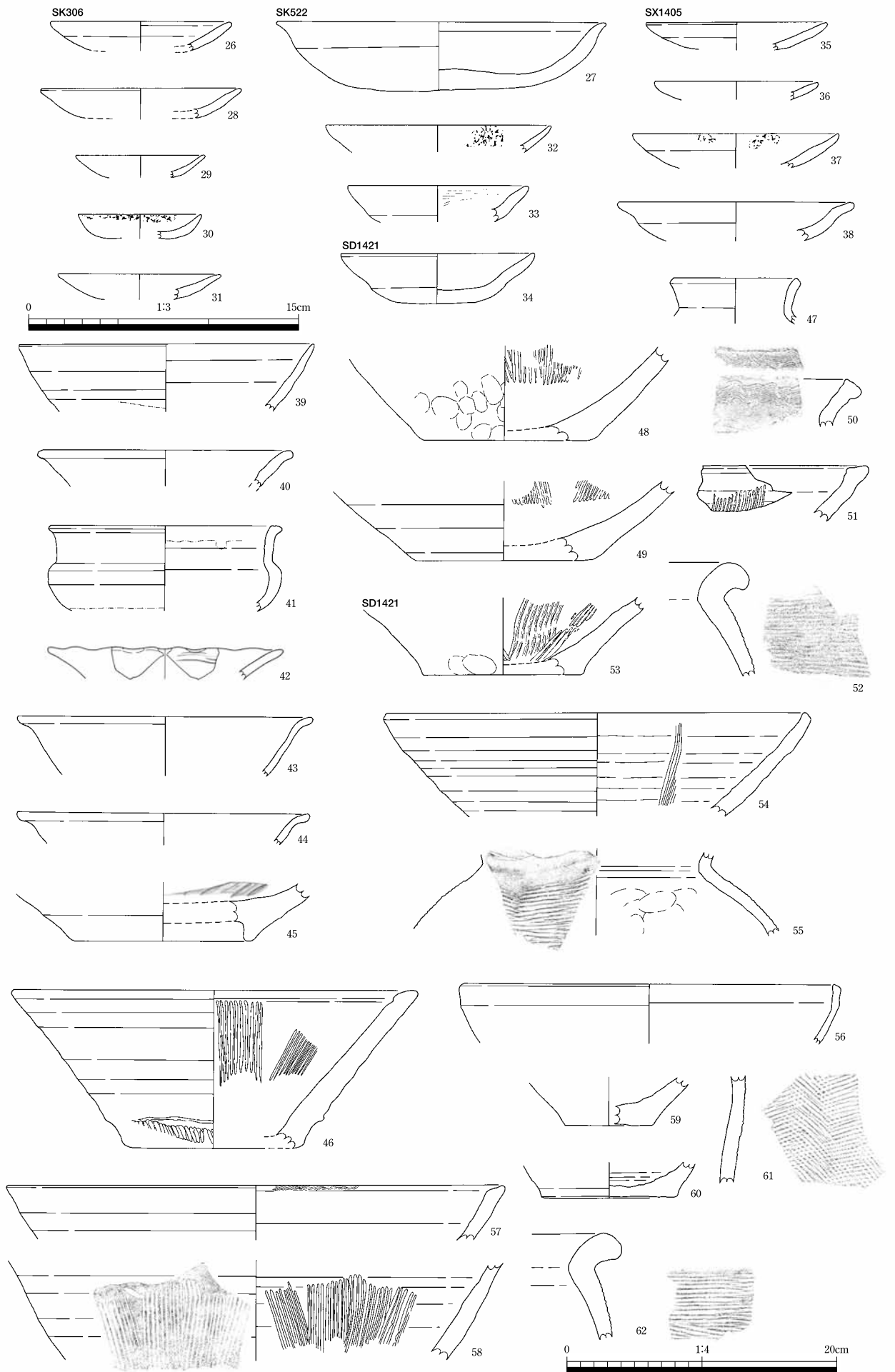
1点だけであるが，須恵器杯蓋（115）が出土している。

石製品（第30図，図版36）

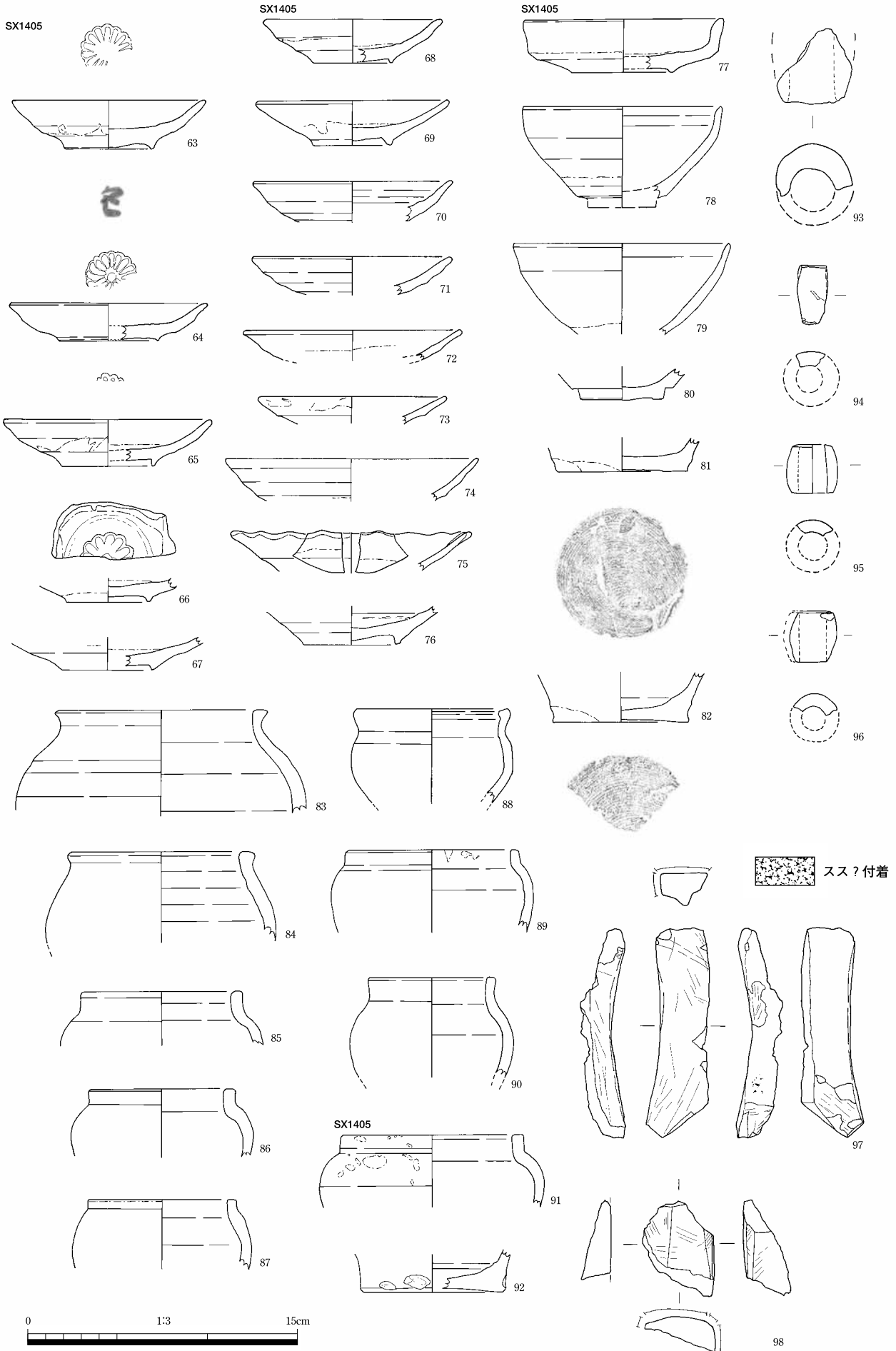
砥石（97・98）がある。いずれも流紋岩製。97は4面とも砥面として使用されており，割口にススの付着がみられる。この他に図示はしていないが，京都鳴滝産の砥石片がある。

金属製品（第31図，図版20）

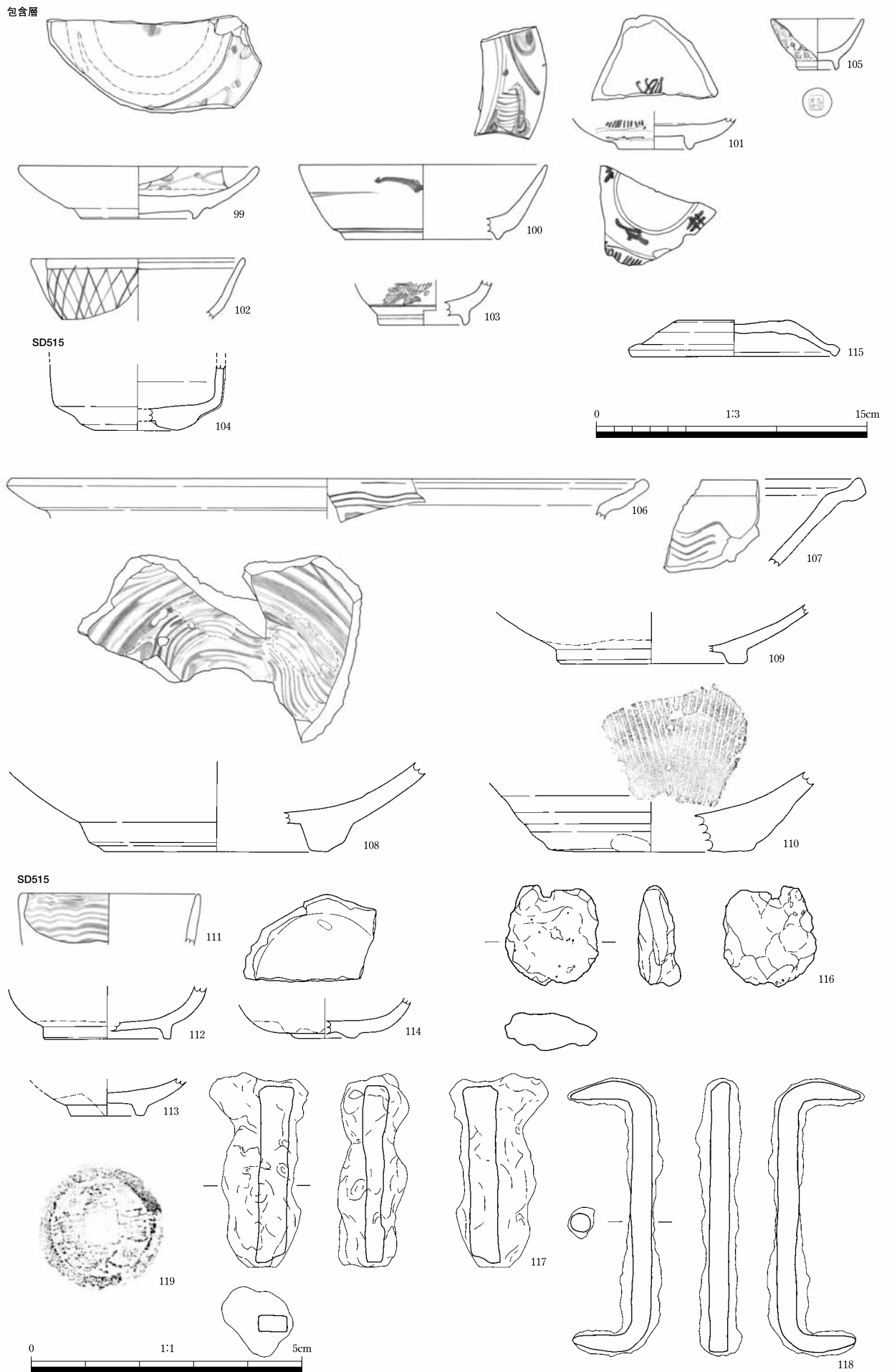
板状の塊（116），釘（117），鏝（118），銭（119）がある。116は板状の破片で，全体に錆膨れが著しい。117



第29図 若栗中村遺跡 中世～近世遺物実測図 (26～45 1/3, 46～62 1/4)
 SK306(26) SK522(27) SX1405(35～38・47～52) SD1421(34・53～55) 包含層



第30図 若栗中村遺跡 中世～近世遺物実測図 (1/3)
SX1405 (63・68・77・91) 包含層



第31図 若栗中村遺跡 中世～近世遺物実測図 (119 1/1, 99～118 1/3)
SD515(104・111) 包含層

は角釘。頭部は残存している可能性もあるが、錆膨れのため不明瞭。118は鏝で、細長い棒状の両端を屈曲させている。両端は先端に向かい細くなる。119は寛永通寶。

5 まとめ

若栗中村遺跡は東西に長く、黒部川左岸の扇状地扇中央部に位置している。検出した縄文時代の遺構は、溝1条、自然流路3条、土坑7基、中世～近世の遺構は、掘立柱建物2棟、溝16条、自然流路2条、土坑1068基、倒木痕41箇所である。ほ場整備等による削平を受け、遺物包含層のほとんどが残存しておらず、出土遺物は少ないが、縄文時代後期～晩期、中世後半～近世の2時期のものがある。

縄文時代はC1・C2地区で、大きく蛇行する自然流路と少数の土坑を検出した。出土遺物も少なく、土器は全体を復元できるものは少ない。C地区の西南側約1.2kmの丘陵裾に位置する舌山遺跡では竪穴建物3棟が確認されており、縄文時代中期～後期の集落が営まれていたのに対し、若栗中村遺跡は遺構も遺物も少なく、集落から外れた位置にあったことが推測できる。C3地区の調査においても同様で、黒部川とその支流での漁労や、川原での採集等の活動の「場」であったと示唆されている^{注6}。黒部川左岸扇状地と段丘の境目周辺には舌山遺跡、前沢遺跡、浦山寺蔵遺跡等の住居跡を伴う集落遺跡が立地しており、若栗中村遺跡はこうした集落から人々が断続的に訪れるような地域と捉えられる。

中世から近世にかけては、遺跡周辺に若栗城跡、長安寺館跡等の城館遺跡があり、A地区は長安寺館跡が境内に比定され、三方に土塁の残る長安寺の南西30mに位置することから、長安寺館跡に関連する遺構・遺物の確認が期待されていた。調査結果は、掘立柱建物2棟、区画溝、土坑を検出したが、長安寺館跡との関連は明確なものではない。遺構も希薄であることから、集落縁辺と考えられるが遺跡の性格は判然としない。但し、区画溝と考える溝群はL字状またはコ字状に屈曲し、調査区東側を区画するものであること、A2地区検出の掘立柱建物は調査区東側に偏在し、東側に居住域が広がる可能性があること等から、集落の中心は調査区東側（長安寺側）に広がるとみられる。

出土遺物は少ないが、Ⅰ期：13世紀～14世紀、Ⅱ期：14世紀後半～15世紀前半、Ⅲ期：16世紀後半、Ⅳ期：17世紀後半～18世紀代、Ⅴ期：19世紀以降の時期のものがある。なかでも主体となるのはⅡ期とⅣ期の2時期を中心とするものである。これは、C3地区および若栗城跡周辺採取遺物の年代とも一致する。遺跡周辺の城館の成立時期は16世紀以前と考えられており、遺物の時期はⅡ期は城館成立期、Ⅲ期は城館の廃絶時期、Ⅳ期は若栗周辺が北陸街道筋となり^{注7}、街道沿いに西町・東町が成立する時期と重なるとみられる。遺物の出土地点からは、A3地区とC2地区とに中心があり、各々で各時期の遺物が出土しており、若栗中村遺跡周辺の若栗城跡や長安寺館跡等の城館との位置関係からは、A地区は長安寺館跡、C地区は若栗城跡との関連が推測できよう。

注

注1 財団法人富山県文化振興財 2003『北陸新幹線関係埋蔵文化財包蔵地調査報告(3) 井ノ口城跡 若栗中村遺跡 舌山遺跡』

注2 黒部市教育委員会 2006『若栗中村遺跡発掘調査報告書 ふるさと農道 農免農道新川中部地区の施行に伴う埋蔵文化財発掘調査』

注3 第VI章 自然科学分析「骨片同定」に詳しい。

注4 第VI章 自然科学分析「放射性炭素年代測定」に詳しい。

注5 香炉との区別は厳密には難しく、ここでは、三足の付かないものを火入れとした。

注6 注2に同じ

注7 寛文2(1662)年に黒部川に愛本橋が架けられ、三日市から浦山、愛本橋を経由し入善町の舟見、泊へ向かうルートが整備されて、北陸道上街道とされた。若栗周辺はこの上街道筋にあたる。

第5表 若栗中村遺跡 縄文時代溝一覧

遺構番号	地区	規模(m)		出土遺物	時期	備考	挿図番号	写真図版
		幅	深さ					
SD1089	C1	(7.80)	0.70	縄文土器, 石製品	縄文	SD1089<SK1151・1216	9	12
SD1299	C1	15.00	0.44	縄文土器, 石製品	縄文		8	12
SD1369	C1	3.50	0.31	縄文土器	縄文	SD1369<SK1105・1361・1264・1132・1131・1129・1209・1261・1224・1385・1240・1238・1241・1244・1232	8	12
SD1398	C1	(9.00)	0.64	縄文土器, 土製円盤	縄文	SD1398<SK1276・1283・1258・1297・1380・1298・1377・1376・1378・1379・1290・1392・1391・1390・1389	9	12
SD1421	C2	11.60	0.88	縄文土器, 土師器, 中世土師器, 珠洲	縄文～	SD1299とつながる, SD1422分岐	24	13
SD1422	C2	9.00	0.90	縄文土器, 石製品	縄文～	SD1398とつながる, SD1421分岐	24	

※規模の()付数値は切り合いなどによる現存長を示す。

第6表 若栗中村遺跡 縄文時代土坑一覧

遺構番号	地区	平面形	規模(m)			出土遺物	時期	備考	挿図番号	写真図版
			長さ	幅	深さ					
SK872	C1	円	0.35	0.31	0.15	縄文土器	縄文		11	
SK876	C1	円	0.63	0.42	0.23	縄文土器	縄文		11	
SK878	C1	楕円	(0.90)	0.78	0.25	縄文土器	縄文	SK878<SK877	11	
SK907	C1	楕円	1.34	0.96	0.25	縄文土器	縄文		11	
SK972	C1	不整形	1.76	1.24	0.18	縄文土器	縄文		11	12
SK1033	C1	円	0.67	0.55	0.25	縄文土器	縄文		11	
SK1190	C1	楕円	2.09	0.88	0.37	縄文土器	縄文		11	
SK1205	C1	円	0.63	0.46	0.23	縄文土器	縄文		11	

※規模の()付数値は切り合いなどによる現存長を示す。

第7表 若栗中村遺跡 倒木痕一覧

遺構番号	地区	平面形	規模(m)			出土遺物	備考	挿図番号	写真図版
			長さ	幅	深さ				
SX68	A1	不整形	(3.15)	3.10	0.62				
SX93	A1	不整形	(2.50)	1.00			SX93<SK91, SX93<SK92, 未掘		
SX177	A1	円	2.90	(0.82)			SX177<SK95, 未掘		
SX215	A2	不整形	4.46	3.07	0.54				
SX225	A2	不整形	4.16	3.40	0.62				
SX227	A2	円	2.88	(1.98)	0.61				
SX428	A3	円形	2.94	2.35	0.62		SX428<SD156		
SX459	A3	円	3.07	2.01	0.64		SX459>SD453		
SX460	A3	不整形	4.50	3.08	0.74		SX460>SX461		
SX461	A3	不整形	(1.68)	1.45	0.21		SX461<SX460		
SX466	A3	不整形	3.57	(3.00)	0.61		SX466>SK462・471		
SX467	A3	円	2.61	2.40	0.67		SX467<SD453, SX467>SK435・469		
SX468	A3	不整形	3.49	2.96	0.72				
SX475	A3	円	2.66	2.47	0.55				
SX476	A3	円	2.68	2.56	0.51				
SX484	A3	不整形	3.90	(2.56)	0.80				
SX489	A3	楕円	4.43	2.86	0.44		SX489<SK491		
SX490	A3	円	3.30	2.28	0.44				
SX498	A3	不整形	2.60	(2.25)	0.46				
SX499	A3	不整形	3.32	(1.26)	0.50				
SX518	A3	楕円	(2.80)	1.58	0.47		SX518>SX520		
SX520	A3	円	(3.00)	2.73	0.87		SX520<SX518		
SX655	B	楕円	3.18	2.93	0.45		SX655>SK656		
SX664	B	楕円	3.50	3.12	0.55		SX664>SK636		
SX703	B	不整形	2.95	2.28	0.60		SX703<SD709		
SX704	B	不整形	3.52	3.26	0.72		SX704<SK662		
SX711	B	不整	3.30	3.30	1.12		SX711>SD663・713		
SX714	B	不整(推定)	(1.51)	2.31	0.51				
SX717	B	楕円	3.35	3.30	0.67		SX717>SX718		
SX718	B	不整形	2.50	(2.12)	0.34		SX718<SX717		
SX873	C1	不整形	2.65	2.27	0.53				
SX925	C1	不整形	4.07	4.00	1.00				
SX1096	C1	不整形	3.00	2.44	0.63				
SX1105	C1	不整形	3.89	3.89	0.71	縄文土器	SX1105<SK1187, SX1105>SD1369		
SX1122	C1	不整形	4.93	3.90	0.65		SX1122<SK1213・1214		
SX1183	C1	不整形	5.34	(4.00)	0.45		SX1183<SK1184		
SX1206	C1	不整形	4.36	2.63	0.60		SX1206<SK1123		
SX1210	C1	不整形	3.32	2.70	0.63				
SX1363	C1	不整形	1.14	0.98	0.57	縄文土器	SX1363>SD1299		
SX1368	C1	不整形	5.10	4.00	0.75		SX1368<SK1121	28	12
SX1396	C1	不整形	2.05	1.50					

※規模の()付数値は切り合いなどによる現存長を示す。

第8表 若栗中村遺跡 中世～近世掘立柱建物一覧

建物	種別	桁行(m)		梁行(m)		面積(m ²)	棟方位	柱穴規模・径	柱穴規模・深さ(m)	柱間距離・桁(m)		柱間距離・梁(m)		備考	挿図	写真図版
		3間	7.00	2間	4.08					28.56	N-44° -E	0.50~1.04	0.20~0.62			
SB1	東西棟・側柱 (1面廂?)	3間	7.00	2間	4.08	28.56	N-44° -E	0.50~1.04	0.20~0.62	1.6~5.1 (桁0.35~0.5)	1.04~1.5 (桁0.9~1.6)	SB1>SB2	21	6, 7		
SB2	東西棟・側柱	3間~	6.65~	2間~	4.20~	27.93~	N-56° -E	0.40~1.35	0.15~0.55	1.0~1.7	1.5~1.9	SB2<SB1	21	6, 7		

第9表 若栗中村遺跡 中世～近世柱穴一覧

建物	遺構番号	地区	平面形	規模(m)			出土遺物	備考	挿図番号	写真図版
				長さ	幅	深さ				
SB1	SP201	A2	円	0.90	0.82	0.41		SB1	21	
	SP202	A2	円	0.83	0.65	0.34		SB1	21	
	SP206	A2	円	0.74	0.70	0.28		SB1		
	SP209	A2	円	0.60	0.59	0.49		SB1	21	7
	SP213	A2	円	0.55	0.52	0.37		SB1	21	
	SP214	A2	楕円	(1.02)	0.74	0.36		SB1		
	SP221	A2	円	0.80	0.64	0.42		SB1		
	SP228	A2	円	0.80	0.69	0.48		SP228>SP232(SB1>SB2)	21	
SB2	SP239	A2	楕円	0.67	0.49	0.27		SB1		
	SP219	A2	円	0.36	0.30	0.17		SB2	21	
	SP223	A2	円	1.38	0.92	0.55		SB2	21	
	SP232	A2	円	0.56	(0.48)	0.25		SP232<SP228(SB1>SB2)	21	
	SP248	A2	円	0.74	0.48	0.24		SB2?		
	SP250	A2	円	0.38	0.27	0.16		SB2	21	
	SP251	A2	円	0.42	0.38	0.22		SB2		
	SP252	A2	円	0.43	0.43	0.29		SB2		

※規模の()付数値は切り合いなどによる現存長を示す。

第10表 若栗中村遺跡 中世～近世土坑一覧

遺構番号	地区	平面形	規模(m)			出土遺物	時期	備考	挿図番号	写真図版
			長さ	幅	深さ					
SK4	A1	円?	0.54	(0.35)	0.20	中世土師器, 瓦質土器	中世	SK4>SK5	25	
SK5	A1	不明	(0.72)	(0.29)	0.12	中世土師器	中世	SK5<SK4, SK5<SK6	25	
SK6	A1	円?						SK6>SK5	25	
SK8	A1	円	0.25	0.25	0.32	土師器	近世?		25	
SK9	A1	円	0.26	0.21	0.31	縄文土器(混入)	不明			
SK10	A1	方	2.78	2.57	0.45		近代?	貼床状, 2段積の石列, 川原石乱積	25	5
SK18	A1	不整形	0.95	(0.94)	0.16	骨, 炭化物	不明	骨片及び炭化物を多量に出土, 骨同定	25	5
SK19	A1	不明						SK19<SK14		
SK27	A1	不整形						人頭大の河原石多		
SK38	A1	不整形	0.76	(0.75)	0.21	骨, 炭化物		骨片及び炭化物を多量に出土, 骨同定	25	5
SK45	A1	円	0.45	0.41	0.43			柱痕?		
SK46	A1	不整形	1.30	1.22	0.34	骨		AMS年代測定, 骨同定	25	
SK49	A1	円						拳大から人頭大の河原石多数混在		
SK50	A1	方形?	(2.00)	1.46	0.27	瓦質土器	中世		25	
SK52	A1	円	0.34	0.32	0.36			柱痕?	25	5
SK53	A1	円	0.34	0.29	0.29			柱痕?		
SK60	A1	円	0.35	0.30	0.28			柱痕?		
SK61	A1	円	0.33	0.31	0.30			柱痕?		
SK63	A1	円	0.33	0.28	0.28			柱痕?		
SK83	A1	円	0.31	0.29	0.27			柱痕?		
SK222	A2	円	0.90	0.76	0.16	骨		SB1の内部, 骨同定	26	7
SK302	A3	不整形	7.50	3.37	0.43	珠洲	中世?	SK302>SD303・307・345, SK302<SK305	26	9
SK306	A3	円	0.96	0.78	0.32	中世土師器	中世		26	
SK337	A3	不整形	(3.60)	2.40	0.13	珠洲	中世	SK337>SK335, SK337<SK336・SK338	27	
SK522	A3	不整形	3.46	(1.88)	0.66	中世土師器	中世	SK522>SK521	27	9
SK523	A3	円	0.35	0.31	0.20	珠洲, 越前, 青磁, 越中瀬戸, 唐津, 近世陶器	近世?		26	
SK665	B	不整	(13.50)	4.70	0.28	唐津, 越中瀬戸, 伊万里, 瀬戸磁器	不明	SK665<SK670・671, SK665>SK672・SK673, 南側掘り込み部分の壁に石列が並ぶ。	28	10
SK843	C1	円	0.68	0.56	0.34			SK843>SK844・845, 柱痕?	26	
SK850	C1	円	0.28	0.26	0.42			柱痕?	26	
SK946	C1	円	0.66	0.62	0.47			柱痕?	27	
SK947	C1	円	0.41	0.38	0.30			柱痕?	27	
SK1002	C1	楕円	0.42	0.32	0.35			柱痕?	28	
SK1029	C1	円	0.44	0.34	0.28			柱痕?	28	
SK1121	C1	楕円	3.50	2.25	0.68			礫溜まり	28	12
SK1202	C1	円	0.55	0.37	0.24			柱痕?	28	
SK1260	C1	円	0.56	0.38	0.20	石製品				
SK1397	C1	不整形	(2.10)	0.95	0.36			SK1397>SX1183		

※規模の()付数値は切り合いなどによる現存長を示す。

第11表 若栗中村遺跡 中世～近世溝一覧

遺構番号	地区	規模(m)		出土遺物	時期	備考	挿図番号	写真図版
		幅	深さ					
SD11	A1	0.67	0.08	珠洲	中世	区画溝とは考えにくく、溝の性格は不明。	23	
SD28	A1				近代	SD29と併走		
SD29	A1				近代	SD28と併行		
SD81	A1				近世?			
SD212	A2	0.44	0.06			SD212<SK217	23	7
SD301	A3	3.28	1.24	珠洲		SD301>SD345, SD301<SX332	23	9
SD303	A3	1.82	0.43	土師器		SD303>SD307・SK328, SD303<SD301, SK302	23	
SD307	A3	3.52	0.20			SD307<SD303・SK302	23	
SD309	A3	0.71	0.17			SD309<SD314・SK315・SK308	23	
SD311	A3	0.62	0.12			SD311>SK333, SD311<SK334・339, SD321, SD352と同一?	23	
SD314	A3					SD314>SK313, SD314<SK340		
SD317	A3					SD317>SD319		
SD319	A3	0.42	0.10			SD319<SD317	23	
SD321	A3	0.65	0.18			SD321<SK318・SD330・348, SD311, SD352と同一?	23	
SD322	A3					SD322<SD348		
SD323	A3					SD323>SD311	23	
SD330	A3	1.42	0.39			SD330>SD321・352, SD330<SK329・335	23	
SD343	A3						23	
SD344	A3					SD344<SK336		
SD345	A3					SD345<SD301・SK302		
SD348	A3					SD348>SD322		
SD351	A3					SD351>SK353		
SD352	A3	0.53	0.29			SD352<SK350, SD311, SD321と同一?	23	
SD354	A3							
SD453	A3	6.14	0.61			SD453<SK416・SK418	23	
SD456	A3					SD456>SK428		9
SD506	A3					SD506>SK507		
SD525	A3	1.02	0.30	越中瀬戸				
SD651	B				近現代			
SD658	B				近現代	SD658>SK660		
SD663	B	0.96	0.16			SD663<SK643		
SD709	B	0.42	0.17			SD709<SK703	23	10
SD713	B	1.51	0.49			SD713<SK711	23	
SD715	B	1.54	0.15			SD715<SK698・705・719	23	
SD716	B	1.00	0.21			SD716>SK719, SD716<SK698	23	10
SD1215	C1							
SD1401	C2	0.60	0.28		中～近世			
SD1402	C2	0.34	0.12		中～近世	SD1402>SD1403		
SD1403	C2	0.24	0.12		中～近世	SD1403<SD1402		
SD1404	C2	0.36	0.20		中～近世			
SX1405	C2	30～40	0.28	中世土師器, 珠洲, 越中瀬戸, 伊万里	中～近世	水田遺構, SX1405>SD1421・1422	24	
SD1406	C2	(5.00)	1.10	土師器	中～近世		24	
SD1408	C2	0.28	0.04					
SD1409	C2	0.84	0.06		中～近世			
SD1410	C2	0.32	0.02		中～近世	鋤溝か		
SD1411	C2	0.20	0.06		中～近世	鋤溝か		
SD1420	C2	2.05	0.44					

※規模の()付数値は切り合いなどによる現存長を示す。

第12表 若栗中村遺跡 縄文土器・土製品・土器・陶磁器一覽(1)

種別	写真 図版	遺構	出土地点	種類	器種	法量(cm)		時期	詳細時期	胎土色		釉色		備考
						口径	器高			底径	高台径	記号	胎土色	
12	1	14	SD1089	II層	縄文土器	鉢		中期後葉	中田新II	10YR7/2	灰黄褐		外面にR1斜縄文、口唇部にR1斜縄文	
	2	14	X20145	III層	縄文土器	鉢	5.4	中期後葉	中田新II	2.5YR5/6	明赤褐		沈線文	
	3	14	X28125	下層	縄文土器	鉢		中期後葉		5Y7/2	灰白		無文	
	4	14	X20149, X19V48	III層	縄文土器	鉢	8.0	中期後葉		10YR6/4	にぶい黄橙		無文、底部細代痕(2種の編み目)	
	5	14	X3321	IIIc層	縄文土器	鉢	34.8	後期中葉	井口?	2.5Y6/2	灰黄		斜縄文	
	6	14	X15V45, X16V44	III層	縄文土器	浅鉢	13.6	後期中葉	井口I(加曾利B並行)	10YR7/4	にぶい黄橙		無文、C字状凹付け、底部細代庄痕	
	7	14	X15V43	III層	縄文土器	浅鉢		後期中葉	井口I	10YR7/2	灰黄褐		斜縄文、磨り消し?	
	8	14	SD1398	X30V65	縄文土器	鉢	20.0	後期後葉	井口II	10YR6/3	にぶい黄橙		斜縄文、内面沈線	
	9	14	SD1398	X30V65	縄文土器	鉢		後期後葉	井口II	7.5YR7/6	橙		斜縄文	
	10	14	X20V45	III層	縄文土器	鉢		後期後葉		10YR7/1	にぶい黄橙		外面細文施文後、磨り消し、三又文その他を施文、外面スス付着	
	11	14	X20V45	III層	縄文土器	鉢		後期後葉		7.5YR5/4	にぶい黄橙		斜縄文、斜縄文	
	12	14	SD1398	X10V39	縄文土器	鉢		後期中葉	井口?	10YR7/1	にぶい黄橙		斜縄文、斜縄文	
13	13	14	X23V52	III層	縄文土器	鉢		後期中葉		7.5YR4/6	橙		縄文施文、磨り消し後三又文	
	14	14	X22V48	III層	縄文土器	鉢		後期		7.5YR5/4	にぶい黄		磨り消し、粗土相層み上げは口縁部外傾、それ以下は内傾	
	15	14	X22V48	III層	縄文土器	鉢	38.2	後期		5YR7/6	橙		羽状縄文	
	16	14	X19V48	III層	縄文土器	鉢	29.8	後期末	八日市新張みか	10YR7/4	にぶい黄橙		口縁端部面取り、補修孔あり、外口縁スス付着、ミセツの細	
	17	14	X3~5Y29~31, X1~5V31, IIIc層		縄文土器	鉢	40.4	後期初	御経塚	10YR6/4	にぶい黄橙		波状口縁、弧末沈線、三又文、沈線区画の縄文帯、縄文帯上に刷灰、	
	18	14	Y30	IIIc層	縄文土器	鉢		後期初	御経塚	10YR6/4	にぶい黄橙		無文帯、沈線による楕円形文、楕円形区画内縄文磨り消し	
	19	14	SD1398		縄文土器	鉢		後期初	御経塚	10YR8/4	浅黄褐		厚縁のため調整不明	
	20	14	SD1089	X33V63	II層	縄文土器	鉢	12.0		10YR7/4	にぶい黄橙		底部スラレ状庄痕	
	21	14	SD1089	X26V42	III層	縄文土器	鉢	9.2		10YR7/4	にぶい黄橙			
	22	14	X26V42	III層	縄文土器	台付鉢				7.5YR6/6	橙			
	23	16	SK306	X7V39	土製品	円盤状土製品	3.5	2.8	0.6	8.64	2.5YR5/6	明赤褐		
	24	16	SK306		中世土師器	皿	10.0			2.5Y7/2	灰黄			
25	16	SK522	X22V223	I層	中世土師器	皿	18.1	3.9	9.7	10YR8/3	浅黄橙			
26	16	X6V43	II層	中世土師器	皿	11	1.7	6.0	2.5Y7/2	灰黄				
27	16	X13V39	III層	中世土師器	皿	7.2			2.5Y8/2	灰白				
28	16	X13V39	III層	中世土師器	皿	6.8			7.5YR7/4	浅黄橙				
29	16	X25V18	II層	中世土師器	皿	9.0			10YR8/3	浅黄橙				
30	16	T11		中世土師器	皿	12.4			10YR8/2	灰白				
31	16	X8V29	I b層	中世土師器	皿	10.0			7.5YR7/8	灰白				
32	16	SD1421	X25V14	I層	中世土師器	皿	10.7	2.8	4.3	10YR7/3	にぶい黄橙			
33	16	SK1405	X26V23		中世土師器	皿	10.0			10YR7/4	にぶい黄橙			
34	16	SK1405	X19V19		中世土師器	皿	9.0			10YR7/3	にぶい黄橙			
35	16	SK1405	X26V23		中世土師器	皿	11.4			10YR7/3	浅黄橙			
36	16	SK1405	X26V23		中世土師器	皿	13.0			10YR7/4	浅黄橙			
37	16	SK1405	X26V23		中世土師器	皿	16.3			10YR7/4	浅黄橙			
38	16	SK1405	X28V25		中世土師器	皿	14.0			7.5YR6/4	浅黄	7.5Y7/2	灰白	
39	17	X14V37	III層	瀬戸瓦器	平板	12.9			2.5Y7/2	灰黄		漆緑		
40	17	X14V37	III層	瀬戸瓦器	香炉	13.0			2.5Y8/1	灰黄		ハカマ彫形		
41	17	X24V235	カクツ	中国青磁	瓶	16.3			5GY6/1	オリーブ灰		稜花皿、内面 櫛状具による文様 瀬戸窯系		
42	17	X24V235	カクツ	中国青磁	瓶	16.3			5Y6/2	灰オリーブ				
43	17	南側排水溝排土		中国青磁	瓶	16.2			2.5Y7/1	灰白		断面漆継ぎ		
44	17	X25V25	I b層	中国青磁	瓶	16.2			2.5Y6/3	にぶい黄				
45	17	X34V25	II層	中国青磁	瓶or大杯				10YR5/1	灰灰				
46	15	X240V233	I層	越前	摺鉢	30.0	11.7	12.0	10YR6/3	にぶい黄橙				
47	16	SK1405	X30V17	下層	珠洲	壺	9.6		2.5Y	黄灰				
48	16	SK1405	X32V18	最下層	珠洲	摺鉢	12.3		N6/1	灰				
49	16	SK1405	X25V18	最下層	珠洲	摺鉢	13.0		2.5Y7/2	灰黄				
50	16	SK1405	X37V33	下層	珠洲	壺			N5/1	灰				
51	16	SK1405	X31V23	下層	珠洲	壺			N5/1	灰				
52	16	SK1405	X31V23	下層	珠洲	壺			N5/1	灰				
53	16	SD1421	X22V10	I層	珠洲	摺鉢	11.9		5Y6/1	灰				
54	16	SD1421	X28V27	II層	珠洲	摺鉢	31.6		5Y6/1	灰				
55	16	SD1421	X33V23	I層	珠洲	壺			N6/1	灰				
56	16		表影	珠洲	摺鉢	28.2			N6/1	灰				
57	16	T1	No.1	珠洲	摺鉢	37.0			5Y6/1	灰		口縁波状文		
58	16	X8V25	II層	珠洲	摺鉢				5Y6/1	灰		底部板目		
59	16	X30V42	排水溝排土	珠洲	摺鉢	6.6			N6/1	灰				
60	16	X40V30	I b層	珠洲	壺	10.0			N6/1	灰				
61	16	X18V54	III層	珠洲	壺体部				N6/1	灰		外面稜形状凹み		

第12表 若栗中村遺跡 縄文土器・土製品・土器・陶磁器一覽(2)

標図	遺物	写真 図版	遺構	出土地点	種類	器種	法量(cm)			時期	詳細時期	胎土色		記号	釉色	備考	
							口径	器高	底径			高台径	記号				胎土色
29	62	16		X31Y42 IV輪直上	珠洲	壺				14C後~15C後	IV~V期	N6/1	灰				
	63	15,18	SX1005	X33Y23	越中瀬戸	丸皿	10.7	2.1	5.0	17~18C		10YR7/3	灰白	2.5Y8/2	灰白	内面印花文(16弁菊),高台裏黒書	
	64	18	X243Y250	I層	越中瀬戸	小皿	11.0	2.1	5.4	17~18C		5YR4/2	灰褐	2.5Y7/3	浅黄	内面印花文(16弁菊?)	
	65	18	X20Y26	下層	越中瀬戸	丸皿	11.5	2.55	5.2	17~18C		5YR5/3	にぶい赤褐	2.5Y8/2	灰白	内面印花文	
	66	18		排土	越中瀬戸	皿	4.7		4.7	17~18C		5YR6/6	褐	2.5Y8/2	灰白	内面印花文(10弁菊?),重ね焼き痕,高台裏黒痕	
	67	18	X26Y23	下層	越中瀬戸	皿	5.0		5.0	17~18C		10R4/3	赤褐	5YR4/3	にぶい赤褐		
	68	18	SX1065	X19Y19	越中瀬戸	丸皿	9.9	2.4	4.4	17~18C		10R4/3	赤褐	2.5Y8/2	淡黄	重ね焼き痕	
	69	18		T14 南端部	越中瀬戸	丸皿	10.3	2.5	4.4	17~18C		5YR6/3	橙	7.5YR3/3	暗褐		
	70	18	X35Y60	I層	越中瀬戸	丸皿	11.0		11.0	17~18C		5YR6/3	橙	2.5Y8/2	灰白		
	71	18	X150Y160	I層	越中瀬戸	丸皿	11.0		11.0	17~18C		2.5Y6/3	にぶい黄	10YR3/3	暗褐		
	72	18	X175Y190		越中瀬戸	皿	12.0		12.0	17~18C		2.5Y6/3	にぶい黄	10YR4/4	褐		
	73	18	X40Y30	I層	越中瀬戸	皿	14.0		14.0	17~18C		2.5YR6/4	にぶい橙	2.5Y8/2	灰白		
	74	18	X255Y253	I層	越中瀬戸	皿	13.3		13.3	17~18C		7.5YR7/1	明褐色	2.5YR3/2	暗赤褐	鉄軸 内へず,むだ血	
	75	18	X255Y44		越中瀬戸	皿	7.5		7.5	17~18C		10YR6/3	にぶい黄橙	7.5YR3/4	暗褐	重ね焼き痕	
	76	18	X20Y40	T14	越中瀬戸	丸皿	5.4		5.4	17~18C		2.5Y7/2	灰黄	5Y5/3	灰オリーブ		
	77	18	SX1005	X20Y10 中位	越中瀬戸	向付	11.1	3.0	5.6	17~18C		2.5Y8/2	灰黄	10YR5/6	黄褐		
	78	18	X12Y24 IIIa層		瀬戸瓦葺	天目茶碗	11.0	5.6	3.8	16C後半		5YR4/4	にぶい赤褐	5YR4/4	にぶい赤褐		
	79	18	X249Y241	カクラン	瀬戸瓦葺	天目茶碗	12.0		4.6	15C中		2.5Y8/2	灰白	7.5YR4/3	褐		
	80	18	X8Y20 I a層		瀬戸瓦葺	天目茶碗	4.6		4.6	15C中		2.5Y8/2	灰白	7.5YR4/3	褐		
	81	18	X255Y253	I層	越中瀬戸	壺	7.2		7.2	17~18C		2.5Y8/2	灰白	2.5YR3/4	暗赤褐	底部糸切り	
	82	18	X237Y237	U字溝カクラン	越中瀬戸	壺	11.8		11.8	17~18C		2.5Y8/2	灰白	2.5YR3/4	暗赤褐	底部糸切り	
	83	18	X34Y30	I層	越中瀬戸	壺	9.8		9.8	17~18C		2.5Y8/2	灰白	10YR5/1	視灰		
	84	18	X253Y245	カクラン	越中瀬戸	壺	9.8		9.8	17~18C		2.5Y8/2	灰白	7.5YR4/3	褐		
	85	18	X38Y28	I a層	越中瀬戸	壺	9.0		9.0	17~18C		2.5Y8/2	灰白	2.5YR3/3	暗褐		
	86	18	X165Y173	I層	越中瀬戸	壺	8.1		8.1	17~18C		2.5Y8/2	灰白	5YR3/2	暗赤褐	被熱している	
	87	18	X164Y173	I層	越中瀬戸	壺	8.3		8.3	17~18C		2.5Y8/2	灰白	2.5Y6/8	明黄褐	被熱している	
	88	18	X237Y237	カクラン	越中瀬戸	壺	8.4		8.4	17~18C		2.5Y8/2	灰白	5YR4/6	赤褐	被熱している	
	89	18	X248Y249	I層	越中瀬戸	壺	9.6		9.6	17~18C		10YR7/4	にぶい黄橙	7.5YR3/4	暗褐	被熱している	
	90	18	X165Y173	I層	越中瀬戸	壺	6.0		6.0	17~18C		7.5YR4/3	褐	2.5Y8/2	暗赤褐		
	91	18	SX1005	X30Y22	I層	越中瀬戸	壺	10.1		10.1	17~18C		2.5YR3/3	暗赤褐	2.5Y5/6	黄褐	指頭痕
	92	18	X165Y173	I層	越中瀬戸	壺	8.0		8.0	17~18C		2.5YR3/3	暗赤褐	5YR4/6	赤褐色	孔径2.5cm	
	93	15	X223Y221	IIa直上	越中瀬戸	陶鉢	4.2	4.2	1.3	21.53	17~18C	10YR7/4	にぶい黄橙	5YR4/4	赤褐色	孔径1.3cm(復元)	
	94	15	X155Y159	I層	越中瀬戸	陶鉢	3.2	2.6	0.8	6.23	17~18C	10YR7/4	にぶい赤褐	5YR4/4	にぶい赤褐	孔径1.8cm(復元)	
	95	15	X165Y173	I層	越中瀬戸	陶鉢	2.7	2.8	0.7	4.41	17~18C	10YR7/4	にぶい赤褐	5YR4/4	にぶい赤褐	孔径1.3cm	
	96	15	T15 X25~30		越中瀬戸	皿	2.8	3.0	0.8	7.83	17~18C	10YR7/4	にぶい赤褐	5YR4/4	にぶい赤褐	孔径1.3cm	
	99	19	X240Y233	カクラン	伊万里	皿	13.0	2.9	6.0	18C後~		5G10R3	青灰	5G5/8/1	灰白	波佐見系,見込みコンニャク印・龍目粗ハギ	
	100	19	X30Y43	I層	伊万里	皿	13.6	4.1	4.1	18C後~		2.5G7/1	明オリーブ灰	5B6/1	青灰	波佐見系	
	101	19	X261Y250	I層	伊万里	碗	11.8		4.1	19C~		10X8/1	灰白	7.5YR3/8	紫みの青色		
	102	19		I層	伊万里	碗	11.8		4.1	19C前葉~番末		10X8/1	灰白	5B6/1	青灰	斜格子文	
	103	19	X155Y165	I層	伊万里	碗	4.8		4.8	18C前~		10B6/3	くろんだ青	2.5G9/1	明い灰緑	高台裏に銘 松のコンニャク印判 高台砂付着	
	104	19	X239Y234	カクラン下溝	伊万里	火入れ	9.0		4.4	18C		10YR8/2	灰白	10Y6/2	オリーブ灰	青磁	
	105	19	X163Y170	I層	九谷	酒杯	5.1	2.85	2.0	19C~		5Y6/1	灰	2.5Y4/3	オリーブ灰	「若草」の文字が入る	
	106	19	X153Y159	I層	唐津	鉢	35.2			17C末~18C代		2.5Y8/2	灰白	2.5YR4/2	灰褐		
	107	19	X152Y156		唐津	鉢	35.2			17C後~18C		5G7/1	明オリーブ灰	7.5YR4/2	灰褐	刷毛目	
	108	19	X240Y233	U字溝カクラン	唐津	鉢	12.3		12.3	17C後~18C		2.5YR5/4	にぶい赤褐	2.5YR4/1	赤灰	砂目跡	
	109	19	X255Y250	I層	唐津	鉢	10.5		10.5	17C後~18C		7.5YR5/4	にぶい黄	2.5YR4/1	赤灰	砂目跡	
	110	19		I層	唐津	須鉢	11.2		11.2	17C後~18C		2.5YR4/4	にぶい赤褐	2.5Y8/2	灰白	内面刷目(単位は不明 かつごとくは14条以上 左回り)	
	111	19	X239Y234	カクラン下溝	唐津	碗	10.0		10.0	17C後~18C		2.5Y8/2	灰白	7.5YR4/2	灰褐		
	112	19	X240Y234	I層	唐津?	碗	7.0		7.0	17C後~18C		2.5Y8/2	灰白	2.5Y7/4	浅黄		
	113	19	X240Y233	U字溝カクラン	唐津?	皿	4.0		4.0	17C後~18C		2.5Y8/2	灰白	10YR7/4	にぶい黄橙	3ヶ所 胎土目跡?	
	114	19	ITr No.2		唐津	皿	3.4		3.4	17C後~18C		5YR6/8	橙	5Y6/3	オリーブ黄		
	115	15	X8Y21 IIIa層		須恵器	蓋	12.6	2.0	6.0	古代		5Y6/1	灰				

※法量の数値は残存部が少なく計測不能な場合は空欄とした。
また、推定復元の場合()付とした。
土製品の法量は左から長さ, 幅, 厚さ, 重さとした。

第13表 若栗中村遺跡 石製品一覧

挿図	遺物	写真図版	地区	出土地点	種類	石材	法量(cm・g)			
							長さ	幅	厚さ	重さ
13	24	34	C1	X13Y50 III層	打製石斧	デイサイト	12.1	9.3	1.9	274.62
	25		C2	X30Y28 I b層	打製石斧	粘板岩	9.2	5.2	1.3	81.75
30	97	36	C1	X14Y46 排水溝	砥石	流紋岩	11.3	2.7	1.6	85.38
	98	36	C1	X15Y44 III層	砥石	流紋岩	4.8	3.9	1.2	37.49

第14表 若栗中村遺跡 金属製品一覧

挿図	遺物	写真図版	地区	出土地点	種類	材質	法量(cm・g)				備考
							長さ	幅	厚さ	重さ	
31	116	20	C1	X15Y45 III層	鉄塊	鉄	4.8	5.6	2.0	77.6	
	117	20	C1	X30Y40 III層	塊状	鉄?	10.3	3.7	3.8	190.5	
	118	20	C1	X28Y62 排水溝	鏃	鉄	15.0	4.2	1.6	139.6	
	119	20	A3	X252Y243 I層	銭	銅	2.3	2.3	0.2	1.7	寛永通宝

第IV章 舌山遺跡

1 概要

舌山遺跡は、黒部川左岸の扇状地西端、宮野山の丘陵裾部に位置する。北東側にある黒瀬川と南西側の宮野山の間広がる遺跡で、以前から縄文土器の散布地として周知されていた。平成14（2002）年度に行われた分布調査で、遺跡範囲は西南側丘陵斜面まで拡大された。今回の調査区は市道長屋・舌山線から丘陵裾までの範囲で、東側をA1地区、水田1枚を挟んで丘陵裾部をA2地区としている。検出した遺構は、竪穴建物3棟、流路、土坑、倒木痕である。竪穴建物は川岸に点在しており、出土遺物から縄文時代中期後葉の集落跡と考えられる。なお、A1地区S I 1で検出された石組炉は、黒部市教育委員会により黒部市立若栗小学校に移築復元されている。また、調査終了後に、A2地区南側から県道下垣内・前沢線までの丘陵斜面地を対象に包蔵地確認調査を実施した。調査結果を踏まえA2地区南側にさらに集落跡が広がるものと想定されたが、後世の削平等を受けており、遺構・遺物は認められなかった^{注1}。

2 基本層序

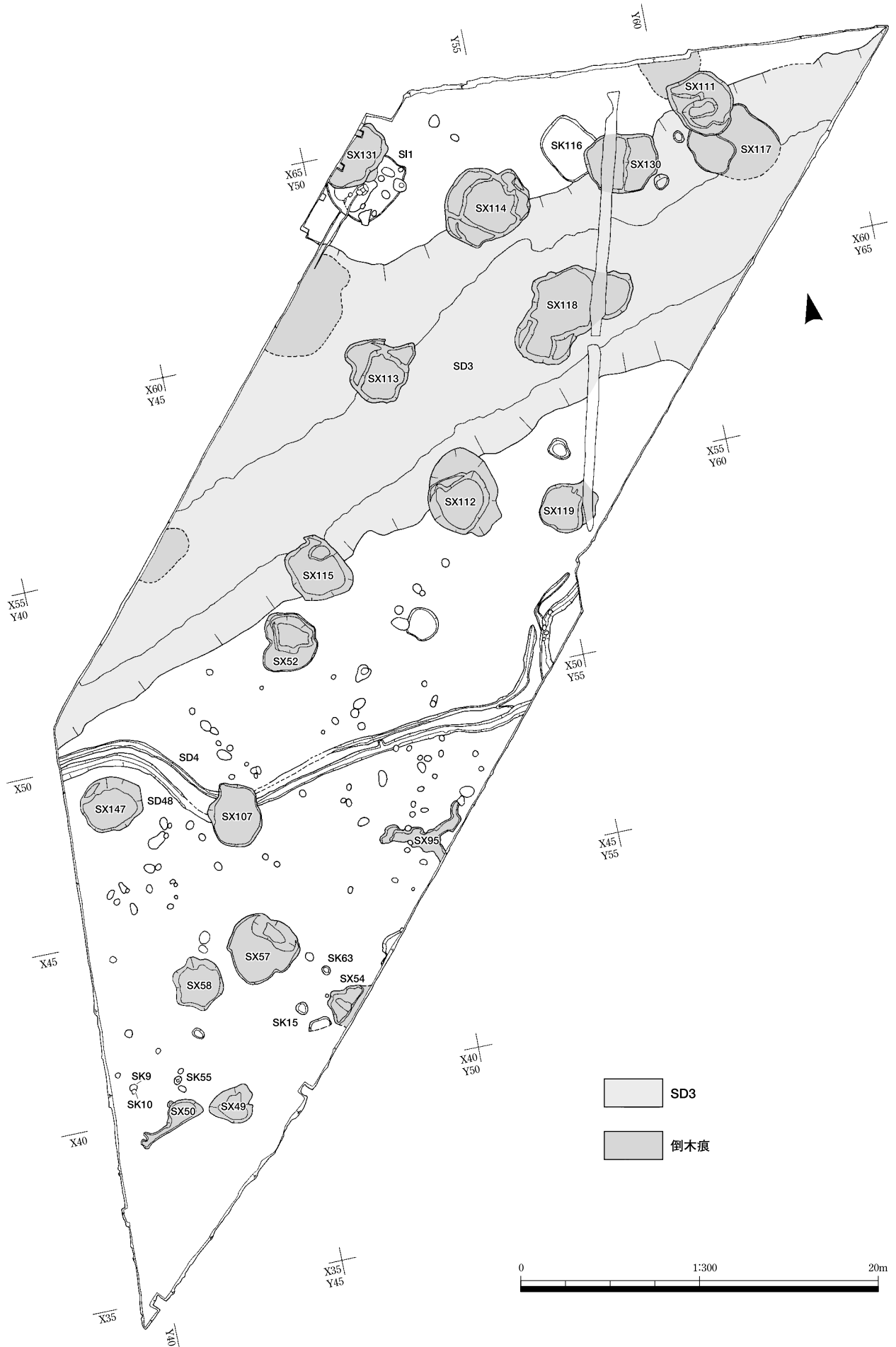
A1・A2地区ともにほ場整備等による削平等を受けているが、基本層序は概ねⅠa層：灰オリーブ色砂質シルト・黄灰色粘土質シルト（表土・耕作土）、Ⅰb層：橙色粘土と暗灰黄色砂の互層・灰色シルト（洪水堆積層・盛土）、Ⅱ層：明黄褐色砂質シルト（遺構検出面）、Ⅲ層：砂礫層（地山）となる。粘土と砂の互層であるⅠb層はA1地区及びA2地区の北半でみられ、昭和9年の黒部川大洪水の所産と考えられる洪水堆積層である。両地区ともに、2002年の包蔵地確認調査で確認された遺物包含層（黒色シルト）は、部分的な堆積で、面的には広がらない。A2地区では、ほ場整備等による地形改変のため、表土直下がⅡ層となる。また、A2地区中央部は近現代の河川の合流地点となっており、攪乱が激しく深い所では1.5mに及び、地山砂礫層となる。近現代の河川のうち北側に位置する流路（SD271）はⅠb層に覆われており、南側の流路はⅠb層を切り込んでいる。これらの流路によりA2地区では、調査区北端と南端のわずかな微高地状の部分でのみⅡ層が認められる。

3 遺構・遺物

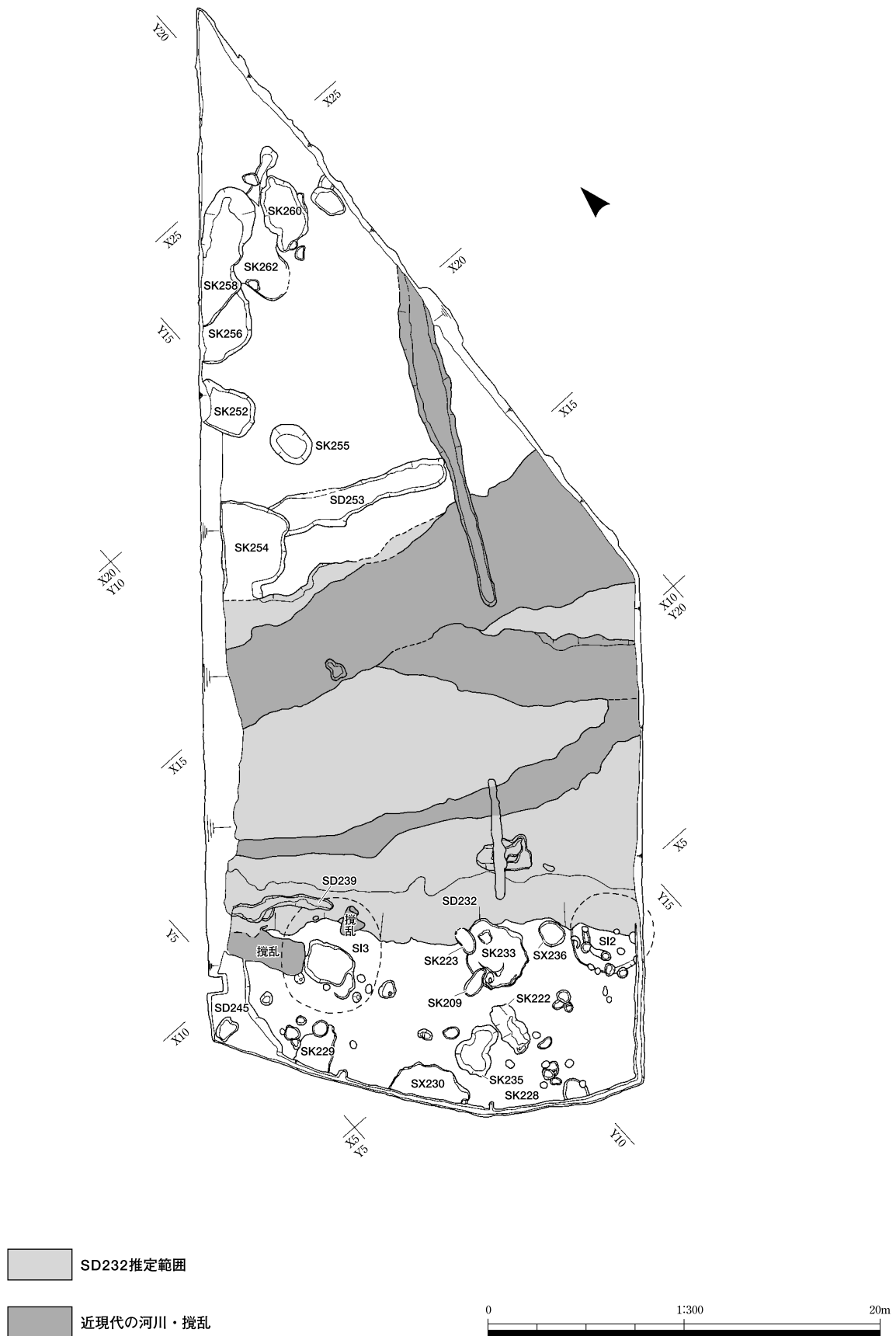
A 竪穴建物

1号竪穴建物（S I 1、第34・50図、図版22・23・36）

A1地区の北端に位置する。北側はS X 131（倒木痕）に切られているが、一辺約4.0mの隅丸方形を呈し、深さは0.12mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。中央やや西南よりに石組炉（S K 120）がある。掘形は長軸2.2m、短軸0.55m、深さ0.15mの楕円形を呈し、30cm～45cmの河原石を4個組み合わせている。石組の周囲は褐灰色粘土質シルト、炭化物混じりのにぶい黄褐色シルトで固められる。石の内側で東西0.3m、南北0.2mを測る。石組の西側に長さ40cmの河原石が1



第32図 舌山遺跡 遺構全体図 (1:300)
A1地区



第33図 舌山遺跡 遺構全体図 (1:300)
A2地区

個あり、倒木痕により壊されており定かではないが、複式炉であった可能性がある。床面では貼り床、貯蔵穴等の施設は確認していないが、柱穴と考えられるS P 122・S P 124・S P 126を検出している。S P 124は直径0.5m、深さ0.5mを測り、竪穴建物の東南辺中央にあることから、支柱穴と考えられる。出土遺物は、床面から若干浮いた状態で、埋土中から出土している。土器は全て小片となっているが、縄文時代中期後葉の串田新式のものとする。石製品では、石皿(255)と砥石(254)が出土している。254・255ともに砂岩製。

2号竪穴建物（S I 2, 第35・37図, 図版25・27）

A 2地区の南東側、S D 232の落ち際に位置する。北側1/3は近現代の河川により削平され、東側は一部調査区外になる。残存する大きさは、長さ3.2m、幅2.1m、深さ0.25mを測り、直径3.4m前後の円形を呈すると思われる。埋土は黒褐色粘土質シルト、黒色粘土質シルト、暗灰黄色粘土質シルトである。壁際から0.7m内側に西からS P 278・277・275・273・274の5個の柱穴を検出しており、削平された北側にも柱穴が配されていたと考えられ、円形に並ぶものと想定できる。S P 277からS P 278とS P 275へはそれぞれをつなぐように浅い溝（S D 279）がのびる。削平を受けているため、炉、貼り床等の施設は確認していない。出土遺物は、床面直上及び、10cm程浮いた状態で縄文土器（1～28）が出土している。2は沈線と半截竹管による半隆起線文および隆帯上の連続刻みで構成される。中期中葉（古府式）のものか。1は平口縁深鉢で、口縁部に平行隆帯と連続刻みをもつ弧状隆帯が巡り、ボタン状の突起から1条縦位の隆帯が垂下する。器形を復元できたものは1のみで、その他は大半が破片である。3・4は隆帯区画内を縦位の短い沈線で充填する。7・8は斜縄文の深鉢。12～14はボタン状突起をもつ。13は隆帯区画内に綾杉文。16は隆帯上に刻みを施す。18・19は隆帯上に刺突。22は葉脈状文。23・24は斜縄文を施文後に縦位の隆帯を貼り付ける。28は深鉢底部。底部外面に網代圧痕が残る。概ね中期後葉の串田新II式頃のものと思われる。

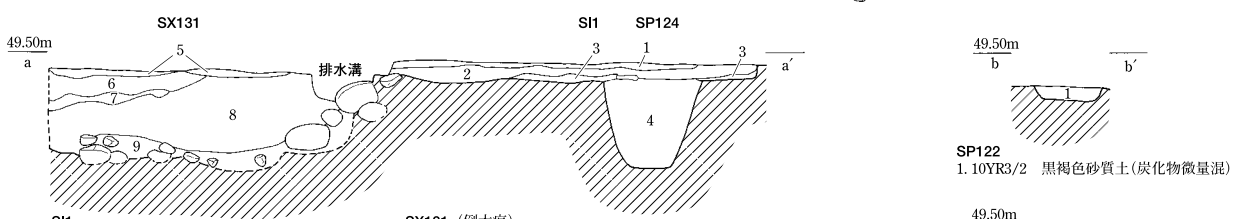
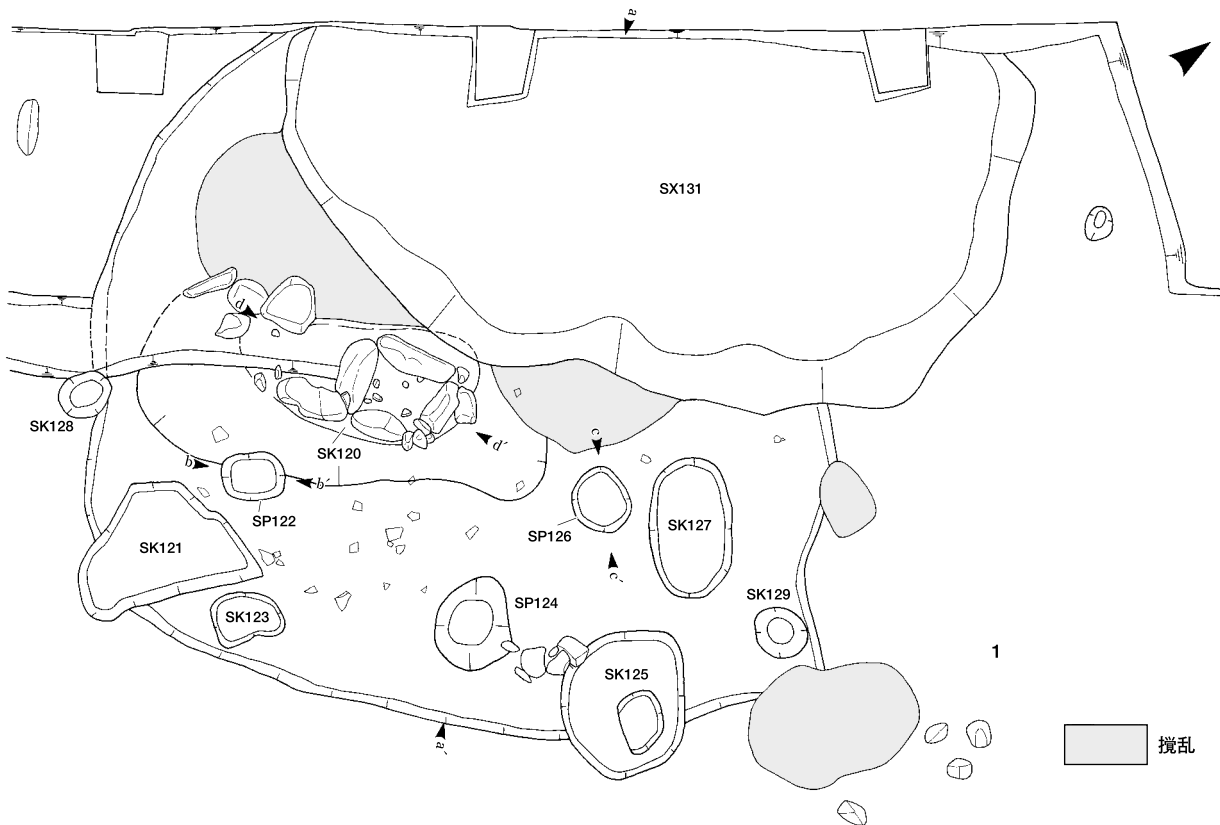
3号竪穴建物（S I 3, 第36・37図, 図版25・26）

A 2地区の南西側、S D 232の落ち際に位置する。ほ場整備による削平と攪乱を受けているため、平面プランは確認していないが、柱穴及び石組炉の配置や周辺の地形等から直径5m前後の竪穴建物と想定した。建物のほぼ中央部は、長さ2.2m、幅1.8m、深さ0.2mの隅丸形状に一段深くなり、中央よりやや北東側に石組炉が据えられる。石組の周囲はオリーブ褐色砂質シルトで固められている。石組の東半分は削平を受けて破壊されているが、直径0.6mの円形を呈していたと考えられる。石組の内側表面には被熱を受けた痕跡が認められ、底面には土器が敷き詰められている。土器はほぼ深鉢一個体で、5～10cm大に割って敷かれているが、被熱痕跡は認められない。柱穴は、段差を囲むように、S P 206・S P 267・S P 268・S P 272・S P 280の5個を検出しており、すでに削平された柱穴がある可能性もあるが、円形または亀甲形に並ぶものとする。出土遺物は、石組炉内の縄文土器(29)がある。29は口縁部が緩く外反する器形の深鉢。口縁下の沈線が部分的に幅広になることから、波状口縁になると思われ、頂部は4つに復元できる。口縁部はやや幅広の横位の平行沈線、および互い違いの楕円形区画（工字状風）7段で構成され、胴部下半は斜縄文が施文される。串田新I式か。県内では南砺市西原遺跡出土土器に文様構成などが類似する^{注2}。

B 溝・流路

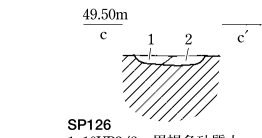
3号流路（S D 3, 第38・39・48～50図, 図版23・26・27・31～36）

A 1地区の北半に位置し、北東角付近から南西方向に流れる自然流路。最大幅12.5m、深さ0.4～0.6m、最深1.0mを測り、埋土は砂礫混じりの黒色砂質土、黒褐色砂質土、褐色粗砂の水平堆積で、黒

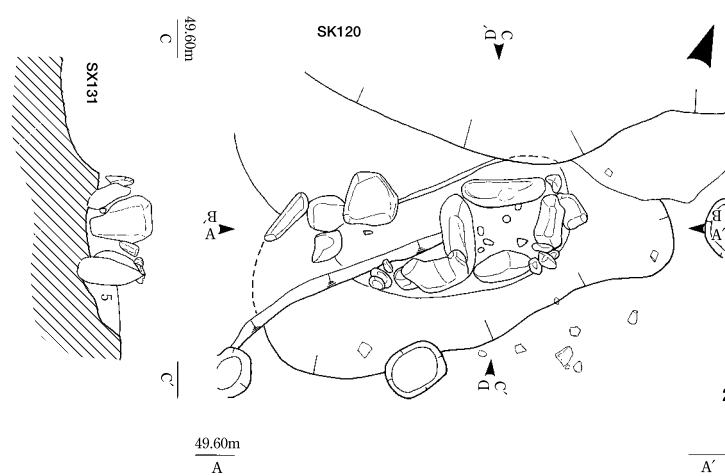
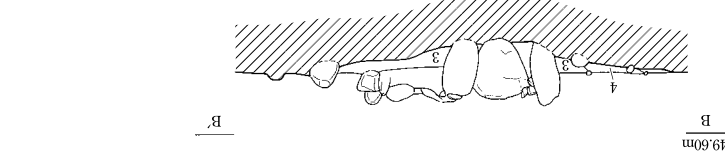
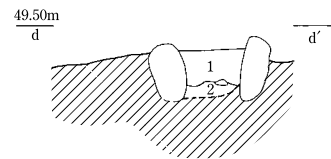


- SI1**
1. 10YR2/1 黒色砂質シルト
 2. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
 3. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
- SP124**
4. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト(炭化物混)
- SX131 (倒木痕)**
5. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト(10YR6/1 褐灰色シルト20%混)
 6. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト
 7. 10YR2/1 黒色粘土質シルト(2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト30%混)
 8. 10YR2/1 黒色粘土質シルト
 9. 2.5Y5/4 黄褐色粗砂(礫20%混)

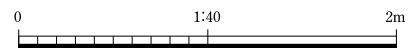
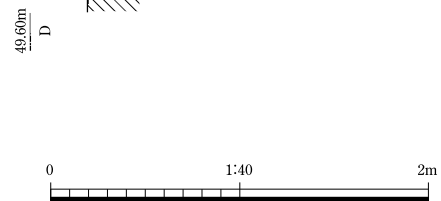
- SP122**
1. 10YR3/2 黒褐色砂質土(炭化物微量混)



- SP126**
1. 10YR3/2 黒褐色砂質土
 2. 10YR4/4 褐色砂質土



- SK120**
1. 10YR1.7/1 黒色粘土質シルト
 2. 10YR1.7/1 黒色粘土質シルト(砂分多く、炭化物多量混)
 3. 10YR4/3 にぶい、黄褐色砂質シルト(炭化物混)
 4. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト
 5. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト



第34図 舌山遺跡 縄文時代遺構実測図
1. SI1 2. SK120(石組炉)